
ゼロのなく頃に

アホリエッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロのなく頃に

【Nコード】

N1286V

【作者名】

アホリエッタ

【あらすじ】

ひぐらしのなく頃にとゼロの使い魔のコラボです。

舞台はハルケギニアに移動しました。

部活メンバーが異界でも・・・。

ゼロ隠し編(前書き)

ゼロの使い魔とひぐらしのなく頃にのコラボSSです。

ゼロ隠し編

ちゅどーーん、ちゅどーーん。

ここはハルケギニアのトリステイン王国。魔法学園の春の恒例、使い魔召還の儀式会場。

殆どの生徒は使い魔を召還していたが。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ、ヴァリエール。

彼女だけは未だに虫の一匹すら召喚出来ていなかった。

「ゼロのルイズ、いい加減にしろよ、もう他の生徒は全員終わったぞ。」

「ウツサイわね。もう少し待てないの？

アンタ達に負けない凄いい使い魔を召還してみせるから、少し待ちなさいよ、」

「ミス・ヴァリエール。そろそろ時間も押して来ました。

後一回だけ許可しますが、それでムリなら明日にしない。」

「ミスタ・コルヴェール。では後一回だけ。

もう少しだと思いますので、後一回だけ許可してください。」

「分かりました。頑張りなさい。」

ルイズはアセっていた。

他の生徒は全員使い魔を召還出来たのに。私は未だにアリの子一匹呼べない。

このままでは退学になってしまう。

お父様やお母様、姉様達に申し訳が立たない。何としても。。

「この世のどこかに居る私の使い魔よ、お願いだから私の元に来て。お願い。」

そしてサモンサーヴァントの鏡が目の前に浮かぶ。

「やったわ、コレで私の使い魔も出て来てくれる。。」

そう思ってたのに、いきなり、鏡から男性みたいな手が出て、私の手を握り締めて引きずられてしまった。

「ミス、ヴァリエール!!!!!!」

コルベール先生が異常事態に気づき、杖を腰に挿し、私の足を握り何とか私を引きずられない様にしてくれました。しかし、力はアチラが強いのか私はズルズルと鏡の中に。ついでにコルベール先生も。。

「ルイズとミスタ・コルヴェールが消えた。」

「大変だ、他の先生に知らせないと。」

会場は大騒ぎとなり、魔法学園のほかの先生、そして校長のオールドオスマンもめったに出ない校長室から会場に来ました。

やがて国の査察も来て、使い魔召還の儀式は危険と指定され、オールドオスマンは危険を予知出来なかった無能校長として解雇。魔法学園もヴァリエール公爵、

そしてルイズの親友のアンリエッタの抗議でトリステイン魔法学園は閉鎖されてしまった。

学園の生徒はおのおのの領地に帰り、学園の平民も解雇。

使い魔召還の儀式は王族のみの秘法とされてしまった。

あまりにも危険と言う事で、行ったモノは異端審問される事になるのは後の事。

ゼロ隠し編（後書き）

ハルケギニアからルイズとコルヴェールが消えました。
次回からが本編です。

ゼロ隠し編 いち(前書き)

舞台は雛見沢です。

ゼロ隠し編 いち

ココはXX県、鹿骨市の寒村、雛見沢。

今日もアバラ屋みたいな学校、雛見沢分校に圭一、魅音、レナは仲良く通ってた。

そして、珍しく沙都子より早く登校してた梨花は。

「もう、皆に隠すのは止めるわ。

何としてもこの運命の輪廻から私は脱出するの。

羽入、アンタも今回は全面的に戦うのよ。」

「リカ、アイアイサーなのです。今回でボクの力も打ち止めです。黒幕はもう分かっちゃいましたからね。

何とかこの輪廻から脱出するのです。。。ン?????」

「????リカ、何かボクのと違う波動を感じました。場所は近くです。」

「へ????羽入のとは違う波動?？」

「ハイなのです。

ボクがリカを巻き戻しする時の波動に似ていますが、それとは違う波動なのです。」

「何か物騒ね。もしかしたら違う次元の波動?？」

「何とも言えません。

ですが、悪い予感もするのです。リカ、ボクの後を付いて来るので

す。」

「分かったわ。すぐに行きましょう。」

リカは羽入と共に学校を飛び出した。

その頃。

「オッ、何だ？こりゃ。」

「ケイちゃん、昔の刑事ドラマの名セリフを言わないでよ。オジさんのツボに来ちゃうわ♪」

「いや、魅音、目の前に変な鏡が浮かんでいるんだよ。
何かヤバイ感じするんだけど。
オワooooooooooooッ。」

「レ、レナ、ケイちゃんが、変な鏡に引きずられてる、ヤバイよ。」

「はうううう。この鏡カワイイ。お、お持ち帰りいい。」

「ちよっ、レナそれ所じゃないって。頼む、助けてくれええ。」

丁度その頃、羽入とリカも到着。

「羽入、アレでは？」

「リカ、間違いないのです。違う世界からの力の介入です。
このままでは圭一が異世界に連れ去られてしまいます。」

「何ですって！！圭一はこの世界のキーマン。
何としても守らないとまた終わってしまうのです。」

「リカ、圭一の足を掴んで、何とかこの世界に残すのです。」

「話してるヒマは無いわ。羽入、圭一の足を掴むのよ。」

「アイアイサーなのです。」

リカ、羽入（実体化しています。転校生の触れ込みで転入予定）、
レナ、魅音は四人で圭一の足を掴み、オーエスオーエスと叫びなが
ら、

圭一を取り戻そうと必死です。そして。。。

ズボン。。。

妙な音と共に圭一が鏡から脱出すると、
見た事も無いピンクの髪の毛の女の子とハゲの中年が。。

「イタタタ。何なの、コレ？？」

「ミス・ヴァリエール。大丈夫ですか？」

「ミスタ・コルヴェール。何とか。

それにしてもココは??」

「コココココ、ここはどこ?? 魔法学園はどこ??」

「ミス・ヴァリエール。落ち着いて。すいません、その少年。ココはどこですか？」

圭一はいきなり目の前の現れた二人にビックリ。特にピンクの髪の毛なんて見た事も無い。

「ああ、すいません。ココは鹿骨市、雛見沢と言う村です。オレは前原圭一と言います。」

「ヒナミザワですか? 聞いた事ありませんね。

所でトリステインとかハルケギニアとか言う国はご存知ですか?」

「ハルケギニア???? どの海外か分かりませんが、聞いた事もありませんね。

それにこの国は日本、外人さんならジャパンで通じますが。」

「ニホン??? ジャパン??? どの田舎よ、ソレ。聞いた事も無い田舎ね。」

「いや、雛見沢は田舎で間違いないけど、日本は世界でも有数の先進国だぞ。」

「ニパー。ボクは古手リカと言います。

貴方達はもしかして他の世界から来たのでは？」

「ほほ、リカさんですか。

そうですね。ココは私達の世界とは違う空気を感じます。

申し遅れました。私はコルヴェールと申します。

トリスティン魔法学園で火の魔法の教師をしています。

コチラは学園の生徒、ミス・ヴァリエールと申します。」

「魔法学園ですか？ボクたちの国では魔法使う人はいないので。もし良かったら何か魔法見せて頂けません？」

「分かりました。では。ウルカーノ。」

コルヴェールが火のドット魔法を唱えると、杖から火の玉が出て、宙に消えたのです。

「パチパチパチ。凄いです。初めて見たのです。」

念話で意見を羽入とリカが会話を交わす。

（リカ、あの魔法は宙を彷徨う霊の力を集めて発動しています。）

（やはりね。この世界とは違う世界の住人みたいだけど、魔法は使える。）

羽入、彼等を山狗に対抗するための戦力には？）

（出来ます。ただ彼等にもメリットが無いと協力出来ないと断られる可能性があります。）

（そうね。ヨシ、決めたわ。今日は学校をサボって古手神社で皆にすべてを話すわ。）

（いいと思います。ただ、神社では誰かに聞かれる可能性も高いのです。

山狗が監視してると思いますし。）

（そうね。なら魅音の家ならどう？）

（OKです。アチラなら山狗の監視もユルユルです。でもこの方達を見つかりとヤバイと思います。特にピンクの髪の毛なんて。）

（そ、そうね、さすがにピンクブロンドなんて居ないわ。なら、とつとミオンの家に行く様にしましょ。）

（アイアイサーなのです。）

「ミィ、この方達に色々と現状を認識して欲しいし、混乱してると思うのです。

ですので、魅いの家に移動しませんか？

学校には緊急事態なので、今日は休ませて貰うと告げるといいのです。

沙都子、悪いけど、先生に急用で休ませて下さいとお願いして来て欲しいのです。

OKが出たら魅いの家に来て欲しいのです。」

そしてボクは魅音にそっと耳打ちして・・・。

「ミィ、今日は圭一の隣は魅いに明け渡すのです。ですから、協力してくれませんか？」

と、言うと。。

「わ、分かったよ。オジさんの家ならバツチャも今日は鹿骨に行ってるから居ないし、

お手伝いさんも居ない。

ウチで話しようね。ケイちゃん、行くよ、」

そう言うとき魅音は真っ赤になって圭一を引っ張ってズンズン歩いて行ってしまった。

おーい、子種植えるんじゃないよー！。

そう言うとき魅音はアワアワと慌ててズッコケてしまった。

ザマーミロ。ケッ。

「ミィ、コルヴェールさん、ルイズさん。

色々聞きたい事や情報交換したいので、良かったら魅音の家に行きませんか？

色々とお困りでしょうし、協力も出来ると思います。」

「ハ、ハイ。分かりました。お世話になります。」

「フン、仕方ないわね。行ってあげるわ。」

「は、はうううう。ツンデレ。。カワイイ。。お持ち帰りいいい。

」

「レナ、今日は暴走はナシよ。ちょっと相談したい事もあるから。」

「リカ、ボクも行くのです。あ、皆さん、始めましてなのです。ボクは羽入と言います。リカの遠い親戚なのです。宜しくです。」

こうして異世界から雛見沢に来てしまったルイズ一行は園崎家に移動する事になりました。

カレー教のセンスが明日は怒るだろうな。

私達は魅音の家に入ると、羽入に周囲の警戒を頼んだ。

オヤシロレーダーはある意味最強のレーダーだしね。

「圭一、魅音、レナ、沙都子。今日はありがとう。」

そして異界からのお客さん、ルイズさんとコルヴェールさん。始めまして。

ボクは古手リカと言います。」

「始めまして。私はトリステイン魔法学園の教師、ジャン・コルヴェールと申します。」

「フン。私はトリステイン王国のヴァリエール家の三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。」

「スゲーー。ホンモノのツンデレだああ。」

「か、カワイイ♪お持ち帰りいいい。」

「レナ、暴走は後にして。圭一もフザケルとオシオキするわよ。」

「リカちゃん、何か大人びた言い方してる。」

「魅音、空気読んで発言してね・・・。」

私は魅音に釘を刺すと何故かのの字を畳に書き出した。
相変わらず空気が読めないヤツね。魅音・・・。

ルイズさんとコルヴェールさんの話を聞くと、彼等は魔法学園で使
い魔召喚の儀式をしてたそうだ。
そして、召喚の鏡が出たのだが、何故かルイズが鏡に引きずり込ま
れてしまい、

コルヴェール氏も一緒に引きずり込まれたとか。

間違いないわね。

アレが魔法の鏡だったんだ。

「にぱっ♪分かったのです。」

コルヴェールさん、ルイズさん。貴方達の魔法の鏡がコノ世界に來
てたのは間違いありません。

貴方達の召喚しようとしてたのは、そこにいる、前原圭一です。
彼が貴方達の世界に引きずり込まれようとしてたのを私達は目撃し
ています。

私達が彼を引き止めるために、鏡から引きずり出したら、貴方達が
出て來たのです。

これはどうしようも無い悲しい事故なのです。」

「そ、それって・・・。」

「サモンサーヴァントがこの異界に通じてたと言う事ですか？」

「その通りなのです。ボクは巫女と言うアレな職業ですので、割と異界には躊躇しません。

他の方だと、気が触れたと思う事でも、ボクなら大丈夫なのです。どうかボクを信用してくれませんか？」

「そうですね。私達はこの世界では、何の繋がりもありません。貴方達を頼るしか無いですから。」

「仕方ないわね。頼ってあげるわよ。フン。」

「圭一、魅音、レナ、沙都子。今日は大切な話があります。特に魅音。今日は絶対に茶化さずにボクの話聞いて欲しいのです。沙都子、ボクの隠してた秘密を話します。今まで言えなくてゴメンなさいね。」

「リカ、私達は親友ですよ。言えなかった理由も話してくれるのでしょ？」

でしたら、いいですわ。貴女の事は何があっても信頼します。」

「リカちゃん、オジさんも真剣に聞くからさ。話してよ。」

「リカちゃん、オレもレナもリカちゃんは信頼してる。部活で戦いあった仲間だろ？話してくれよ。」

「分かりました。では、お話します。

古手リカの百年に渡る雛見沢の旅の話です。」

私はそれから彼等にすべてを話した。

リカが百年にも渡り、死と生の繰り返しをして来た事。

そしてそこにいる羽入こそが、雛見沢の信仰する神、オヤシロ様と
言う事。

レナも一時発症しかけたが、何とか留まってくれた。

異界からのお客様の二人も私の話にビックリしたが、自分達の世
界も普通では無いので、

理解はしてくれたらしい。

私達の山狗に対する反撃の狼煙はもうすぐ上がる。

ゼロ隠し編 いち（後書き）

ルイズ達も部活仲間と共に山狗に反撃します。

ゼロ隠し編 にい (前書き)

リカの告白です。

ゼロ隠し編 にい

圭一です。

ピンクブロンドのルイズさんにもビックリしたが、リカちゃんの告白にはさらにビックリ。

リカちゃんが百年も生死を繰り返して来たなんて、最初は冗談と思った。

だが、彼女の告白はウソと思えなかった。

ウソを言う意味も無い。

それに羽入ちゃん。

彼女がオヤシロ様なんて・・・。

どう見てもアワアワとしたボケた幼女にしか見えない。

レナなんかツボに来てお持ち帰りしようと企んでいる。

だが、証拠見せて！と言うと、彼女、いきなり姿が消えたのだ。

そして巫女服を着た威厳ある姿で現れたからもう大変。

レナもオヤシロ様ああああ。と大騒ぎ。

あの角もオヤシロ様の証だとか。

はああ。あの可愛い子がオヤシロ様ね？

ここは信じるべきでしょ。

今日は本当に驚きの一日だ。

異世界に拉致されそうになったかと思えば、異世界の訪問者が逆に来てしまう。

リカちゃんの驚愕の告白に、オヤシロ様出現。

もう何が出てても驚かないぞ。

「リカちゃん、君の言う事は全面的に信じよう。
俺たちは仲間だ。それも唯の仲間では無い。」

あの部活を通じて、恥も外聞もすべてを捨てて戦った仲間だ。俺たちが着いてる。リカちゃん、俺たちと戦おう。

一本の矢は簡単に折れるけど、十本に束ねたら簡単には折れない。折れない心が俺たちだ。」

圭一は相変わらず女殺しだ。ああ言われたら何も言えなくなるでは無いか。

魅音なんか見てよ。トマトみたいに真っ赤な顔してる。

ああ、沙都子も……。

本当にダメな男ね？女にあんな顔させるなんて。許せないわ。

「ミー、圭一、ありがとうございます。」

前の世界の圭一も素晴らしかったです。

私達が叔父に追い詰められて、どうしようもなくなってたのに、沙都子のために

お魍とダンビラ振り回して戦ってくれたのです。」

「へっ？けいちゃん、バッチャと戦ったですって？」

「そうなのです。」

お魍が圭一を挑発したので、圭一はダンビラでお魍に切りかかったのです。

あの圭一は本当にカッコ良かったのです。」

「へええ。オレって前の世界ではそんな事してたんだ。」

「ハイなのです。ですが、最後に……。」

「まだ話してない、事件が起きたんだ。」

「・・・・・・・・。」

「リカちゃん。」

俺たちは何を君が言っても、信じると決めた。どんな突拍子も無い事でもね。

信じてくれないか？リカちゃんが話せない気持ちも分かるが、俺たちを信じてくれ。」

「リカ、圭一の心は前の世界の圭一と同じです。まずは信じて話しましょう。」

「リカちゃん、オジさんは空気読めない女だけどさ、リカちゃんのは信じる。」

けいちゃんも言ってたけど、部活の仲間だよ。

みんな、アノ部活を通じて裏表を知り尽くしたじゃ無いの？

まずは信じて。お願い。」

「リカちゃん、レナもリカちゃんの事、信じます。」

レナの事も信じてくれないかな？かな？」

「リカ、私はリカの何なの？リカは私の親友でしょ？」

圭一さんが前の世界で私達のために戦ってくれたと言う話も最初はビックリしましたが、

圭一さんならありえますわ。リカ、この世界ではリカは生き残ったのでしょ？」

でしたら、私達を信じて欲しいのです。」

「圭一、魅音、レナ、沙都子、羽入。ありがとう。」

そうね。まずは仲間を信じると言う事を忘れていたわ。

圭一、アンタはやっぱり女殺しよ。前の世界でも散々、私達の心を乱してくれたわね。」

「へ???オレって誰も口説いた事ないぜ。」

「もういいから、黙ってなさい。ルイズさん、コルヴェールさん、これが私達、部活の仲間です。」

異世界から来られたばかりで理解出来ないと思いますが、私達の仲間になって頂けませんか?」

「リカさんでしたね。私達もこの世界に来たばかりで、何を協力出来るか分かりません。ですので、お互いの情報を交換しあうべきと思います。」

「フン。分かったわよ。この大貴族の私も協力してあげるから感謝しなさいっ。」

「あ、ありがとう。ありがとう・・・。」

ボクは嬉しいのです。ルイズさん、コルヴェールさん、ボクの話聞いてくれますか?

ボクは通産百年にも渡り、殺されては時間を撒き戻していたのです。毎回、殺されて、昭和58年の夏を越せなかったのです。

ボクはこの姿ですが、実際年齢は百歳を超えています。

そこに居る圭一がいらない夏もありました。

レナの居ない夏もありました。

魅音が入れ替わらない夏もありました。・・・」

それからリカちゃんとは色んな夏の物語を話してくれた。凄い話ばかりで、全員息を吞んでしまった。

異界からのお客さんの二人もあまりの壮絶さにビクビクしてた位だ。
リカちゃん。
俺たちはリカちゃんを信じるぜ。

ゼロ隠し編 にい（後書き）

次回はルイズ達も仲間となります。

ゼロ隠し編　さん（前書き）

前置きが長いですが、お許しを。

ゼロ隠し編　さん

ルイズよ。フン。

異世界だなんて冗談じゃ無いわ。

何で公爵家三女の、こ、この私がこんなド田舎に来なくてはならなかったのよ。

本当に頭に来ちゃうわ。

でも、あのリカと言う少女の話には私もさすがに驚いたわ。

時間の輪廻の繰り返しなんて、私だったら気が狂うわよ。絶対に。

それにあのハニユウとか言う少女。

あれが神様なんて。

最初は冗談だと思ってたけど、姿を消して、威厳ある姿で現れたのにはビックリしたわ。

お、大きい声では言えないけどね。。。

スコシチビッタノ・・・。

ちょっと、その下卑た笑いした不届きモノ。

整列しなさい。

私が犬にオシオキするわ！！

「リカちゃん、すると鷹野さん率いる山狗と言うのが、この世界の黒幕なんだね？」

「そうなのです。ただ、ヤツ等はギリギリまではコチラに対して牙を隠しております。

前回は気づく寸前まで、分かりませんでした。

ボクは皆がヤツラに殺されるのを黙って見てるしか無かったです。

」

「俺たちも殺されたのか？」

「……そうなのです。最初は圭一でした。」

「俺か……」

「圭一は勇敢に戦っていました。ヤツラを数人は叩きのめしていました。」

ですが、影から鷹野が銃で圭一を射殺。

次が魅音、詩音。レナ。最後が沙都子でした……」

「ウソですわ。あの優しい鷹野さんが、私を殺すなんて冗談でしょう？」

「落ち着いて。沙都子。」

信じられない気持ちはボクも理解出来るのです。

ですが、本当なのです。ボクが信じられませんか？」

「そ、そうですね。リカが親友の私にウソを言うはずもありませんわ。」

ごめんなさい、皆様。リカ。話を続けて。」

「では続けます。」

ボクは皆が殺されるのを目撃した後、目隠しも麻酔も打たれず、鷹野にお腹をメスで引き裂かれたのです。」

「へ??? お腹を麻酔も打たれず？」

「ハイなのです。前々回までは、ヤツラの正体が分からず、不意打

ちされてしまいました。

前回はその反省を魂に刻むため、辛かったのですが、鷹野に麻酔は打つな！と厳命し、お腹を裂かれました。辛く痛く、苦しかったのです。」

「鷹野はまた何でリカちゃんを殺すの？」

「ボクは雛見沢症候群と言う、この村独自の風土病の女王感染者らしいです。

ボクを綿流しする事で、ヤツラはこの村の人間が発狂すると言われるてます。

ヤツラはそれを止めるためと称して村を壊滅させていたのです。」

「どうして鷹野さんは村を壊滅させてたのか分かる？」

「そこまでは、ボクも理解出来ないのです。

ただ、鷹野の背後には東京と言う隠れた組織があります。

鷹野は雛見沢症候群を研究するためにこの村に来てたのです。」

「すると、監督も？」

「ハイ。入江も鷹野の部下なのです。」

「すると監督も敵？」

「いいえ。入江は小物です。全然とは言いませんが、裏には関わっていません。

彼も毎回、殺されていましたから。」

「他の人も殺されてたの？」

「ハイ。綿流しの夜に富武と鷹野が殺されていました。ただ、鷹野は偽装でした……。」

それからリカちゃんは、色々と前回の経験を話してくれた。推測も多かったが、

全く情報も無い訳でも無かったし。

コチラの勝利条件は、リカちゃんを殺させずに、相手を捕縛する事。相手はプロだ。

中々厳しい。

だが、全く勝利条件が無い訳でも無い。

まず、俺たちは地の利があると言う事。

特に裏山には沙都子を作った、大量のトラップ郡がある。

アレを使わずに何時使う？

「オーホホホホ。確かにそうですね。

部活の仲間に使うには躊躇してたトラップも大量に秘蔵してますわ。加減ナシでいいと言われるのでしたら、それこそ致死量クラスのトラップもありますのよ。」

「オッ、ノッて来たね。さすが沙都子だ。」

「お任せください。手加減しないでいいと言われるのなら、部活仲間に使うのも躊躇してた、

必殺トラップをお見舞い致しますわよ。」

「スゲーなー。アレだけでも相当の破壊力だったけど、アレで手加

減してたって？

どんだけ凄いの作ってるのよ。沙都子は？」

「ルイズさん、コルヴェールさん、私達の話は以上です。

貴方達の何かをお願いする事はありませんが、

ヤツラに拉致されると貴方達にも被害が及びます。

どうか事が終わるまでは、この園崎家に待機して欲しいのです。」

「リカさん、貴女の話は理解出来ました。ですが、黙って見てろでは、我々には酷です。

私は火の魔法が使えます。そしてそこに居るミス・ルイズも爆発の魔法が出来ます。」

「フン。ワタシに黙って見てろって？冗談じゃないわ。

貴族はね。敵に後ろを見せないのを貴族と呼ぶのよ！！」

「スゲー。ルイズさんって貴族なんだ。」

「フン。平民のアンタ達は理解出来ないでしょうけどね。

ワタシに任せなさい。ドロ舟に乗った気持ちでね。」

「ごめんね。。ドロ舟じゃ沈むと思うんだけどね。オジさんは。」

「魅音、空気読め！！」

魅音が空気読めないのは前世から分かったが、相変わらずだ。

ルイズさんは使い魔召喚儀式に失敗すると、留年してしまうと言う事らしい。

だったら圭一が使い魔になればいいジャン！

と言う事で、ルイズの使い魔儀式が行われたのだ。
が。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔と成せ。」

ルイズは朗々と呪文を唱えすと圭一の額に杖を置いた。
そしてゆっくりと顔を圭一に近づけて来たのだ。

「ね。レナ。彼女、けいちゃんにナニをする気？」

「あ、あの体制だ。。。」

「ま、まさか？」

「チョッ、ルイズさん、顔が近いって!!」

「黙っていなさい。すぐ終わるから。」

ルイズは有無を言わず圭一にキスをしたのだ。

「イヤ~~~~!!圭一さん、不潔うう。」

「は、はうううう。圭一クンにチュウウウ。」

「け、けいちゃん。何でえええ。」

「・・・・・・・・・・。」

何と彼女は圭一にキスをしたのだ。

「お、終わりました。」

「サモン・サーヴァントは何回も失敗しましたが、
コントラクト・サーヴァントは成功しましたね。」

コルヴェールは嬉しそうに言った。

どうやら儀式の一環だったらしい。

しばらくすると圭一が左手を抑えて痛みを訴えた。

「い、痛てええ。」

「我慢なさい。ルーンが刻まれるだけだから。」

「イヤ、本当に痛い痛みなんだって。」

「フム。ルーンが浮き出たと言う事は、使い魔となったと言う事です
ね。」

圭一はルイズと契約した事により、圭一の家泊まる事になった。
だが、部活の仲間は承知しない。

「オジさんはけいちゃんが間違いを犯すといけないから、監視して

てあげる。

だからオジさんも泊まるね。」

「か、カワイイルイズちゃんに間違いがあつてはいけないの。だからレナも泊まるの。」

「フン。圭一さんの事だからスケベな事するに決まっていますわ。ワタシが見張ってあげますのよ。」

「チョッ、お前等。ウチはそんなに広く無いぞ。」

「だったら魅音の家はいかがですか？」

「オジさんの家なら部屋は沢山あるしね。オジさんはいいよ。」

こうして圭一はルイズの使い魔となり、ルイズとコルヴェールもそれと引き換えにボク達の仲間になった。

山狗め。

前回の恨みは絶対に仕返ししてやるわよ。

ゼロ隠し編　さん（後書き）

圭一が使い魔になりました。

デルフが居ません。何とか出来ないかな？かな？

ご存知の方も多いと思いますが、原作者のヤマグチノボル先生が、病気で臥せておられます。

何とか一日でも早く健康になられる事を願うのみです。

[http://www.mediafactory.co.jp/
bunko.jp/pwpwin/message/yamaguchi-
noboru/index.html](http://www.mediafactory.co.jp/bunko.jp/pwpwin/message/yamaguchi-noboru/index.html)

ゼロ隠し編 よん(前書き)

もう少し序章が続きます。

ゼロ隠し編 よん

圭一です。

ルイズさんの使い魔となったらいいです。

左手に見た事の無い文字が浮かんでおります。

そして山狗とか言う悪の組織と戦う事になりました。

威勢良く戦うぜ！と叫んだモノの、少しビビリが入っております。

それにしてもルイズさんの唇。

柔らかかったなあ。

ゲフツ・・・。

「アラ？圭一さん？こんな所に寝てたらダメですわよ。」

ドカツ！！

「けいちゃん、早く起きなさいよ。オジさんが作ったご飯食べないの？」

ボコッ！！

「は、はううう。圭一くん、寝てたらダメなんだよ。」

寝てると、お、お持ち帰りしちゃうんだよおお。」

ケツ、ザマー見ろなのです。

圭一がルイズさんのキスを思い出してるのはバレバレでした。

だから皆に殴られたり蹴られるのです。

「コルヴェールさん、ルイズさん、日本のご飯には馴染めないと思

いますが、

何とか食べてください。お箸は使えないと思いましたので、フォークとスプーンを用意しました。」

まずは腹ごしらえと言う事で、ボク達は魅いに、ご飯作って貰ったのです。

「このゴハンとか言う白い粒は美味しいのですか？」

「食べてみてください。とても美味ですよ。」

「何か変な形ね？このゴハンとか言うモノ。アラ？結構美味しいじゃない？」

「そうですね。パンとは違う美味しさがあります。」

「うちのお米はコシヒカリと言う日本でも最高級クラスのおコメですから。」

とても美味しいですよ。」

魅いは空気は読めないが、ご飯を作るのはとても上手。本当に空気読めないのが残念だ。

「おコメを一文字だけ入れ替えると・・・グギャツ！！」

「魅い、それはR18になるのです。」

やはり空気読めないわよ。

圭一は何を言おうとしたのか理解していないがレナなんか再度、魅いにレナパン入れてるわ。

「魅いちゃん、何を言おうとしたのかな？ かな？」

あーあ。レナを怒らせてしまった。
幻のレナパンが魅いに炸裂してた。

「レナさんのパンチって凄まじいですね。この炎蛇のコルヴェールでも見切れません。」

「コルヴェールさんって軍隊にでも居た事ありますか？」

「ええ、教師になる前までは。色々ありまして軍を辞め、教師となりましたが。」

「ウチの学校って鄙びた学校なので教師が一人しか居ないんですよ。落ち着いたら先生してくれると助かります。」

「それは素晴らしいですね。この世界の教師に私に向いているかは分かりませんが、ご協力出来たら嬉しいですよ。」

「あうあう、大丈夫なのです。ウチの学校は小学生から中学生まで居る混在学級です。」

絶対に教える項目はあると思います。」

「そうですか……。それは楽しみですね。」

「仕方ないわね。この公爵家三女のルイズも通ってあげるわよ。」

「にび〜〜♪とても嬉しいのです。ボク達の学校は子供も生徒も

少ないので、とても寂しいのです。

ルイズさん達が来てくれてボク達は嬉しいのです。」

しかし、それも山狗との戦いに勝たなければ水の泡。

夢でしか無い。

何としても鷹野率いる山狗に勝たないと。

「リカちゃま。オジさん考えたんだけどさ、山狗と鷹野さんの裏にいる組織って東京ってのは本当なんだよね。」

「本当なのです。ボクは色々と彼等と関わってるので、色んな話は聞いていました。」

「何故、鷹野さんが、綿流しをリカちゃまにするか、考えて見たんだけどね。」

彼女って何か追い詰められていない？」

「聞いた話では、鷹野が研究してた雛見沢症候群の研究が三年後には打ち切られる事になったそうです。」

「それかも知れないね？」

「と、言うと？」

「鷹野さんてプライドが凄い高そうじゃ無い？」

「ウン。確かに。」

「その高いプライドが今回の研究打ち切りでグチャグチャに潰されたと思うんだ。」

「ウンウン。」

「で、その潰されたプライドが逆にこの計画を立てる原因になったと思うんだよ。」

「どう言う事？」

「つまり……。」

皆の推測は殆ど的を得てると思った。

鷹野は傷ついてしまった。だから、逆に潰される計画なら自分で潰してしまえ。

その計画の裏には東京の一部の支持者の後押しが絶対にあったはずだと……。

「するとリカちゃんを綿流しする目的は？」

「それが分からないのです。」

多分、計画を潰される事をヨシとしない鷹野が何か利益を得るための行為と思うのですが。」

「オジさん、分かっちゃった♪」

「お、魅音、お前もか。」

「はうううう。レナ、分からないよおお。」

「おーほほほ。私も分かりましたわ♪」

「ミィ。ボクは分からないのです。」

「じゃ言うぜ。」

つまり？

「「東京の組織の誰かが、鷹野を操って、得しようとしてるのよ。」」

要するに鷹野を操る東京の組織の誰かが、彼女を操る事で利益を得ようとしている。

後で入江と富武にも相談しよう。

彼等なら、裏の情報を知ってると思うし。

そこへホルヴェールさんが口を挟んだのです。

「リカさん、貴女の言われる話を伺っていると私が関わった作戦と似ていますね。」

「どう言う作戦だったのですか？」

「私達の世界にはロマリアと言う国があります。

その国がある村に異端審問と言うあらぬ疑いをかけて、我々魔法研究所実験小隊を利用し、

村を殲滅してしまった事がありました。

私はその事実を知り、ショックで部隊を辞職。

教師の道に入ったのです。」

「どこの世界にも似た事があるのですね。」

「そうですね。でも放置してたらこの平和な村も滅ぼされてしまうのですよね。」

「そうなのです。ボクが死ぬ事で村が殲滅されてしまうのです。」

「かなりムチャクチャな話だけど、それを行う事で得するヤツが絶対に居るのだよね？」

「そうです。私達の世界でも我々を利用し、村を滅ぼす事で一部の貴族が得をしたと聞いています。」

やはり世界は違えど人間の考える事は似ていますね。
コルヴェールさんは頼りになりそうだし、ルイズさんも味方になってくれる。

さて、作戦はどうしようかしらん???

ゼロ隠し編 よん（後書き）

更新遅れてすいません。

ひぐらしの原作をやり直していました。

次回は温泉クン登場です。

ゼロ隠し編 二 お (前書き)

更新が遅れてすみません。

ゼロ隠し編 二 お

ボクは富武と入江に相談する事にした。

一応、内緒話なので、皆には遠慮してもらったのだ。

「ミィ、富武、入江。わざわざ呼び出してゴメンなさいなのです。」

「リカちゃんの呼び出しなら、出来る限り相談に応じますよ。」

「ありがとうございます。今日は真面目な相談なので、茶化したり質問はナシにして欲しいのです。」

それからボクは富武、入江に魅いの家で話した事を相談したのだ。

「ま、まさか鷹野さんが・・そんな事をするのはありえない。」

「そうですよ。リカちゃん。鷹野さんがリカちゃんを殺害するなんてありえないですよ。」

「富武、ボクが死んだら大変な事になるのですよね？」

「そ、そうだね。大変な事になる・・・と思うよ。」

歯切れが悪いがこれが富武なのだ。彼は自衛隊から派遣されてる監査役。入江は変態だが、

アレでも鷹野に次ぐ、雛見沢研究所のNO2なのだ。一応は。

幾多の世界で何度も富武には忠告した。

殺されるかも知れないから注意しろ、と。

だが言葉が心に届かず、毎回時報となりやがってるのですよ。富武は。

「富武、ボクは雛見沢のオヤシロ様の使いでもあるのです。

入江、少し危険な話をしますが、ボクは絶対に発症していません。不安と思うかも知れませんが、先に検査して欲しいのです。」

「分かりました。リカちゃま。」

入江に簡易検査してもらったのは、後で時間を取られたく無いからなのだ。

結果はシロ。当然なのです。

「入江、結果はシロだったでしょ？ボクは発症はしていませんね？」

「ハイ。簡易検査ですが、リカちゃまの検体は豊富にありますので、比べる必要も無いと思います。」

「では、今からボクが危ない話をしても発症はしていないと言う前提で聞いて欲しいのです。」

それからボクは鷹野が危なく脆い精神状態だと言う事。

そして、誰かに操られていないか調べて欲しいと頼んだのだ。

「富武、この前東京で鷹野はかなりボロクソに叩かれたのですよね？」

「う、ウン。確かに。」

研究とか色々、役にも立たない研究なんか辞めてしまえ！とか、彼女のお爺さんの事もかなり叩かれたらしい。

あ、コレは内緒だけど、彼女のお爺さんの高野一二三さんが雛見沢症候群の発見者なんだ。

彼女はその研究を引き継いだらしい。」

成る程。自分だけの研究だけではなく、祖父の研究もバカにされたため、東京の対立組織にでも、甘い言葉で誘われたのだろう。

魅音の推測が、珍しう得てたな。

「富武、入江。ボクは最近自分の身の危険を感じてたのです。今年は綿流しにボクが遭う確立が高いのです。」

ですので、ボクはしばらく身を隠す事になっています。」

「そうですか。確かにリカちゃんやまが綿流しに遭うと村が大変な事になりますからね。」

「皆が発症してしまうのですか？」

「う、ウン。それなんだけど。」

万一リカちゃんやまが殺されたりした場合、緊急マニュアルが執行され、村ごと抹殺されるんだ。」

「それで得する人間は絶対に居ると思うのです。富武、時間が無いのです。」

今年の綿流しでボクが殺されたら、有無を言わずに緊急マニュアルが発動してしまうのです。」

何とか対立組織が無いのか、緊急に調べて貰えませんか？」

「分かったよ。リカちゃん。山狗の小此木クンに調べて貰うから。」

「ダメなのです。小此木率いる山狗も鷹野の手先なのです。」

「何だって？」

「あの鷹野を懐柔する様な妖怪連中です。絶対に山狗も買収されています。」

「うーん。確かに・・・。」

「富武、富武も危険なのです。ボクだけでは無く、富武も殺される確立が高いのです。」

「どうか自分の身を守りつつ、鷹野の背後を調べて欲しいのず。」

「分かったよ。リカちゃん。」

何とか自分の身も危ないと脳裏に置いて貰わないと、また時報となってしまうのですよ。

富武は。

前回もその前も、何時も時報となっていやがるのです。

今回こそは時報になって欲しく無いのですよ。

まったく・・・。

「リカちゃん、ボクの方も注意しておきますね。」

「入江は何もして欲しく無いのです。下手に演技しても鷹野はカンがいいので、気づかれてしまいます。」

入江は、ボクが消えた後、病気で臥せっていると思わせて欲しいのです。」

「そうですね。リカちゃんが消えたとなると、絶対に大騒ぎになり

ますから。」

入江達と話してた所、背後からガサリと草を踏む音が・・・
山狗か？？

「んっふふふふふ。何やら香ばしい話をしていらっしやいますね。」

大石だった。

彼も毎回被害者になってたとか？

ボクは彼等が殺されてる頃は、既に気絶させられてたから、知らなかったのだが、

羽入の話だと、大石も殺されていたそうだ。

どうせ、羽入の力も今回で打ち止め。

恐いモノは無い。

ボクは百回も腹を鷹野に引き裂かれた女だ。

「お、大石さん、こんにちわ。」

入江は相変わらず小物だ。

大石程度にビビってたなら鷹野に勘付かれるでは無いか？

「入江、もう隠すのはナシにするのです。」

「り、リカちゃん・・・。」

「おんや？何か美味しい話でもされるのですか？ですが、その前に・・・。」

「リカちゃん、久しぶりだね？」

な、何と。

温泉、ゲフンゲフン。

あ、赤坂、赤坂だああ・・・。

よりもよって最後の世界で赤坂が来てくれたのだ。

だが、安心するのはまだ早い。

ヤツは以前、綿流しには来た癖に、近県の温泉に行きやがったので
す。

使えないヤツと思ったのは一回や二回ではない。

「あ、赤坂、赤坂。。。。」

「覚えててくれてありがとう。リカちゃん。今度は東京へ帰れなんて言わないだろ？」

「赤坂、あ、赤坂・・・」

「君の助け、ちゃんと覚えてたよ。あるいは一度忘れてたかも知れない。

でも、それを忘れたら絶対に後悔すると思ったんだ。

キミが教えてくれたから、雪絵に電話して注意する事で雪絵は助かった。

だからキミは雪絵とボクの恩人なんだ。

キミがどんな事を言ってもボクはキミの味方だ。

キミを助けるためにボクはこの雛見沢に帰って来たんだ。」

もう間違いない。彼はボクを助けに来てくれたのだ。
よりもよって最後の世界で赤坂が帰って来たのだ。

（ネ？リカ。奇跡は起こるでしょ？）

羽入、起こるね。奇跡は。

（リカが仲間を信じる。相談するから奇跡は起こったのですよ。）

そうね。今までのボクをブン殴りに行きたい気分だわ。

「アカサカああああああ。」

それからボクは錯乱状態で赤坂に抱きついてしまった。

大石からは冷やかされ、入江や富武はビックリしてしまった。

ボクは赤坂を皆に紹介し、すべてを彼等にも話したのだ。

もう時間も無い。

異界からの珍客も居るとは言え、山狗の連中と戦うには装備も何もかも足りないのだ。

「大石、赤坂、詳しくは魅音の家でお話します。ココではお話出来ない事。

そしてあるお客も居るのです。大石、園崎との対立の気持ちは分かれますが、

園崎一族は綿流し事件の一件とは関わりはまったく無いのです。」

「と、仰いますと？」

「入江、話してもいいのですか？」

「秘守義務がありますから・・・。」

「富武、もういいと思うのです。ボクがすべてを話してもいいです

よね。」

「アハハハ……。ボクは一介のフリーカメラマンですから。」

ココで色々と話して山狗に目撃されたら不味い事になると言い、入江、大石の車で別々に魅音の自宅に移動する事にしたのだ。今回は負けないわよ。

鷹野！！

ゼロ隠し編　ごお（後書き）

忠実に書くと辛いですね。

今回はほぼ原作のままです。

次回からはオリジナル路線となります。

ゼロ隠し編 ろく(前書き)

合流編です。

ゼロ隠し編 ろく

コルヴェールです。

異界に来て数時間、ようやく落ち着いて来ました。

ミオンさんがオチャと言うハーブティーを入れて下さったので、頂きましたが。

美味しいですね。

ミス・ヴァリエールには苦かったらしいですが、私には丁度良い味です。

それは置いておいて。

リカさんが、数人の男性を連れて来られました。

見た感じ、鋭い男ばかりです。

一人は軍人でしょうか？

彼女は幼いはずなのに、どうしてああ言う伝があるのでしょうか？

「リカちゃま、それに大石さん・・・。」

「ミィ、魅い、色々と蟠りがあるのは分かりますが、ボクを信じて欲しいのです。」

他の皆、今からボクが話す事を信じて欲しいです。」

リカちゃまが数人の男性を従えて入って来た。

中に大石刑事が居たのにはビックリしたが、彼女の話では、悪い話にはならないらしい。

今はリカちゃまの話を遮らない様にしておこう。

「大石、神社では話せなかった事をココでなら存分に言えるので、冷静に聞いて欲しいのです。」

他の皆も色々と心に傷はあると思います。

ですが、今から話す事を静かに聴いて欲しいのです。

まず、そこに居る見慣れぬお二人の事から。

彼等は今朝、異界のハルケギニアと言う世界から雛見沢に來られた異界の魔法使い、

ジャン・コルヴェール氏と、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールさんです。

お名前が長いので、男性はコルヴェールさん、女性はルイズさんと呼んでください。

彼等は今朝、雛見沢に現れた鏡からコチラに來られました。

本当は前原圭一が異界に連れ去られるハズでしたが、ボク達が圭一を取り戻すため、

圭一を引きずったら彼等が逆にコチラに來てしまったのです。」

「た、確かに。ルイズさんの髪の毛はこの世界ではありえない、ピンクブロンドです。

それに魔法使い？本当ですか？」

「コルヴェールさん、簡単な誰でも分かる魔法をお願いしますか？」

「お任せください。リカさん。ウルカーノ・・・。」

コルヴェールがコモンマジックの火の魔法を唱えると杖の先から火玉が飛び出したのだ。

さすがの赤坂もビックリなのです。

「ほ、本当に魔法みたいですね。」

「みたいでは無く、魔法なのです。・・・圭一、その刀は何なのですか？」

見ると圭一が見慣れぬ刀を背に背負ってたのです。

「お、コレかい？魅音の地下倉庫を漁ってたならコイツが転がってたんだ。」

「コイツとは失礼だな？相棒よ。」

「オッ、ワルイ悪い。デルフリンガーと言うインテリジェントソードだよな？」

「そうだぜ、相棒。オレ様はデルフリンガー様だ。皆、ヨロシクな！」

刀がカタカタと言いながら喋るシュールな光景に他の皆も固まってしまってたのだ。

「魅いの倉庫にこのデルフリンガーと言う刀があったのですか？」

「うーん。そうなんだけどね。」

けいちゃんが山狗と戦うにしても、武器が欲しいから、

何か貸してと言うので倉庫を探したら、ソレが転がってたのよ。

オジさんも始めて見たのだわ。」

「オイ、お嬢ちゃん、オレはデルフでいいぜ。」

オレ様はな。そこに居るハルケギニアからの来客と

一緒にこの世界に来たんだ。

それまではトリステインの武器屋の片隅に転がってたんだけどね。」

「本当ですか？貴殿も一緒にこの世界に転移したのですか？」

「おおよ。オレ様もお前達と一緒に転移したんだ。ただ、この家の倉庫に送られたのだけが違うけどね。」

デルフと言う刀も彼等と一緒にこの世界に来たとは。やはり色んな要素がこの世界に集まって来てたのね。羽入？

（そうね。リカ。奇跡は信じるから。相談するから。いい方向にどんどん転がるのです。）

そうね。本当だわ。この戦いが終わって勝てたら羽入の大好きなシュークリームを山ほど食べさせてあげるわ。

（あああう、楽しみなのです。それに勝てたらではなく、勝つのです。）

これだけの要素が集まって負けたら大笑いしてしまうのです。）

そうね。勝つのよ！！負けてたまるモンですか。

鷹野、前回の恨みを晴らしてあげるわ。

ゼロ隠し編 ろく(後書き)

デルフ登場です。やはりガンダにはデルフが必須ですよね。

ゼロ隠し編 なな（前書き）

ようやく話が進みます。

ゼロ隠し編 なな

ルイズよ。

何で公爵家三女の私が、こ、こ、こんなド田舎に来なくてはならないのよ。

でもミオンの出してくれたワガシと言うピンクのお菓子は美味しいわね。

一個だけと言わず、もっと出しなさいよ。ケチね。フン。

リカの話では、この村で戦いが始まるみたいね。

圭一も私の使い魔になってくれたし、

私の魔法で敵をギッタンギッタンにしてくれるわ♪

「リカちゃん、ではそこに居る彼女達が異界からのお客様で、しかも魔法を使えると言う事は理解できた。

で、今後の事だが、どう言う考えでいるのか？」

「ボク達個人のみの力では、山狗にはどうにも出来ないと思うのです。

それと、ボクは前世の記憶が山ほどあります。

羽入、出ておいで。」

すると羽入があうあうと言いながら姿を現した。

「皆が恐れてるオヤシロ様の正体が彼女、羽入です。

彼女は千年以上もの間、この雛見沢を見守って来たのです。そして、ボクも。

通算で百年もの間、生死を繰り返して来ました。

毎回、ボクが殺されるのを黙って見るしか無かったのです。

ですが、輪廻を繰り返すもの今回が最後。

羽入も持てる力をすべて出す事にしたそうなのです。

羽入、お前からも言いなさい。」

「あああう、ボ、ボクが羽入なのです。世間ではオヤシロ様とか言われています。

ボクは、皆様に怖がられるだけの存在では無いのです。

あ、ボクはシュークリームが大好きなのです。

今回の戦いが終わったら、ボクにシューを捧げて欲しいのです♪」

「は、はうううう。羽入ちゃん、その角、とてもキュート。

レナ、いくらでもシュークリームあげるから、お、お持ち帰りいい。

」

「ちよっ、レナ。話が進まなくなる。暴走は戦いが終わってからにして。」

「あああう、珍しく魅いが空気を読んだのです。」

「羽入さんとやら、もしかして私と会った事無かったですか？」

「大石が復員して来て、監督から怒られてた所も園崎のヤクザに刺されて傷ついた事、

そして監督が殺され悲哀にくれてた事もすべて知り尽くしています。

大石、貴方が今回の騒動の真相に触れられる最後の機会なのです。

ボクの力も今回が最後。神としてあまりにも弱い私ですが、雛見沢に未来を齎すために、

大石、貴方の力も貸して欲しいのです。出来れば。」

「そりゃもちろん構いませんが。」

「ただし、大石。今回の騒動は国が絡んでいます。最後には無かった事になると思うのです。」

「大石さん、ボクもそう思います。大石さんは今年定年ですよね？でしたら、身を引く事も考慮して欲しいのです。今回の騒ぎの元凶は、私も自分の勤務過程で

知り尽くしています。一種のクレーダーですから。

です。大石さんは身を引くべきと思います。自分達はまだ若いから再起も出来ますが、大石さんは定年です。退職金は大切です。それを守るためにも身を引くべきとボクは思います。」

「赤坂さん、羽入さん。温かい言葉感謝します。私やね。監督の墓前でいつも誓ったのですよ。

アンタを殺した犯人を何としても挙げると！その機会が目の前にあるのに、たかが退職金惜しさに身を引け？冗談じゃ無い！！と言えない自分が口惜しいですよ。本当に。」

「大石、貴方の苦しみは私は良く分かります。貴方が思う通りにするべきです。

そのために悩む時間を私は与えます。」

「羽入さん、貴女がオヤシロ様と言うのは本当でしょうね。

ありがたい言葉、本当に感謝します。少しだけ、少しだけこの大石に時間をください。」

「了解なのです。ですが、一応皆の話は聞いて欲しいのです。」

「分かりました。しばらくは大石は石となります。」

それからボク達は戦略を練り始めたのです。

リカは園崎家の地下壕に籠る。

監督はリカが風邪で寝込んでると言う事にし、神社の二階には赤坂が入る。

富武は興宮オキノミヤのホテルを移り、東京と鷹野の背後を探る。

殺害の危険も多いので慎重に行動するべき。

リカと沙都子以外の部活メンバーは計画発動までは普通に生活する事。

ルイズさんは、髪を染めてもらい、園崎の遠い親戚として学校に通って貰う。

さすがに園崎家に籠らせておくのは可愛そうなので。

コルヴェールさんはリカの護衛になってもらう。

彼は元は軍人でもあり、万一の時は魔法も使える。頼もしい存在なのです。

そして大石、彼が計画に参入する決意がついたら。

計画はGO!なのですが。

「申し訳無いです。私が情け無いばかりに・・・。」

「大石、貴方が謝る必要は無いのです。計画はいくらでも立てられます。」

貴方は自分の人生を第一に考えるべきです。」

「ルイズさん、貴女の髪は凄い目立ちますので、申し訳ないのですが、染めさせてください。」

「フン。仕方ないわね。この世界で生きるなら我慢するわ。」

「コルヴェールさん、貴方はリカ達の護衛として、彼女達に常時付いて欲しいのです。」

「お任せください。この炎蛇のコルヴェールが付いてる限り、指一本触らせません。」

「赤坂、悪いのですが。」

「ああ、モチロン構いません。リカちゃんの自宅で在宅を装います。」

「富武、貴方が一番危険なのです。万一の際は全力で逃げてください。」

「分かったよ。」

「富武、幾多の世界で貴方は何時も最初に殺されてしまいます。その多くは鷹野から発症の注射を打たれ、症候群を発症。喉を掻き箸り自滅してるのです。」

「そ、そんな・・・。」

「富武、そんな貴方ですので、特に注意し、ホテルも出来る限り変更するのです。」

捕縛されてしまうと、本当に終わりなのです。」

「わ、分かったよ。羽入ちゃ、いや、オヤシロ様。」

「生きて再びこの地に立つのですよ。」

「頑張ります。」

「レナ、沙都子、圭一、魅い。ボクと沙都子は園崎家に籠ります。作戦は頼むのです。」

「リカちゃま、任せてよ。他の事ならともかく、作戦全般ならこの魅音様にお任せよ。」

大石以外は作戦内容も固まったのです。

いよいよ反撃開始ね。

鷹野、地獄見せてあげるわ♪

ゼロ隠し編 なな（後書き）

次回より新章突入です。

前振りが長くてすいませんでした。これでも大分端折ったのですが、ココだけは手抜きがしづらいのですよ。

次回からテンポ良くなります。

ゼロ流し編 ひとつ（前書き）

更新が大変遅れました。お許しください。
連載を再開します。

ゼロ流し編 ひとつ

圭一だぜ。

コルヴェールさんの話だと、オレはガンダールヴと言うハルケギニアの英雄だそうだ。

左手のルーン文字がそうだと教えて貰ったのだ。

くー、最高じゃネ？

オレか英雄♪

デルフもかつてのガンダの持ち物だったそうで。

ヤツを持つと、左手がギンギンに輝くのよ。

身体のパワーもアップし、武器全般の扱いも瞬時に分かってしまうのだ。

スゲーー。

デルフを持って魅音の家の裏山で木を切りつけたら一撃で木が倒れてしもた・・・。

対人ではヤバくネ？

「魅音、コレってかなり凄いな・・・。」

「けいちゃん、カッコイイ・・・♪」

「おっ、ありがとヨ♪リカちゃん、これでオレも戦力になるね。」

「圭一は部活には欠かせない存在なのです。圭一はルイズさんとボクの護衛に徹して欲しいのです。」

「そ、そうよ。アンタは私の使い魔なんだからね。しっかりと護衛するのよ。」

「おう、分かったぜ。ルイズさん、リカちゃん。」

余談だが彼女は自分達より年上らしい。
らしい、と言うのは、見ての通り、チツ・・・グギャツ。

「何か不埒な事を考えていなかった？このい、犬ううう。」

「圭一、不埒な考えは犬も殺すのですよ。気をつけるのです。」

「り、了解です。ママ・・・」

作戦の概要は決まったわ。

大石も加わる事になり、鷹野達に鉄槌を加える事も可能となった。
作戦は、黎明時にボクが死亡したと言うニセ情報オキノミヤを興宮署から出し
て貰う。

あくまでもボクが死亡したかも知れないと言う不確定なニュースだ。
ヤツラは常時ボクの動向を警戒している。

だが人間誰でも警戒の最も緩む時間がある。

例え精強な軍人でもだ。

それが黎明。

朝方だ。

その時間に警察から私が死亡したと言うニュースを警察から流し、
警視庁特捜部からも流すのだ。

それも私が死亡して48時間経過してたと言うニュースだから、大
笑いよ。

雛見沢の住民が発症すると言われてる48時間が経過してるのに、誰も発症していない。

私が死んだと言うのにな。クスクス♪

「しかしエゲツナイ話ね。リカちゃんが死んだら村人全員を殺害するなんて。」

「ボクは何時も死んでたので分からなかったのですが、羽入が言うには、村人を全員、学校に集めて、殺人ガスで殺してたらしいのです。」

「もしかしてバツちやも？」

「そうなのです。お魍も、そして村人全員が、コロコロと転がるみたいに殺されてたのです。ボクは、実体化出来ていなかったの、見てる事しか出来なかったのです。」

「本当かい？あのバツちやも、殺されてたなんて。」

「魅音、この村には確かに雛見沢症候群と呼ばれる病原があります。ですが、村人が隣人を疑わない。

そして信頼して居たら、確実に防げる病気なのです。

絶対に疑心してはならないのです。」

「分かったわよ。羽入ちゃん。でも本当に神様に見えない子ね？」

「羽入はヘタレなのです。いつもアウアウとしか言えないシュークリームジャンキーなのです。」

「んっふっふっふっ！。羽入さん、今度エンジェルモートのシュークリームをプレゼントしますね。」

「あああう。大石、オヤシロ様からの祝福が貴方に降りると思うのです。」

「ヤッすい神様なのです。」

「リカさん、では私は二日後の黎明に興宮署からリカさん死亡のニュースを内密、かつ盛大に流します。そして色々と調べが入ると思いますから、署で食い止めておきますね。」

「大石、お願いするのです。恐らく国からの視察が入る可能性も高いのです。」

一日持たせて貰えたら鷹野の作戦はパーになると思います。」

「お任せください。私が何としても食い止めて見せます。」

「リカちゃん、僕はリカちゃんの自宅で病気のフリを装っておくね。」

「赤坂、お願いするのです。作戦が発動したら赤坂も危険なのです。」

「僕の事は心配しなくても大丈夫だよ。」

これ以上の危険な任務にも関わった事あるしね。」

「オジさん達、部活のメンバーはリカちゃん、ルイズさん達と一緒にリカちゃんの護衛に徹しておくわ。」

「フン。仕方ないわね。私も皆と一緒に護衛してあげるわ。それにしても下らない人間はどんな世界にも居るのね。」

「お嬢ちゃんよ。オレ様が見た戦いではもっとエゲツない事してるヤツも沢山居たぜ。」

人間なんて、汚い事は平気で出来る生き物よ。」

カタカタと刀が喋る光景はさすがにシニールだが、これがファンタジーな世界の光景なのだろう。

最早、全員が羽入が神だとか言うのも疑ってすらいない。

何せ魔法使いは居る。

使い魔の圭一も居る。

シニールな光景をもたらす刀のデルフリンガーも居るのだ。

ボクの生き返りも疑う人は居なくなってた。

これで本番に移れるかな？ かな？

今日のお昼は盛り蕎麦だった。

私が頼んだのは大盛だ。

何故大盛とか言うのかは分からない。

しかしややこしい。

お子様ランチみたいに旗でも立ててくれたら分かりやすいのに・・・。

入江所長のお子様ランチ発言は私のツボに来た。

久しぶりに大笑い出来た。

ここ数日、ジロウさんと連絡がつかず、心が波立ってたからかなりいい気晴らしにはなれた。

どうしてジロウさんと連絡が取れないのだろうか？

何度もホテルに連絡しても留守で居ないと言われてる。

雛見沢にも数日来ていないみたいだ。

もうすぐお別れだから、今生の別れにデートしてあげようと思ってたのに。

私はフと思い立ち、興宮の小此木に電話した。

「・・・鷹野です。小此木は居る？・・・」

「・・・私よ。20日からのつもりだったけど、今日からRの周辺監視を開始して。」

「・・・え？別にいいでしょう。それとも暑いからイヤだとも？」

ええ、お願い。決行日まであと五日。慎重に慎重を重ねてもバチは当たらないわ。

「・・・ええ、ヨロシク♪」

私が電話したのは興宮にある小此木造園と言う名のダミー会社の事務所。

雛見沢の中で実際に造園業をやってて、彼等が雛見沢に出入りする事への

不信感の払拭を狙って設立した機関だ。

Rと言うのは言うまでも無い。

古手リカの呼称だ。

この日のために私達は準備してきたのだ。

私が神となるための生贄として・・・。

ゼロ流し編 ひとつ（後書き）

いよいよ本編の開始です。

鷹野に気づかれたのでしょうか？

ゼロ流し編 ふたつ（前書き）

部活メンバーの運命はいかに？

ゼロ流し編 ふたつ

ルイズよ。

わ、私が何でこんなド田舎で戦わなくてはならないのよ。フン。でも仕方ないわね。

戦わないと彼等が殺されてしまうんですもの。

私も死にたくは無いし・・・。

それにしてもあの駄剣は煩いわね。

何よ、公爵家三女のこのルイズさんに向かってツルペタとか・・・失礼しちゃうわ。

ハルケギニアに帰れたら溶かしてしましましょう。

しかしこのテレビとか言うマジックアイテムは素晴らしいわ。

色んな絵が自動で動くななんて、どんな仕掛けなのかしら？

センベイとか言うお菓子も硬いけど美味しいわね。

リカ、私にもオチャを！！

ルイズさん、何かすっかり馴染んだみたいです。

ボクと沙都子との生活も慣れたみたいです。

コルヴェールさんも、ボク達との会話にも慣れたみたいです、

あの方・・・。

絶対にマッドです。

園崎家の地下にある倉庫に転がってた武器を見たら、狂喜して分解しようとしてたのです。

魅いが羽交い絞めにして止めなかったら地下倉庫の武器がガラクタにされてたトコでした。

仕方ないので戦いが終わったら、

自動車を一台あげるから存分に分解していいよと言って諦めさせた

のです。

それにしても凄い好奇心の持ち主ね。

機構をたちまち理解してしまったのは驚嘆したわ。

違う世界では確実に天才と呼ばれる人ですね。

さて、お茶でも入れてあげますか・・。

「ルイズさん、貴女の使い魔なんですが、増やしても宜しいでしょうか？」

「へ??？使い魔を増やす??？」

「ええ、圭一が使い魔になった事でルーンと言う文字で素晴らしい能力を発揮出来る様になりました。でしたら、他のメンバーもルーンを刻む事で能力を開発出来ると思うのです。」

「そ、そう?？だったら私には是非は無いわね。いいわ。他の方とも契約して見ましょう。」

「ミス・ヴァリエール。使い魔は生涯一個と決まってるのですが。」

「ミスタ・コルヴェール。ここは異界です。戦力を増やせるなら増やすべきですよ。」

ダメで元々ですわ♪♪」

まさかこの世界で使い魔を増やすなんて発想は無かったわ♪
非常識にも異界に呼び出された私達ですが、味方が増えるのは喜ばしい事です。

非常識な運命なら別に非常識に生きてても問題は無いでしょ♪

「魅音、レナ、沙都子、
そしてボクの四人をルイズさんの使い魔にして貰う事にしたのです。」

「リカちゃま、前ぶりもナシに随分な話ね？オジさん、正直理解出来ないわ。」

「今回の戦いは非常に厳しいのです。万一にも負ける訳には行かないのです。」

勝てる要素が少しでも増えるなら藁をも掴みたいのですよ。

で、ルイズさんの使い魔となる事で最大のメリットが個人の能力の大幅アップなのです。

圭一も武器全般の扱いが可能となり、さらには身体能力が上がったのです。

他の方も違う能力が上がると思っています。

ボクも毎回鷹野に腹を引き裂かれて来ました。

そろそろお返しをしたいのですよ。

そのためにもルイズさんの使い魔となり、ルーン文字を刻んで貰うのです。

なに、腹を割かれる苦しみ比べたら大した事は無いのですよ。」

「あうあう、リカが腹黒くなってるのです。」

「羽入？今夜のメニューはキムチ鍋にしましょ♪」

「あうあう、リカ、それは許して欲しいのです。」

「許してあげるけど……。そうね。羽入も使い魔契約しなさい。」

アンタもあうあう言うだけで時間の撒き戻し程度しか出来ない無能

神なのよ。

少しは役に立てる神になりなさい。」

「あうあう。分かったのです。ボクも契約するのです。だからキムチ鍋は許して欲しいのです。」

「本当っにやっすい神ね？まあいいわ。アンタもルイズさんをお願いなさい。」

「ルイズさん、ボクも使い魔契約して欲しいのです。」

「ハニュー？アンタって確か神なのよね？」

「あうあう、そうなのです。ボクがこの雛見沢に居る神なのです。」

「まあいいわ。多分、私こそが神を使い魔にした史上初のメイジになれるのよね。」

もう何人でもかかっていらっしやい♪」

それからが大変だった。

使い魔儀式の会場にどこから聞いて来たのか、富武がカメラを持って撮影を始め、

ボクの自宅に居るハズの赤坂も来てた。もちろん大石も監督も。

そして何故か……。

「リカちゃま、こんな楽しい事に私を誘わないなんて。」

そう、詩音も来てたのです。

コイツは……。

「では皆様、使い魔儀式を始めます。ミス・ヴァリエールが読み上げる呪文の後、

ヴァリエール嬢が貴方達に使い魔の口付けをします。

これは神聖な儀式ですので、男女との接吻とは別物と考えてください。

ルーンが刻まれる時に痛みが生じます。

そのために、別室に布団を用意してありますので、痛む時は横になつてください。」

コルヴェールさんが儀式を取り仕切ってくれる事になった。

やはり教師ね。彼。

すべてが終わったらカレーと一緒に分校の教鞭を取らせるべきよ。

向こうに帰らせるには勿体無いわ。

カレーとくっ付けても良いわね♪

やがて儀式が始まった。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔と成せ。」

ルイズさんが肅々と呪文を唱え、並んだ私達に次々とキスをして行く。

富武のシャッターが一番煩いかも？

「富武、その写真はすべてが終わるまでは現像してはならないのですよ。」

「分かってるよ。リカちゃん。だがこんな儀式なんて見れるもんじ

や無いからね。

撮っておかないと人生の大損害だよ。」

「フィルムはボクに預けておきなさい。貴方が捕縛されたらそれが鷹野の手に落ちるのです。」

「俺が落ちるのは前提か？」

「毎回時報となつてたのは富武なのです。富武が殺されて初めて惨劇が毎回起きていたのですよ。それは当然でしょ。」

「惨い言い方だな・・・。」

「富武にはボクは毎回忠告してたのです。ですが、貴方は何時も真っ先に鷹野に殺されてたのですよ。言いすぎとはちっとも思わないのです。」

「き、気をつけるよ。」

「儀式が終わったら身を隠しておくのです。」

富武を黽つてたら、何時の間にか全員の儀式が終わり、ボクの順番となつてたのです。

ルイズさんはボクにキスをして来たのです。

あうあう・・・。ボクのファーストキスが女性とは・・・。

しばらくするとルーンが刻まれる痛みが発生して来たのです。他のメンバーも・・・。

い、痛い・・・。

ボク達は痛みから意識を手放してしまったのです。

ゼロ流し編 ふたつ（後書き）

色々と悩みましたが羽入を含む全員にルーンを刻む事にしました。
色々とチートが出来ますので楽しみです。

ゼロ流し編 みつつ（前書き）

ルーンの解明編です。

ゼロ流し編 みつつ

リカよ。

さすがにルーンが刻まれる痛みは痛かったわ。

まあ、前世で経験した鷹野にお腹を切り裂かれる痛みに比べたら大した事無いけどね。

これで、経験していない痛みは処女喪失と出産の痛みだけね♪

圭一にお願いしないと♪

でも、まさか詩音まで加わるとは思わなかったけど。

あのくけけけは・・・

面白そうな事には喜んで身体を差し出すから。

で、メンバーに刻まれたルーン文字をコルヴェールさんに解読してもらったのだけど。

リカ∥ミヨズニトニルン

沙都子∥ミヨズニトニルン

レナ∥ガンダールヴ

詩音∥ヴィンダールヴ

魅音∥ヴィンタールヴ

羽入∥リーヴスラシル

面白い事にルーンが刻まれてる最中に

ハルケギニアから秘宝と呼ばれる四つの宝と指輪が転移して来たのよ。

それをルイズさんが付けたら、彼女の魔法も開眼出来てしまったのよ。

彼女、大喜びしてたわ。

ボク達の能力はミヨズとか言う神の頭脳とやららしい。

ガンダは圭一同様……。ただでさえ恐ろしいレナパンが無双になっ
てしまったわ。

レナだけは絶対に怒らせない事にしよう。

ヴィンタールヴは色んな幻獣を操れるらしい。

とりあえず動物なら何でもOKか？

そして羽入のリーヴスラシル。

コレだけは秘宝の書物にも掲載されていないらしい。

後で羽入に聞いて見よう。

「はううう。リカちゃん、レナ痛かったよおお。でもコレで圭一ク
ンとお揃いかな？かな？」

「私とお姉はルーンまで双子なんですか？」

「オジさんもイヤだよお。どうせならレナのルーンが良かったかも。

」

「おーほほほ、やっぱりリカと私は親友ね♪ルーンまでお揃いです
わ。

何か凄い知識が入って来てますのよ♪私の頭脳が爆発してますわ♪」

「あうあう、ボクのルーンは……。人には話せないのです。

リカ、後で話しますのでボクは消えておきます。」

なにやら羽入のルーンは人には話せないみたいだ。
彼女は理解出来てみたいだが。

「羽入、来たわよ。」

「あうあう、リカ。皆には話せなくてゴメンなさいなのです。
でもこのルーンだけは他人に知られると不味いのです。
特にハルケギニアの方には。」

「どう言う事？彼女達に話せないなんて。」

「あうあう、怒らないで聞いて欲しいのです。
このルーンなんですが。
異界と行き来が出来るみたいなのです。」

「何ですってええええ。異界と行き来が出来るの？」

「あうあう、そうなのです。それにそれだけでは無いみたいなのです。」

「何かアンタにも理解できていない効能があるのね？」

「あうあう、そうなのです。とりあえず分かった事は異界との行き来出来るワールドドア。」

ドラエ門の「どこでもドア」と同じと思っていいいのです。それが出来ます。

ですが、これを彼等に知られると・・・。」

「不味いわね。彼等が帰ってしまうわ。」

「そうなのです。ですからボクは内緒にしたのです。」

「少なくとも最後の戦いが終わるまでは居て欲しいわ。彼等は侮れない戦力ですから。」

「そうなのです。でもウソは良く無いのです。」

ウソを言うと言候群が発生する可能性があります。」

「そっちも不味いわ。どうしたらいいかしら？」

「ウソは出来る限り言わず、

99%の事実に関%のウソを交えて言うといいいのです。」

「事実を捏造して言うのね。」

「さすがリカなのです。」

全部うそだとボロがすぐに出来ますけど、事実に関%のウソを入れて言うと言、事実がベースなだけにボロも出なくなるのです。」

「いい案ね。さすが千年も生きてるだけある神だわ。」

「もっと言って欲しいのです。あうあう。」

「あまり調子に乗るとキムチ食わせるわよ。」

「ゴメンなさいなのです。あうあう。」

それから羽入と巧妙な言い訳を考えた。

ルーンは「どこでもドア」と言う設定にし、羽入と一人だけが別の場所に移動出来る。

異界は移動出来ない。＞一応試して見たら、ルイズさん達の世界らしき所にも行けたのだ。

慌てて帰ったのは言うまでも無い。どこでもドアは確認済み。

コレはコレで便利ね。

万一の際の脱出に使えるわ。

「リカちゃま、羽入ちゃんのルーンは凄いいね。

コレがあれば逃げるのに苦労しないわ。」

「オホホホホ、さすが私の使い魔達ね。みんな素晴らしい使い魔よ。」

」

ルイズさんもご機嫌だ。

コルヴェールさんも知りえる知識にも羽入のルーンが無かったのが幸いした。

バレる心配は無いみたいね。

羽入には姿を消して鷹野に色々イタズラをして貰いましょう。

中々楽しい事になりそうだわ♪

ボクのルーンも沙都子同様、神の知識とやららしい。

試しに宝具を触って見たら、今まで理解出来なかった宝具の使い方が一発で分かったのよ。

羽入でさえ知らなかった雛見沢の宝具が。
こりゃ凄いわ。

ルイズさんの国から来た正体不明の宝も色々と使える事が分かった
のよ。

ココまでこちらの武装が強化されてしまうと少しだけ鷹野が哀れね。
少しだけよ。

私なんか何回鷹野に腹を切られた事か。

絶対に恨みを晴らすんだから。

圭一！！

ボクにもお茶を入れて欲しいのです。

ゼロ流し編 みつつ（後書き）

羽入はやはりリーヴスラシルです。

隠された秘術もありますが、それは終盤まで秘密です。
次回は鷹野達の葛藤です。

ゼロ流し編 よつつ（前書き）

戦略目標が確定しました。
完全抹殺です。

ゼロ流し編 よつつ

三四ですわ。

何やら不振な空気が雛見沢に漂っています。

私のカンって割と当たるんですよね。

女の身で、この世界を渡り歩いて来ましたから、カンだけはバカに出来ないのよ。

さすがに雛見沢症候郡の研究打ち切りにはショック受けましたけど。だけど、どうせ打ち切られる研究なら、

派手に吹き飛ばしてしまった方が御爺ちゃんのためにも良いと思うのです。

私も既に若くは無い。

もう一度同じ伝手を探す充てありません。

御爺ちゃんも許してくれますよね。

「小此木、Rの所在は確認出来てる？」

「ハイ、お嬢。Rは雛の巣の中で大人しく寝てるみたいです。」

「入江が風邪を引いて休んでると言ってたわね。綿流しまで数日しか無いから、

最後の日までは健康で居て貰わないと。」

「へっへっへっ。お嬢、その通りですねん。Rの自宅電話の盗聴も開始してます。

万一の事も大丈夫ですねん。」

「監視は任せたわよ。私は最終チェックに入るから。万に一つの失敗も許されないからね。」

そう、この作戦は一度発動したら止まる事は許されない怒涛の作戦になるのです。

雛見沢住人二千人を犠牲にし、雛見沢を文字通り殲滅する作戦になるのですから。

そのキーとなるのがRこと、古手リカ。

雛見沢の女王です。

彼女の死が雛見沢の住人の発狂の始まりとなるのです。

その前に住民は黄泉に消えて貰いますけどね。クスクス。

私と御爺ちゃんが神となる日はもうすぐよ。

楽しみね・・・。

「あの腹黒女は・・・。相変わらず狂っているのです。

監視してて正解だったのです。ボクので、偽装の電話を掛ける事も出来るので、

ヤツ等の目をごまかす事は簡単なのです。」

「羽入、偵察お疲れなのです。」

「リカ、やはりあの女、狂ってるのです。

山狗は監視体制に入っております。今後は電話も盗聴されてしまいます。」

「了解よ。赤坂には伝えてくれた?」

「帰りに寄って来たのです。赤坂さん、元気でしたですよ。」

「そ、そう・・・。そりゃ良かったわ。」

「所で時報は生きてる？」

「まだ生きてるのです。今回は生き残りそうですね。」

「でも、何時もコロツと鷹野に殺されてしまうからね。彼は。」

「鷹野と付き合ったのが運の尽きなのでしょう。前世のボク達を含め。」

「そうね。ボクも鷹野を最後の手前まで信頼しきってたからね。」

「リカ、今回はどうする気？」

「容赦しないわ。正直、許す気も無いし、今回は凄い戦力も手に入ってたからね。」

「殲滅で行くの？」

「モチロンよ。羽入、遺体処理は任せるわ。」

「異界に放り込めば血くらいしか残らないですよ。」

「コチラに残すと色々と面倒が起きるからね。鷹野も包めて異界に放り込みましょ。」

そう、今回は鷹野達、反乱者を全員殺害する予定です。生かしてても色々と問題になるだけの犯罪者ですから。どうせ消える予定の連中。

赤坂、大石には消すと告げてあるのです。

彼等もビックリはしましたが、生かしてても国の憂いになるだけの連中。

完璧に闇に消せられるなら、それでいい事にしました。残虐と言うでしょうが、彼等が私達にする、あるいはして来た事を思えば優しい事ですよ。

この平和な雛見沢に恐怖と死を与えてくれたのですからね。魅音や圭一に話すと、仕方ないと同意してくれたのです。

鷹野、あと数日の命、楽しく生きなさい。クスクス♪

ゼロ流し編 よつつ（後書き）

鷹野の命が風前の灯火です。

ゼロ流し編 つつ（前書き）

作戦開始です。

ゼロ流し編　いつつ

赤坂です。

リカちゃんから作戦の概要を聞いた時は、本当にコレでいいのか？と想いました。

ですが、鷹野氏達の会話や作戦を聞いた時は、生かしてたら我が国自体が吹き飛ぶ。

闇に消せるなら消した方が良くと自分も思いました。

彼等は狂っています。

自分達のためだけに、この平和な村を消し、リカちゃんを殺すなんて。

彼等を許してたら、日本は最悪の犯罪国家に陥ります。

出来る事ならバックボーンの連中も消すべきです。

移動も楽になった事ですし。＞羽入ちゃんから聞いた時は、某アニメの青い猫と同じと思ったのです。

「圭一、レナ。貴方達は作戦が発動したら、ヤツラを文字通り殲滅して欲しいのです。」

沙都子、貴女は私と一緒に作戦を練り、トラップを強化して欲しいのです。

魅音と詩音は異界からドラゴンなどを召喚し、ヤツラを殲滅しなさい。

羽入、貴女は遺体进行处理ね。

それと戦力の移動をお願いするのです。」

「リカちゃん、殲滅と言う事は？」

「殺害します。生かしてたら、報復されるのはコチラです。敵の正体は羽入が完璧に掴みました。バックの抹殺は赤坂と羽入に任せます。私達はルイズさん、コルヴェールさんと共に敵を消すのが主な任務です。」

「リカちゃん、能力は全開でいいのですね？」

「モチロンなのです。加減は要りません。敵は強大なのです。手加減してたらコチラが殺されてしまいます。実際に前世では私達も殲滅されてしまいました。」

「はううう。リカちゃん。レナも同意だよ。それにしてもこの喋るナタ。いい手触りなおお。」

そう、何時の間にかレナもデルフリンガー同様の喋るナタを入手してたのだ。

名前は地下水と言うハルケギニアのマジックウェポンらしい。何でも相手の意識を乗っ取り、魔法も発動できるのか？今はレナに忠誠を誓っているらしい。レナ、恐ろしい子・・・。

「お嬢ちゃんよ。オイラも同意だぜ。敵は殲滅。消すのが最善よ。情けは将来の禍根を残す。だったら闇に消すべ。」

「リカちゃん、オレも同意だぜ。」

確かに人間を殺すのは心情的にはヤヴァい。だけどヤツ等はオレの好きな雛見沢を滅ぼそうとする悪魔。生かしてたら将来、オレ達の子孫が報復されてしまう。徹底的に戦うぜ。罪の意識も感じる必要は無い。」

「リカ？私も同じですわ。トラップに関してはお任せください。このルーンのおかげで凶悪なトラップも開発しましたわ。

それに魔術も含め色々と出来ますのよ。

相手には悪いとは思いますが、私達の未来のために消えて貰いましょう。」

「くけけけけ。リカちゃま。この詩音様の故郷を消そうとする悪魔には、

私の能力全開で殲滅しますわ。作戦発動が楽しみです。」

部活メンバーの意見は一致した。

文字通りの殲滅で確定。

大石は作戦発動後、興宮署の傍聴を止めて貰う。

そして雛見沢に侵入して来る山狗と鷹野の痕跡を消して貰うのだ。

ヤツ等は忽然と消えた事になる。

羽入は色々と頑張って貰おう。

終わったらシューを山程与える事で納得させた。

やっスイ神よね♪

んっふっふっふっ。大石です。

いや、凄い事になりそうですね。

まさか遺体を消せる魔法まで持って来るとは。

いえ、犯罪を助長する訳ではありませんが、警察泣かせですよ。彼等は。

まあ、鷹野氏達の罪状や行う事を聞いた時は、逮捕は不可能。もし逮捕出来ても闇に消され将来の禍根になる確率が高いと私も判断しました。

私も本署で彼等の支援に頑張りますか。

それにしても、園崎の婆さんも被害者だったとは。

本当に厄介なヤツ等ですね。

監督、アンタの仇も討てますよ。もう少しだけ御待ちください。

その頃の時報クン。

「ハアハア。まさかもう勘付かれるとは・・・。

何とか逃げないと・・・。ぐぎやつあああああ・・・。」

「こちら山狗、A班です。東京のバックの裏を取ろうとしてたTを殲滅。」

遺体は焼却処分します。」

「ジロウさん、貴方との会話は楽しかったわ。

でも貴方は私を裏切ろうとしてたのね。

もう会う事は無いけど、何時かあの世とやらでお会いしましょう。クスクス。」

「リカ、悪い知らせなのです。時報が殺されてしまいました。」

「もう？今回は早いわね。」

「ホテルで東京と連絡してて、盗聴されてしまい逃走。興宮市の山林で殺害されました。遺体は山狗が焼却。今回は時報にもなりません。」

「クスクス。やはりそうだったのね。情報は漏れなかった？」

「尋問するヒマも無く射殺されましたので、それは大丈夫なのです。」

「そう……。それならいいわ。」

「鷹野には私達の作戦や背後関係は漏れていないのね？」

「富武だけの問題以外は大丈夫なのです。」

「なら大丈夫ね。大石には？」

「伝えておきました。富武は消えたと。」

「そう……。赤坂にもコチラに移転して貰いましょう。もう居留守の必要は無いわ。敵に攻めさせましょう。」

「アイアイサーなのです。」

さて、いよいよ開戦ね。

大石は情報の統制をお願いして、私達は敵の殲滅ですよ。それにしても時報はやはり時報ね。

アッサリと殺されてしまうなんて。クスクス。

やはり使えない男だこと……。

ゼロ流し編 いつつ（後書き）

早くも時報クンは退場しました。

生きてても鷹野に情けをかけてしまうので、消えて貰います。

次回から残酷な構図が多々ありますので、お子様はご遠慮ください。
次回から戦闘開始です。

ゼロ殺し編 いち(前書き)

戦闘開始です。

ゼロ殺し編 いち

三四ですわ。

ジロウさんの遺体、見せて貰いました。クスクス。苦しそうな表情で逝ってますわ。

せっかくですので、臓器とか色々貰ってしまいましたの。あのジロウさんのですもの。

他人に任せるのも悪いですわ。クスクス。

今日は興宮の山狗の地下アジトでジロウさんの解体をしてしまいました。

楽しいひと時でしたわ♪

ジロウさん、サヨナラ♪

「リカ、鷹野の現状は以上なのです。」

「相変わらず狂ってるわね。マッドでもまだマシよ。

これで殲滅するのにも躊躇は要らなくなったでしょ？ 皆。」

「吐き気がしますわ。まさかあの富武さんを喜んでバラバラにするとは。」

「トミー、もう語り合う事も出来なくなったのか。」

「危惧はしてたのですが。富武さん、アンタの無念は私達が晴らします。」

「はうう。富武さん、もうパシヤパシヤとシャッターを押してくれないですね。」

レナ、寂しいですうう。」

「富武の無念は必ず晴らすわ。皆、今夜は早く寝て明日は戦いよ。」

「早朝からの戦いね。魅い、今宵は贅沢な食事にして欲しいのです。」

「リカちゃん、任せてよ。オジさん、頑張って作ってあげるわ。」

「ルイズさんとコルヴェールさんも明日は早いので、ぐっすりと寝てください。」

「フン。任せてよ。このルイズ様が付いてたら、絶対に勝てるわ。」

「ミス・ヴァリエール。貴女は今回が初めての戦いです。過信は禁物です。」

絶対に私の傍を離れないでリカさんの指示に従って行動してください。」

さすがコルヴェールさんは歴戦の戦士だ。

実際の戦いも相当潜っているみたい。

彼に身辺の警護は指揮させよう。

赤坂は明日の作戦発動時に自分に変装した羽入と一緒に逃げて裏山に誘導して貰う。

彼等の墓場は沙都子のトラップの裏山ね。
致死クラスのトラップをたらふく食べて逝きなさい。クスクス。

そして早朝・・・。

「はああ。ダリいね。たまにはノンビリと酒でも飲みたいよ。」

「あと数日の我慢よ。作戦が終わったらこの地も引き上げるから、
そしたらしばらくは

ノンビリと東京で飲もうぜ。」

ジリリリリリ・・・。

「オッ、珍しいな？ウチに電話なんて。」

「ハイ、こちら小此木造園です。ハイ・・・エッ?!?!」

「ど、どうした??」

「あ、Rが・・・。」

それからが大騒ぎだった。

興宮警察署で身元不明の幼女の遺体を発見。

それがRこと、古手リカだと言うのだ。

さらにタイミングが最悪だ。

死後48H経過・・・。

既に49Hだ。

雛見沢症候群の発症時間を経過してしまってる。

しかも東京からの電話で情報が入ってしまったのだ。

中央にも古手リカの死亡情報が入ってしまった。

これでは雛見沢を殲滅する事が出来なくなるでは無いか？
どうしたら良いのか？

「誰が最後にRを見聞したの？」

「それは・・・。」

「入江先生がRは風邪で寝込んでると言っていました。」

「入江を確保しなさい。絶対に何かを隠しています。」

さすが鷹野ね？

入江に気づくとは。

以前なら入江の移動も大変だったけど、今なら一瞬よ。
入江を叩き起こして裏山に逃がさないと。

「入江、危険が迫ってるのです。すぐに逃げましょう。」

「へ？？危険って。」

「あー、もう。ボケてるヒマはありません。貴重品だけ所持して逃げます。」

入江のボケには付き合ってられません。

拘束して、裏山に移動です。

「リカ、鷹野に入江を確保されそうだったので、コチラに連れて来ました。」

「羽入、良くやってくれたわ。次は赤坂ね。羽入、赤坂と一緒にヤツラを裏山に誘導して。
もうすぐ来るハズです。」

「アイアイサーなのです。」

ブシュツと言う音と共に羽入は消えた。

使えない駄目神でしたが、ルーンの効能か？

素晴らしい神になったわね。

さて、次は地獄の裏山よ。

鷹野、覚悟しなさい。

ココが貴女達の墓場よ♪

クスクスクス♪

ゼロ殺し編 いち（後書き）

入江を逃がしました。

富武の次に殺される人ですが、医者は生かしておかないとね。

ゼロ殺し編 にい（前書き）

リカの指揮官が板に付いて来ました。

ゼロ殺し編 にい

何なの？

まさか入江が消えてるとは。

監視してた山狗のメンバーの話では、昨夜、確かに入江は当直室で就寝したと

断言している。

なのに、私達が急襲した時には入江の姿は無かった。

車はある。

持ち出したのはサイフ程度。

だが・・・この田舎の雛見沢で車もナシに山狗の目を誤魔化し、あの入江が消える事はない。

何かが起こっているのだ。

しかし何なの？？

ねえ、ジロウさん、教えてよ・・・？？？

「赤坂、いよいよ開戦なのです。」

「羽入ちゃん、じゃ君はリカちゃんに偽装してくれるかい？」

「お任せなのです。」

そう言う彼女はプシュツと言う音と共にリカちゃんに変身したのだ。

神と言うのは本当だろうか？

山狗がそろそろ来る頃と思うので、我々はノンビリと早朝の雛見沢を散歩してた。

しばらく裏山の方向に歩いていると車が轟音を立てて我々を追いかけて来た。

「羽入ちゃん、来たよ。」

「赤坂、しばらくは私を抱えて逃げて欲しいのです。危なくなったらワープしますので。」

「任せてよ。多分、この日のためにオレは身体を鍛えてたと思う。」

そう、幾多の世界で後悔して来たのだ。彼も。

リカが消えた世界。妻と子を失い失意の上に自殺した世界。彼も幾多の世界で後悔して生きて来たのだ。

「赤坂、過去は過去なのです。」

今を生きるための過去が赤坂の今を形成してるのです。

赤坂、戦いなさい。」

「羽入ちゃ、いや、今だけはリカちゃんと呼ぶね。」

そうだね。オレも色んな世界で後悔の日を送って来たと思う。

妻と子に先立たれ、酒に溺れた世界もあったと思う。

君たちの死を知り、寂れた雛見沢に涙した世界も・・・。

だが、そんな日は今日で終わりだ。戦うぞ。オレは!!!」

「赤坂、ファイトおーなのです。」

「居たぞおお、Rと見知らぬ男だ。」

「構わないわ。打ちなさい。」

「そろそろ全力出すかな？」

赤坂は全力疾走を始めた。

田舎道なので車よりも速いかも知れない。

「グッ、ヤツは化け物か？何だ、Rを抱えてあの速さは？」

「速度が出ないじゃない。オマケに田んぼを横切って走りやがるし。」

「

これじゃ絶対に追いつけない。もう車は壊れても構わない。
どうせ今日一日だ。

「A班、車は壊しても構わない。田んぼを突っ切れ。」

「おお、了解だ！！」

俺達は車を田んぼに突っ込ませ木に当たろうが、コスろうが無視して走り始めた。

それでも相当離れてしまい、ヤツは山に逃げ込んでしまった。

「B班、ヤツは裏山に逃げ込んだぞ。ヘリを回せ。周囲を封鎖しろ。」

「

「B班、了解ですねん。」

しばらくすると興宮からヘリが飛んで来た。

今まで隠してたヘリだが、もう隠す必要は無い。

「詩音、魅音、ヘリが飛んで来たわ。コチラの陣地を見られるのは

不味い。

ドラゴンで撃墜して。」

「リカちゃま、お任せを。イルククウ。あの空飛ぶ竜にブレスを与えなさい。

燃え尽きる位の強力なヤツをね。」

「お任せなのね。だから後で美味しいお肉を食べたいのね。」

「撃墜したら大きい肉をあげますから。頑張ってね。」

「きゅいきゅい。お姉様、頑張るのね。」

「何故、シルフィードは私の指示以外に従うの??」

「タバサ、仕方ないじゃない。今は彼女達に任せるべきよ。」

そう、イルククウと共にタバサもこの異界に来てたのだ。

魅音が異界のドラゴン来て!!と願ってたらタバサと共にこの雛見沢に来てしまったのだ。

ついでにキュルケも。

「あら♪この彼、中々凛々しいわね。ねえ、ダーリン、微熱は好き?」

「ちよっ、ルイズさんのお友達さん。タバサさんとキュルケさんだっけ?」

今は戦闘中なんです。オフザケは後にして欲しいのですが。」

「だって、状況が理解出来ないのですもの♪」

なら、楽しまないかね♪」

「すげーポジティブな考え！！尊敬しますっ！！」

「キュルケ、私の使い魔を誘惑しないでよ。」

「もう……貴女達、いい加減にしなさいつつつ。」

遂にリカがキレてしまった。

「今は戦闘中。フザケるなら雛見沢の沼底に沈めるわよ。」

「「ご、ゴメンナサイ……。」」

「詩音、コッチは無視して。ヘリを撃墜して来なさい。」

「い、イエス。ママ！！」

リカちゃんってあんなキャラだったんだ。

完璧にタヌキを脱ぎ捨ててるな。

ま、命もかかってるし。

真剣に戦うべ。

「リカちゃん、オレは赤坂さんの支援に行こうか？」

「まだいいのです。危なくなったら羽入が転移しますので。」

「了解っス。指揮官。」

さて、ヘリを撃墜したら次は裏山にワンワンを誘い込む番ね。

鷹野、早くココに来なさい。
いい場所に連れて逝ってあげるから。
クスクス♪

ゼロ殺し編 にい（後書き）

タバサとキュルケも来ました。

ゼロ殺し編 さん(前書き)

いよいよ佳境に入って参りました。

ゼロ殺し編 さん

な、何なの？アレは……。

裏山を監視しようとしてたB班のへりがいきなり現れた竜に撃墜され、

消えてしまった……。

「ど、どう言う事よ？B班、応答しなさい。」

帰ってくるのは雑音のみ。

彼等は完全に殲滅されたと見るべきだろう。

「へりは危ないわ。地上から攻めるべきよ。小此木。

全班を裏山に集めなさい。」

「お嬢、了解ですねん。山狗全班。裏山に集まれ。

R以外は射殺しても構わない。サイレンサーのみ使用しろ。出し惜しみはナシだ。」

さすがね。もうへりは居ないと思って構わないわ。

羽入は墜落して来たへりの残骸を異界の間に飛ばして消してくれた。

完璧な仕事ね。

詩音、魅音の二人もドラゴンの扱いは完璧。

いい仕事してくれてるわ。

鷹野や小此木は完全に頭に来てるわね。

さ、いらっしゃい。地獄の窯の中に……。クスクス♪

「お姉様、イルククウ頑張ったの♪お腹空いたの。きゅいきゅい。」

「イルククウ、頑張ったね。さ、この世界の最高級のお肉よ。腹一杯食べなさい。」

「嬉しいのおお。きゅいきゅい。」

「詩音、魅音、ご苦労様。しばらく様子を見てて、危険と思ったら反撃してね。」

そろそろ敵が裏山に集まる頃よ。沙都子、トラップの発動は任せるわよ。

手加減ナシで逝かせてあげてね。」

「リカ、お任せなのですよ。私のトラップを敵に食わせてあげますわ。」

「圭一、レナ。貴方達はトラップを潜り抜けた犬を殺りなさい。躊躇してたらコチラが殺されます。息を潜めて一撃で殺すのよ。」

「へへへ、リカちゃん、任せろよ。敵は俺達の村を滅ぼそうとする悪魔。」

躊躇する訳が無いだろ？」

「はううう。この地下水ナタの錆にしてあげるわ。レナ、頑張るわ。」

「ルイズさん、貴女はコルヴェールさんに護衛して貰って、敵の鉄の馬車を魔法で破壊して欲しいのです。」

「フン。あんなガラクタはこのルイズの魔法の練習にもならないわ。リカ、任せなさい。」

「ミス・ヴァリエールの護衛はこの炎蛇のコルヴェールが請負ます。」

「リカさん、私達も彼等と行動して良いですか？」

「キュルケさん、タバサさん。では彼女達から離れないと約束してください。」

そしてボクの指揮から離れないと約束出来ますね？」

「もちろんですわ。この戦いで私の魔力アップも可能となります。異界とはいえ、こんなチャンスは滅多にありません。是非！！」

「それでは貴方達二人もルイズさんと共に護衛と敵の殲滅をお願いします。遺体は消しますので、全力で相手を倒してください。」

「……了解……。」

私はココで指揮を取り、全般を見張る事にした。

戦闘が終息したら、次は東京の本部ね。

背後も全力で潰すわ。

ヤツラを逃がしたら、また第二の雛見沢が出る可能性もあるもの。敵に情けは無用よ。クスクス。

「リカちゃん、東京の史料はボクが持つてる。戦闘が終わったら潰しているのだね。」

「そうなのです。今は戦力が分散出来ないのです。」

東京は後回しだ。

今は鷹野率いる山狗を壊滅させるのが最優先。

魔法とか使い魔になれて良かったと痛感してるわね。

私も以前の頭脳なら、ここまで冷徹にモノを考えるのは不可能だったろう。

ミヨズとか言うルーンの効能は有難いわ。

その頃・・・。

「こ、こちらA班、鳶。トラップに引っかかりました。危険です。鳶はトラップが突き刺さり即死です。お・・・ぐぎやあああああつ。」

「鳶、応答しなさい、鳶・・・ダメです・・・。」

「鳶と鳶は殺されたみたいですわね。」

「ココは戦場なの？小此木。」

「お嬢、ココは戦場ですよ。間違いなく。そしてヤツらは戦士です。それもベトナムのベトコン以上に冷徹な。全班。Rと言えども油断するな。」

味方以外はこの山では全員敵だ。子供でも容赦するな。殲滅しろ。」

「イエッサー。」

「リカ、ヤツラは全員この裏山に入ったのです。」

「もう山狗の居残りは居ないのね。」

「ハイ。入江診療所に詰めてた山狗も含め、全員この裏山に入りました。」

「羽入、この山を結界に出来る？」

「造作も無い事なのです。山ごと間の世界に一時封印します？」

「出来るならそれがいいわね。間違って村人に犠牲が出る可能性もあるわ。」

「でしたら、この山自体を間の世界に転移しておきます。部活のメンバーにも伝えますね。」

「そうね。お願いできる？」

「お任せなのです。」

羽入、本当に使える神になったわね。

戦いが終わったらシューを山程与えて労ってあげましょう。
さ、ワンワンの皆様。もう終わりですよ。クスクス。。

ゼロ殺し編 さん（後書き）

裏山封印です。

ゼロ殺し編 よん（前書き）

戦闘も佳境となりました。

ゼロ殺し編 よん

「こちら鷹野です。東京の野村さん、応答願えますか？」

おかしい。

先程まで連絡取れてた東京の野村さんとの無線通信が通じなくなってる。

「小此木、この無線機壊れていない？」

「エ?? 先程までは普通に通信出来てましたが。」

「東京との通信が出来なくなってるのよ。何とか出来ない？」

「ちょっと御待ちください。雀、お前は無線は専門家だったな？お嬢が無線の調子を見て欲しいと仰ってる。少し見てくれ。」

「へい、御待ちを・・・。」

雀が無線をバラシ、異常が無いか点検していると・・・。

「お嬢、無線は故障は一切ありません・・・が。。。」

「どうしたの？」

「無線が一切どこからも入らないのです。」

「どう言う事？」

「普通は無線を傍受すると、絶対に雑音に混じって混線が入るので
す。」

所が現在、我々の他の無線電波が一切入らないんです。」

「意味が分からないんだけど・・・。」

「つまり、我々以外には無線を使う人が皆無と言う事なんです。
普通なら在り得ない事なんです。」

「つまり？」

「まったく無線を封止しても、絶対に雑音が入るのにそれも無いと
言う事です。」

我々は隔離された世界に居るか、無線の無い世界と言う事ですよ。」

「そんな訳ないでしょ。今まで田舎とは言え、普通に文明の利器を
使ってたのよ。」

それが使えないなんて在りえるの??」

「お嬢、落ち着いて下さい。我々は今、一つの村を滅ぼす戦いをし
ているのですよ。」

それなら呪いとか在りえると考えるべきです。我々も普通の人間と
は違う種族なんです。」

冷静に考えて、こう言う事も在り得ると考えるべきです。」

「グッ、そうね。確かに幼い子を殺し、一つの村を滅ぼす私達は
雛見沢から見たら、

悪魔ですものね。忘れてましたわ。クスクス。

いいわ。神が我々を呪うなら、私達は神を滅ぼしましょう。」

「お嬢、その意気です。何事も前向きに考えましょう。ヤツラを殲滅したら、この結界も解除されると思いますから。」

「クスクス。そうね。ありがとう。小此木。じゃ今は考えずにいましょ。」

小此木、彼等を殲滅しなさい。」

「お任せを。全班、ガキを見つけたら容赦するな。サイレンサーも要らないぞ。」

マシンガンもダイナマイトもミサイルも全弾使え。武器はオールフリーだ。」

「「「オオオオオオウ!!!」」」

「あらあら、結界には気づかれたみたいね。でも遅いわよ。もう彼方達は永劫に現世には帰れないの。ここは間の世界。」

輪廻の輪からも外れた異界。

永劫に魂も彷徨うのよ。クスクス。」

「羽入さん、ココは?？」

「間の世界なのです。地球ともハルケギニアとも違う、何者の存在も許されない世界。それが間の世界です。彼等を現世に帰さないためにココに招待したのですよ。」

皆様、彼等をこの世界の土に帰しなさい。」

「そ、そうですか。通りで静かだと思いました。鳥の声も風の音もしないもんで。」

間の世界、それは誰も知らない世界だ。

一説には黄泉と現世の境界線とも言いかも知れない。

だが、確実な事は誰も知らないのだ。

だって帰った人は一人も居ないのだから。クスクス♪

「圭一、犬がトラップを潜り抜けたわよ。殺っておしまい。」

「リカちゃん、了解だぜ。ヤツ等は殺すつ……。ウオオオオオオオオ。。。」

圭一も大分、犬殺しに慣れたわね。トラウマになるといけないから、すべてが終わったら、

記憶操作も考えないと。

下手すると平和になってから雛見沢症候群が再発する可能性もあるからね。

「赤坂、そろそろココはいいのです。羽入と一緒に東京の黒幕を消して下さい。」

「リカちゃん、大丈夫か？」

「ココは結界なのです。犬はもう二度と東京にも雛見沢にも帰れないのです。」

だから安心してヤツ等を消しておいて欲しいのです。

詳しい事がわかるのは、富武亡き今、赤坂だけなのです。

彼等を生かしてたら、第二の雛見沢が絶対に出るのです。完璧に潰してください。」

「分かったよ。リカちゃん。羽入ちゃん、彼等を特定捕縛したらこの世界に飛ばせるか？」

「お任せなのです。ヤツ等もこの世界の土にしまいましょう。」

「ヨシ。じゃリカちゃん、オレ達はヤツ等を捕縛次第、この異界に戻って来る。」

捕縛したヤツ等は即座にこの裏山の異界に放り込むからな。」

「お願いしますのです。赤坂。」

ボクがそう頼むと羽入と赤坂はブシュツと言う音と共に消えた・・・これでこの世界の悪党は現世からも輪廻からも消えるかもね。クスクス・・・。

「ぐわああああつ、や、ヤツ等は化け物か？ガキがとんでも無い刀

で・・・。
ぐふっ・・・」

「鷲、鷲、応答せよ・・・。ダメです。殺られたみたいです。」

「おお、オレも出るぞ。お嬢、すいませんが自分の身は自分で守ってください。」

「ヤツ等は普通ではありません。化け物です。」

「小此木、わ、私を見捨てるの？」

「そうじゃありません。もう護衛の余裕も無いのです。戦力の半分が殺されたのですよ。ガキに。」

「そしてココは援護も望めない異界です。持てる余力はまったく無くなったのです。」

「どうしたらいいの？ 私も一応は射撃訓練は受けてるけど、体力では子供にも劣ると思う。」

「ガキの連中は毎日、遊び回って体力は大人顔負けだろう。」

「そしてココは普通の世界では無い。」

「風も音も無い世界。」

「文明の利器は手持ちの武器と役に立たない無線のみ。」

「どうしてこうなったの??」

ゼロ殺し編 よん（後書き）

東京も抹殺体制に入ります。

ゼロ殺し編 ごおーなのです。(前書き)

戦いも終盤です。

ゼロ殺し編 ごおーなのです。

赤坂です。

今、オレは羽入ちゃんと一緒に東京を襲っています。

「羽入ちゃん、ヤツが野村と名乗る女狐だ。ヤツが鷹野の背後だ。」

「アイアイサーなのです。では異界に放り込みましょう♪」

オレ達の姿は一切カメラには映らないそうだ。

これぞ完璧な密室殺人か失踪だ。

オレ達は二人で鷹野の背後だった連中とついでに以前の捜査で政府の圧力で屈した、

右翼や暴力団、そして現代日本のカルトをすべて異界に放り込んだ。これだけ駆除したら、しばらくは大丈夫だろ。

「赤坂、悪党は根を絶やしても、また次の悪党が出るのです。

根絶やししても消えないのが悪党なのですよ。」

「ウン。分かってはいるけどね。でも見逃してたヤツ等だけでも消せたら、

少しは日本も良くなると思ったんだ。」

「多分、悪党の消えたポストに次の悪党が入り込むと思います。」

そう。何時の世になっても消えないのが悪党なのだ。

正義の味方は中々出て来ないのに、悪党だけは絶対に何時の時代にも居る。

必ず居るのだ。

どうしようも無い無力感に襲われるのはこう言う事か？

「赤坂、神でもすべての人を幸せにするのは不可能なのです。目に届く人しか幸せに出来ないのが人生であり、世の常なのです。悩む事はありません。目の届く範囲だけでも助けてあげてください。」

「羽入ちゃん、ありがとう。そうだね。オレも助けられる範囲だけでも助けてあげないと。悩んでも時間は帰らないしね。」

「そうなのです。赤坂。頑張りましょう。異界ではリカ達が戦っています。私達もそろそろ帰りましょう。戦場に。」

「そうだね。羽入ちゃん。」

「ふぁいとオーなのです。」

オレ達二人は笑いあうと、リカちゃんの待つ異界に転移した。

「赤坂、羽入、ご苦勞様なのです。鷹野のバックは？」

「全員、この世界の裏山に放り込んだよ。ついでだからカルトとか右翼、

そしてヤクザの大物や親分クラスも全員・・・。」

「また豪快に放り込んだんですね。ヤツ等が結束したら大事ですよ。」

「リカちゃん、ちっとも困った顔してないのだけど。」

「分かるのですか？そう、今の社会に居る悪党だけでも消せる喜びなのですよ。」

「オレもそう思ってヤツ等を消す事にしたんだ。悪かったね。勝手な事して。」

「こう言うチャンスはもう永遠に無いのです。だったら出来る限りの手は出しても損は無いと思うのです。」

「ヨッシ、じゃオレも参戦して来るか。オレの得物はこの双拳だからね。」

終わったら、何か料理でも食わせてくれよ。」

「任せて欲しいのです。では赤坂はレナの背後を護衛して欲しいのです。」

「ラジャ。リカちゃん。」

赤坂はそう言う元氣良くレナが戦ってる拠点にと走って行った。

その頃・・・

「オーホホホホ。楽しいわああ。相手がブツ殺してもいいと言う悪党と分かっていると、

魔法も冴えるわああ。」

「キュルケ、魔力切れには注意・・・。」

「オーホホホ、それがね。不思議なのよ。いくら全力で魔法を発射しても、ちっとも魔力が切れないのよ。不思議な空間ね。ココ。メイジの修練には最高の場よ。
タバサ、貴女も練習代わりにブツ放して見なさい。理解出来るから。」

「分かった・・・。」

「キヤッ、また極悪な連中が出現したわよ。羽入、彼等も消しているの?」

「問題無いのです。」

この異界ではボク達以外の連中は全員消して欲しい悪ばかりなのです。」

「そう?じゃ殺るわね。」

もう何人殺しただろうか?分かるハズも無いが、オーク鬼に比べれば人間なんて

脆いモノ。銃器を持つてはいるが、それだけ。息を潜めヤツ等の背後から掛け値なしの

全力で放つ魔法には贖う事は不可能。

ルイズも素晴らしい戦場に連れて来てくれたわ。

ハルケギニアに帰れるかはわからないが、

帰れたら私達のレベルはかなりアップしてるだろう。

確信出来る。とにかくこの世界は素晴らしいメイジの練習の舞台だ。

「アーハハハハハ。見て、圭くん、私達の村を襲おうとしてたヤツ等が駒みたいに飛んで逝くわ。楽しいい。アーハハハハ。」

「レナ、油断はすんなよ。ヤツらはマシンガンも持ち出して来たぞ。」

「その位、お見通しよ。ホラ、ミサイルも打って来たわ。交わすわよ。圭くん。」

「おおよ。レナ!!」

「ヤツ等は何だ？見た目はガキなのに、オレ達の首を駒みたいにポンポンと飛ばしていやがる。化け物だああ。」

「落ち着け。それよりも何とかしてRの居場所まで行かないと。細切れにされるのはオレ達だぞ。」

「どうやって逝くんだ？もう余力は無いぞ？」

「前進あるのみだ。」

そうは言うが、もうミサイルも打ち尽くし、残るのは機関銃二百発と拳銃のみ。

手榴弾も交される所か、飛ばし返されてしまい、十数人がミンチにされた。

どうやってあの化け物に勝てと言うんだ？

「化け物とはレディに失礼じゃ無いのかな？かな？」

「ゲッ、で、出たあああ。」

「出たなんて失礼なのよ。このレナさんに向かって。」

「に、逃げろおお。」

「おっと、コッチも固めたぜ。さっ、オレ達の村を滅ぼす悪魔さん。消えてね♪」

十数人は居たC班だったが、今やオレ一人。

あとは全員・・・。

空ろな目をした首が転がってるか、腸を裂かれ呻き声をあげるのみだ。

誰か助けてくれ。

もう山狗を辞めるから・・・。

そこまで考えてたら、クビに感じた事の無い痛みが。段々視界がボヤけ・・・。

「ふう、ココも片付いたね。圭くん、お疲れ♪」

「レナもスゲーな。まるで蝶が舞うみたいにクビを飛ばしてたぜ。」

「ヤツ等は悪魔なの。だったら遠慮は要らないじゃ無い？」

「そうだな。躊躇してたらオレ達の村を滅ぼしてたのがヤツ等だもんな。」

「そうよ。富武さんの敵も討たないといけないし、リカちゃんなんか百回も鷹野さんに綿流しされたのよ。」

「何の罪も無い彼女に、よくも出来たモンだな。この世界でももう少しで、オレ達は殺されてたハズだ。だったら遠慮は要らないよね。」

「そうよ。圭一クン。さっ、疲れも取れたでしょ。次の作戦地域に行きましょう♪」

「お、おう。」

「三四さん・・・。」

「もしかして貴女は野村さん？」

「どうして私はココに居るのですか？」

「私も聞きたいのです。先程まで貴女に連絡取ろうとしてましたが、無線は通じず、途方に暮れてたのです。」

「あら、三四さんも？私も貴女に連絡しようとしてたのですが。どうしようも無くて困ってたらいきなりこんな世界での再会。いったいどうなってるのですか？」

「私も理解の範疇を超えています。」

すると・・・。

（クスクス、神に齒向かい、平和な村を滅ぼそうとしてた悪魔よ。貴方達はこの世界で永劫の地獄を味わうのです。輪廻も出来ないこの異界で果てなさい）

「誰？貴女は？」

（もう知る必要も無いのです。名乗る事ありません。サヨナラ・・・。）

そう言うときスクス言いながら謎の女は消えて行ったのだ。
我々はどうなるのだ？

ゼロ殺し編 ごおーなのです。 (後書き)

何故か魔力切れの無い異界でした。

ゼロ嚙子編 いちい（前書き）

終盤です。

ゼロ嚙子編 いちい

ルイズです。

異界に來ています。

それもチキュウでもハルケギニアでも無い異界。

あのツエルブストやタバサも來ているのですよ。

どうなってるの？

ま、いいわ。

とにかく敵を倒すのよ。幸いにも魔法が使える事も判明しました。

私は・・虚無、ゼロだったのです・

ブリミル様、もっと早く教えてくれたら良かったのに。

そうしたら私は屈辱の人生を送る事も無かったのですよ。

ま、いいわ。

敵よ。悪魔の手先よ。ヤツ等は。

キュルケやタバサに負けて溜まりますか。

魔力が切れても使い魔が私を守ってくれるわ。

殺ってやるわよおお。

「な、何なの？アレは・・。」

「鷹野さん、どうなってるのですか？」

「私も分かりません。とにかく異常な事態としか理解出来ません。」

「アラ？丸剣組の社長じゃありません？何でココに？」

「ワシ等も訳が分からないのじゃ。若い衆と酒を飲んでたらいきなりココに居たからのお。」

「私ですわ。東京の事務所に居たのですが、気づいたらココでした。」

「それよりも、何が起きてますのじゃ？」

「分かりません。それよりも異常な事態が起きてます。我が身はご自分で守って欲しいのですが。」

「ワシもまだまだ壮健じゃよ。敵なら殺す。」

それから彼等とは別れ、私と野村氏は二人で行動する事にした。バックとは言え、女性同士。何かと助け合う事も出来るだろう。それにしても・・・。

「山狗の遺体が・・・。」

「ええ、消えてますね。」

相当居たハズの山狗のメンバーが、殺されてたのは知ってる。だが、その遺体が無いのだ。熊とかトラが居るなら分かるが・・・。

「護身の銃は？」

「何時もバッグに入れてますわ。」

「敵を見たら躊躇されてはいけませんわ。子供でも。」

「鷹野さん、私も国の暗部に居る人間です。普通の人間ではありません」

せんわ。」

「それなら・・・。」

もう何も言うまい。

死ぬ時は勝手に死んで欲しい。

ココは異界だ。私も生きて帰れるか疑問だ。

小此木も倒されたのか、無線も静かになって来た。

「おーほほほほ。さっ、犬の皆様。私を捕まえてご覧なさい♪」

「グッ、ガキが。山狗を舐めるな!!」

「アラ? そんな汚い顔を舐める趣味はありませんのよ。」

私は清潔好きなのですから。」

「黙れ。いい加減に大人しく捕まれ。」

「そうですね。逃げるのも飽きましたわ。私はこの場を一步も動きません。」

ですから貴方、早く私を捕まえて見なさい。一步！も動きませんか♪」

「ほ、本当だろうな？」

「もう、疑り深い方ですわね。私はウソは言いませんわ。一步も動きませんから。」

「よ、ヨシ。じゃ動くなよ。」

「ええ、私は、一步も動きません。」

「じゃ、じゃあ、行くぞ。」

「ええ、いらしてください♪」

「待ってろよ。」

「ええ、私が召される日がありましたらね♪サヨナラ♪」

「へ？.？」

「ヴギゃあああああ・・・。」

「私は一步も動きませんと言いましたけど、貴方が動いた時点で貴方は終わりだったのですわ。
もうトラップにかかって居たのですから♪」

・・・沙都子、恐ろしい子・・・

ぢゅどおおおおん、ぢゅどおおおん・・・

「な、何だ？アレは・・・」

「核爆弾では無い事は分かりますが。」

「重戦車が一撃で蒸発する爆弾なんて聞いた事も無いぞ。」

「爆弾とは違う特性みたいです。」

「それにしても、山狗の残存部隊はどうなってるのだ？」

「ハイ。連絡が取れなくなってる部隊はA班、壊滅。B班、残存二

人。

C班、残存五人。D班、ゼロ。以上です。」

「それ以外は？」

「ここに居る本隊のみです。」

壊滅じゃネーか。これではもう殲滅作戦所か、防衛すら難しい。それ以前に生き残れるかも不明だ。

「武器は？」

「手持ちのミサイルが数発。手榴弾が十発です。」

「後はマシンガンと銃のみか。」

「。。。。」

「ヨッシ。お前ら。自己防衛戦のみに専念しろ。もう作戦とかそう言うのは考えなくていい。

自分が生き残る道のみを探せ。山狗は壊滅だ。コレじゃ作戦も防衛もムリよ。」

「た、隊長。。。。」

「オレは多分消されるだろう。だからオレは敵に戦いを挑む。お前等は自分の思う通りに逃げろ。戦いは終わりだが、命は自分で何とかしろ。いいな。」

「隊長。。。。」

「もう隊長じゃネーぞ。山狗は終わりだ。解散だ。お前等は自分で命を守れ。」

生きて帰れたらオレが全責任を取る。ご苦労だったな。みんな。」

そこへ・・・。

ぢゅどおおおおーん。

「ぐわあああああつつつ。」

「た、隊長・・・グギャツ。」

「オーホホホ。コレは楽しいわ。詠唱もナシに魔法が連発よ。敵も大分消せたわね。鉄の馬車も一撃で消せたわ。さすがルイズ様ね♪」

「ルイズさん、まだ生きてるヤツ居ますよ。」

「アラ？取りこぼしが居たのね。じゃエクスプローション！！」

ぢゅどおおおおおん・・・。

「す、スゲーー。今だけは敵に同情するな。」

「はううう。本当ね。圭一クン。」

ありゃチート過ぎだろうが。

戦車が一撃で蒸発するなんて、大きい爆弾でもムリ。それをヤッてのけるのだから。

「ありゃ軍団規模でも適わないかもな。」

「こんな山の中では無敵ね。」

「そうだな。レナ。ルイズさん、ご苦労様です。」

「おーほほほ。どう？私の魔法。」

「凄いつス。戦車を一撃で消すなんて、爆弾でも不可能ですよ。」

「任せなさいって。このルイズ様に♪」

「我輩を敵に回すとはどんな田舎モノかと思えば。」

「お久しぶりですね。汚玉先生。」

「お前が何で我輩を拉致したかは問わぬ。我輩を元の場所に帰せ。」

「ムリです。」

「何故じゃ？」

「貴方が生きてると日本が乱れるからです。」

「我輩は日本のために生きて来たのじゃ。」

「そんな戯言をこの赤坂が信じるとでも？」

「ならどうする？」

「死んで貰います。」

そう言うとき赤坂は汚玉に向かい、自分の拳を叩き込んだ。

「ヴおげ・・・」

「サヨナラ、汚玉さん。」

赤坂は冷めた目で顔が潰れた汚玉を見ると次のヤクザにと向かって行く。

「く、来るなあ。金ならやるから、来るなあ。」

もう言葉は交さず、赤坂は次々と自分でこの世界に送り込んだヤクザ、右翼、

カルト、そして汚職政治家を潰して行く。文字通り潰して逝くのだ。双つの拳だけで。

「小此木、おこのぎいい。連絡しなさい。山狗、どこ？？」

もう半狂乱だ。

既に山狗との通信も出来なくなってた。聞こえても呻き声のみ。。生きて元気な声は皆無。

どうなってるの？

クスクス。

鷹野、前世の私の口惜しさが少しは理解できるかしら？

幼い子供の私を良くも綿流しにしてくれたわね。

貴女だけは私が手をかけてあげるわ。クスクス。

楽しみに待っていなさい♪

ゼロ嚙子編 いちい（後書き）

山狗はほぼ壊滅しました。
いよいよ終盤です。

ゼロ嚙子編 完了!! (前書き)

戦闘終了編です。

ゼロ嚙子編 完了!!

リカです。

ボクはすっかり指揮にハマりました。

戦場がすべてボクの指揮の元、敵が殲滅されているのです。

冷めた脳で敵には容赦なく、味方の被害は少なく。

でも、もう終わりね・・・。

既に山狗は壊滅。生き残りもただ生きてるだけ。

赤坂が異界に送り込んだ日本の汚物連中は彼が殆ど潰してくれたし。

「羽入？ 敵の生き残りは？」

「リカ、後は鷹野と東京の野村が唯一なのです。」

「そう、じゃ皆に撤収準備に入ってもらって。鷹野と野村はボクが処理します。

彼女達にはボクは百年の間、散々な目に遭わせてくれましたからね。綿流ししてあげないと、ボクの復讐は終わらないのですよ。」

「リカの好きにするといいいのです。」

「じゃ皆に伝えて来てね。帰りに二人を捕縛して連れて来て。」

「アイアイサーなのです。」

この戦いもようやく終わりね。チート能力を偶然、手に入れる事が出来たのは

本当にラッキーだった。

コレが無かったら戦いは苦しいモノだったと思う。
ルイズさんとコルヴェールさん、そしてキュルケさんとタバサさん
にはお礼をしないと。

彼等を送り返すだけでは、感謝にもならないわ。

何か無いかしら？

考え事をしてたら、全員が帰って来た。

「皆、ご苦労様でした。戦いは終わりました。

戦後処理がありますが、それは羽入が処理してくれます。

さて・・鷹野、野村。言いたい事でもあるかしら？

いくらでも聞いてあげますわ。」

「リカちゃん、何故、私にこんな事をするのですか？」

「鷹野、貴女は私の村をどうするつもりだったのですか？」

「な、何もするつもりは・・。」

「ウソを吐くのもいい加減にきなさい。

貴女は私を綿流しする事で、雛見沢を殲滅するつもりだったの
でしよ？

あの武器は何？こんな長閑な村に物騒な兵器を持ち込み、何と戦う
つもりだったの？

ま、いいわ。もう終わった事。

貴女の釈明も聞く気はありません。東京の野村さんもね。」

「わ、私は何も・・。」

「もういいわ。彼方達の考えていた事はすべて分かっています。
だけど・・。許すつもりはありません。」

圭一、赤坂、それと役に立っていない入江。
彼女達の手足を縄で縛り、大の字にしなさい。」

「了解ですつ。」

彼等は鷹野と野村を縛ると暴れるのも無視して、手足を縄で縛る。
そしてギッチギチに木に括りつけると・・・。

「鷹野、野村。今こそ事実を教えてあげるわ。

ボクはね。この百年もの間、貴女に殺され続けて来たの。
見た目は子供だけど、百年も輪廻を繰り返し、既に脳だけは老婆よ。
分かる？私の苦しみが。

幸いにも色んなチャンスがあつて貴女に勝つ事が出来た。

だけど私は貴女を許す事は出来ない。野村もね。

男性には手を出させない。私だけが貴女を下すわ。

私の苦しみを知り、そして後悔しながら逝きなさい・・・。」

ボクはそう言うのと、手術用のメスで彼女達の服を裂き、
皮を少しづつ切り裂く。

すぐに逝かれても困るから死なない様に加減して、苦しみだけを与える。

まずは乳房ね。野村から逝かせてもらうわ。

鷹野、恐怖に発狂してもムダだからね。

野村がぐぎゃああああとケダモノみたいな声をあげ逃げようとするが、

ガッチリと縛った縄に手足を縛られているので、どうにも出来ない。
汚物の大小を垂れ流し、苦悶するが無視。

雛見沢の村人の百年の苦しみを思い知れ。

乳房を切り裂き、臓器を切り、足を取り除き、手を切り、達磨にする。

そして腸を出し、最後に首を切る。

野村、この異界で苦しみながら永劫に魂を彷徨うのよ。サヨナラ・・。

「鷹野、待たせたわね。」

「り、リカちゃん。私を殺すの？」

「アンタ、私の告白を聞いてなかったの？私ほね。

アンタに百回も綿流しされて来たの。彼女みたいに一回じゃ無いのよ。

百回も子供を綿流ししてくれたのよ。その恨みを忘れられるとでも？富武も嬉々としてバラバラにしたそうね。このケダモノ・・。」

もう彼女と言葉を交わす事は無い。

まずは手足だ。レナに命じ、ナタで鷹野の手足を切り飛ばしてもらおう。

悲鳴を上げるが無視ですよ。

野村と違い元気な状態で手足を切断された鷹野はダルマとなってビクビクと跳ねてる。

クスクスクス。まるで釣り上げた魚みたいね。

次は耳、口を切り裂く。

目は最後まで取らないわ。

自分の臓器を見て逝かせてあげるから。

嬉しいでしょ？自分の綿を見る事ができて・・。

臓器を取り出し、彼女にくわえさせる。

自分の肺を見て驚愕してるわ。クスクス。

もういいわね。

レナ、首を刎ねてあげて。

鷹野、サヨナラ♪

ドスッ！！

それが鷹野の今生、そして世界との別れの音だった。

鷹野と野村は今やスプラッタなバラバラ遺体。

ふう、終わった。

「皆、ありがとう。雛見沢に敵対してた敵は完璧に消滅させました。ヤツ等の魂はこの異界で永劫に彷徨う事になります。

輪廻も適わぬ異界です。

罪の意識に悩む人は何とかしますので申し出てください。」

「リカちゃん、罪を背負う必要は無いよ。オレ達は雛見沢を守っただけだ。

放置してたら、俺たちがヤツ等の毒牙にかかってたんだ。」

「そうよ。リカ。アンタは立派だった。

指揮も完璧。私達はケガも無く、この戦場から帰れる。

それはリカのおかげよ。」

「ありがとう、皆。彼等の処理が終わったら雛見沢で綿流しのお祭りがあるわ。

そこで充分に楽しんでください。

赤坂もね。」

「リカちゃん、ありがとう。オレも輪廻して来た事をようやく思い

出せたよ。」

「赤坂・・・」

「リカちゃんの忠告を無視して妻子を失ったオレ。色んなオレを思い出した。」

今生でようやく百年の後悔から脱する事が出来た。ありがとう、リカちゃん。」

「・・・赤坂もだったのですね。ありがとう。」

ルイズさん、コルヴェールさん、キュルケさん、タバサさん。

異界の戦いに参加してくれてありがとうございました。

彼方達の支援で私達は無事に戦闘を終える事が出来ました。

お礼の言葉も無い位、感謝しています。

お祭りが終わったら貴女達の国に帰す魔法を羽入に考えさせます。今宵は楽しんでください。」

「リカ、私達、帰れるのですか？」

「ハイ。羽入なら可能です。戦闘も終わりましたので、羽入の魔力も必要無くなります。」

貴女達をお返しする事も可能です。」

「分かったわ。リカ。ありがとう。じゃ撤収したら祭りに参加させてね。」

「モチロンです。楽しんでください。」

「じゃトリは部活の部長たるこの魅音様にさせてね。」

皆、ご苦勞様でした。色々と危険もあったけど、無事戦闘も終わり

ました。

証拠は何も残りません。ですので気に病む必要もナシ。
村での生活を楽しく生きましよう。部活課外授業、撒収！！」

「「「ウオオオオ！！」」」

戦いは終わった。

すべてを処理した私達は異界に転移した裏山を雛見沢に転移。
各自自宅に帰り、お風呂にドップリと浸かり、疲れと血の汚れを流す。

魅音の家に集まると魅音の婆ちゃんの手料理で腹を膨らませる。

元気になったら小遣いを貰って綿流しの祭り。
楽しかった。

入江もすっかり元気になり、我々と遊んだ。

赤坂も東京の仕事を退職。

興宮の警察に入る事になった。

大石が定年で辞職するまで、毎日引き継ぎと麻雀三昧出きると大喜びだ。

任地はこの雛見沢になるとか・・・。

もちろん家族も雛見沢に来る。

分校に赤坂の娘も入るそうだ。嬉しいな・・・。

ルイズさん達はハルケギニアに帰る事が出来た。

帰る時に、沢山のお菓子と医療器具。薬を持たせた。

もし何かあっても、ルーンで知る事が出来る。

彼女達が危機になったら助けに行くと約束したから。

恩は絶対に返そう。

こうして雛見沢は平和になったのだ。

だが、ルイズさん達に危機が迫ってるとは、その頃は知らなかったのだ。

ゼロのなく頃に。

離見沢危機編、終了。

ゼロ嚙子編 完了!! (後書き)

雛見沢編完了です。

え？

これで終わりがあって？

違います。

次回からハルケギニアに部活が移動します。
まだまだ物語は終わりませんよ。

ゼロ帰り編 いち（前書き）

ルイズやコルヴェ、キュルケにタバサが帰りました。

ゼロ帰り編 いち

「ルイズとミスタ・コルヴェールが消えた。」

「大変だ、他の先生に知らせないと。」

。。

大騒ぎになってたハルケギニアのトリステイン魔法学園だったが・・。

「ヨッコイシヨ。ふう、ハニユー、ありがと。」

やっと国に帰れたわ。」

「ボクの方こそありがとうなのです。おかげでボク達の村は平和になれたのです。」

ルイズ達も困ったら、何でも相談してください。

ボク達は世界は違っても、ルイズの友であり、使い魔なのです。」

「頼りにしてるわ・・。あ、そう言えば・・。」

「どうかしたのですか？」

「誰か一人、しばらくでいいから使い魔としてこの国に来る事出来ないかしら？」

「・・。なら、ボクが常駐しましょう。ボクなら地球に帰るのも簡単なのです。」

この格好ならこの異界でも使い魔に見えるでしょう。」

「いいの？」

「構わないのです。リカも承諾してくれると思います。」

「ありがと。ハニュー。貴女達と戦えて本当に良かったわ。」

「ボク達は戦友なのです。魂の友なのです。」

「そうね……。所で、今、どうなってるのかしら？この世界。」

「ルイズが逆召喚された時間とほぼ同じですよ。」

「へ？？そうすると……。」

「ハイ。ルイズは一時消えただけで、この世界に帰れたのと同じです。」

「ホント？嬉しい♪」

「キュルケやタバサもこの世界の彼女達と入れ替わっています。彼女達とも仲良くするのです。」

「そうね。ツエルブストも一緒に戦ってくれた。タバサも使い魔を貸してくれた。

私も魔法が使える様になれたのは、貴方達と戦ったからね。私からもお礼を言うわ。

ハニュー、ありがとう。。。」

「ア~~~~!! ルイズだ。ルイズが居るぞおお。」

「何か騒ぎになってたみたいね・・・。」

「皆の所に行くのです。そしてボクを紹介して欲しいのです。」

「分かったわ。ハニュー。」

私達はコルヴェール氏と一緒に学園の同級の皆の所にレビテーションで行った。

皆が驚いてた。

そうね。今まではゼロのルイズだったのに、今の私は虚無^{ゼロ}のルイズだもん。

異界で練習したせいか、魔力の流れも完璧に把握出来てる。

余裕でスクウェアクラスの魔法も詠唱出来るだろう。

でも他国に目を付けられるのはイヤだから、ドットメイジのフリをするわ。

キュルケやタバサもスクウェアになってたらしい。

やはり実戦に勝る練習は無いわね。

ヒナミザワの皆に感謝よ。本当に。

コルヴェール先生は帰りに養毛剤とか言う毛のお菓を貰ってた。

うつすらとだが寂しい頭に毛が生えて来てる。

それにハニューが色んな機械を転移してくれると言うので、彼も大喜びだ。

私も色んなお菓子を貰ったし、薬も貰った。

もしかしたらちい姉様の病気も・・・。

そうよ。忘れてたわ。お姉様よ。

「ハニュー、アンタって病気を治す事は出来るの?」

「具合にもありますが。多分出来ると思うのです。」

「ホントっ?? そしたら騒ぎが落ち着いたら私の実家に来て。

ウチのカトレア姉様が不治の病で大変なの。この国の医療では治せないのよ。

何とか助けて欲しいの。お願い。」

「ルイズ、頭を上げてください。ボク達を無償で助けてくれたのがルイズ達でしょ?

そのルイズが困ってるなら、私の力で何とかして見ます。

まずは会わせて欲しいのです。具合も分からないと請け負う事も出来ません。」

「ありがとう。ありがとう。私、貴方達とトモダチになれて本当に良かった。」

ルイズはオイオイと泣きだしてしまった。

異界から自分の祖国に帰れ、気も緩んだのだろう。

ボクで助けられる事なら何でもしてあげよう。

彼女達にはそれだけの恩を与えて貰ったのだ。

「……ハニユー、もし出来るなら私の母も……。」

いきなり背後からタバサが出て来た。

彼女の母も毒を飲まされ、発狂してると言う。

自分の娘が分からず、人形を娘と思い込んでいるとか。

さすがに一度に診るのは不可能なので、少し時間を貰おう。

「タバサ、貴女の願いも出来る限り聞きますけど、まずはルイズの

姉を診ます。

ボクも限界があるのです。許してください。」

「……いい。私の母は狂ってるだけで、身体は元気。ルイズの姉様は相当危ないと見たのでしょ？
ならルイズが先になるのが当然……。」

「ありがとうございます。でも出来る限り早くします。
ボクでどうにも出来ない場合は雛見沢の入江に見て貰うといいいので
す。」

「アノ世界に私の母を連れて行けるの？……」

「お任せなのです。ですが、出来ればこの世界で何とかしたいのです。
す。」

あまりアノ世界の事は他には知られたくないのです。」

「当然……。ルイズの姉様が良くなったらお願いします……。」

「お任せください。じゃルイズ。この世界にボクを案内して欲しい
のです。」

「ハニユー。ありがと。タバサも少し待っててね、貴女も私の友達
よ。」

「私もルイズは友。一緒に戦い、苦労した……。」

「ルーズウ。キュルケ様も忘れてはダメでしょ♪」

「あら？ツエルブスト。アンタも帰ってたの？」

「相変わらずの毒舌ね。ま、いいわ。今後もヨロシクね♪ルイズ。」

こうして私の第二のハルケギニアでの生活は再開出来た。

ハニューが居てくれたのも助かる。

ちい姉様の治癒もお願いできるとは・・・。

あの異界に召喚されたのは私の人生最大のラッキーだったと思う。

ゼロ帰り編 いち（後書き）

帰還編の始まりです。

ゼロ帰り編 にい（前書き）

帰還編です。

ゼロ帰り編 にい

コルヴェールです。

実りある異界での生活を終え、私達はトリステインに帰国出来ました。

帰国の際、彼等から養毛剤と言う毛生え薬を渡されました。素晴らしい効き目でした。

わずか数日で私の磨き上げられてた頭に蔭りが出て来たのです。

そう、毛根が復活しました。

数ヵ月後が楽しみですね。ゴホン。失礼しました。

ミス・ヴァリエールと一緒に消えてた私ですが、帰国して驚いたのは、

わずか数分程度しか時間が経過していなかったと言う事です。

ハニュー殿の言うには、時間の経過が向こうの世界と違うためだろ？との事。

それにしても大騒ぎになる寸前でした。

ルイズ嬢はおろか私までも異界に消えたのですから。

騒ぎになる前に帰れて良かったです。ハイ。

「ツルベールくん。では、ミス・ルイズと君は？」

「この世界とは違う異界に旅立っております。チキュウと言う異界です。

月の一つ。そして魔法とメイジの居ない世界です。

その世界のヒナミザワと言う村に私達は逆召喚されてしまいました。

」

「フム。中々興味深いのお。して、ルイズ嬢の隣に居る可愛い女性
は？」

「異界でルイズ嬢と契約した一人、ハニユー嬢です。」

「ハニユーなのです。ボク達はルイズの使い魔なのです。」

「ハテ？達と言う事は？」

「地球に残ってる六人が彼女の使い魔です。ボクを入れると七人居ます。」

「ボクだけがこの世界に来ました。」

「な、七人も人間を使い魔……。どう言う事かね？コルヴェールクン。」

「やっと名前を呼んでくれましたね。ボケオスマン殿。」

「コレは国にも内密にして欲しいのですが。彼女は虚無です。」

「伝統的に虚無は人、もしくはエルフを使い魔にするそうです。」

「きよ、虚無……。伝説のメイジと言われる虚無がミス・ヴァリエールとは……。」

「異界では、戦争が起きていました。我々はその村の子供と一緒に戦いをして来たのです。」

「そこで活躍したのがヴァリエール嬢とその使い魔達でした。」

「過酷な戦いでしたが、我々ブカツメンバーは敵を殲滅。」

「村に平和を取り戻しました。そしてハニユー嬢に頼み、我々をハルケギニアに」

「送り返して貰ったのです。」

「それにしても時間が、あまり経過して居ないのだが。」

「この世界とは時間の流れが違うみたいです。我々は一週間以上、向こうの世界に滞在してましたが、コチラでは数分程度。私にも理解出来ていません。」

「その説明はボクがするのです。オスマンで良かったですか？ボク達の争いにルイズさん達をお借りしてしまった事をまず、謝罪します。」

ボクは雛見沢の守り神、羽入と申します。彼の世界では千年程度生きて来ました。生まれは人間でしたが、死後神の仲間入りとなり雛見沢を見守って来ました。」

「せ、千年程とは・・・。」

「神の世界では幼子なのです。ボクも。なのでこの様に幼い娘の格好なのです。コチラの世界のブリミルですか？

彼も神の世界では、ようやく青年です。」

「我々の神のブリミル様もご存知とは・・・。」

「神の世界は以外と狭いのです。力も限られております。ボクも色々と能力はありますが、無限ではありません。一番欲しいと思う能力程、神でも得られないのです。」

「そ、そうですな。我々も色々欲しい力ほど、得るのが不可能です。」

「ボクが欲しかった能力を与えてくれたのがルイズだったのです。おかげでボクの村は救われたのです。」

今度はボク達がルイズを支えるべきと思い、まずはボクがこの異界に來たのです。」

オスマン、ヨロシクなのです。」

「ホホホ。宜しくの♪ハニュー殿。ルイズ嬢、彼女は神界の方。絶対に惨い扱いはするで無いぞ。」

「モチロンです。彼女は私の大切な戦友です。大切に同居します。」

「アウアウ。嬉しいのです。所でルイズ。この世界にはシューはあ
るのですか？」

「シュー？あ、シュークリームね。今度厨房に頼んであげるわ。
とりあえずクックベリーパイで我慢してね。甘いわよ♪」

「アウアウ。嬉しいのです。早く食べたいのです。」

「オスマン校長、そろそろ彼女も疲れたみたいですので、部屋に帰
ります。」

「ウム、ご苦労だった。ミス・ヴァリエール。ハニュー嬢。また会
おう。」

オスマンとコルヴェールと別れると私達は厨房に向かった。
クックベリーパイを作ってもらったためだ。

厨房に着くと、何故かタバサがハシバミ草を山ほど食べてた。

「タバサ、それは？」

「ハシバミ草。あの世界では無かったので、食べたくなった・・・。」

「それにしても・・・。」

「私には美味・・・。」

ガツガツと食べ始めたので、邪魔するのも悪いと思い、調理師にクックベリーパイを

作ってもらう事にした。久しぶりのクックベリーパイ。

美味しいのだが、異界の色んな菓子を食べたせい、口が肥えてしまった。

「ハニニュー、甘さも色々と違いますね。」

「それは仕方ないのです。文化も食生活も何もかもが違うのです。」

「そうね。今度、チキニューの料理を教えて欲しいわ。」

「お任せなのです。ボクは千年の知恵があるのです。」

「頼りにしてるわ。」

色々とズレた所もあるハニニューだが、頼りになるヤツだ。こうして私の第二の人生が再開したのだ。

明日は帰郷して、ちい姉様をハニニューに見てもらおう。

「リカちゃん、羽入は？」

「羽入はルイズさんの使い魔となってるのです。彼女に尽してるみたいなのです。」

「そうか。オレ達も彼女には世話になったもんな。」

「羽入とはテレパシーで繋がってますので、何かあったらすぐに分かるのです。」

万一、彼女に危機が迫ったら、ボク達も彼女の支援をするのです。」

「モチロンだよ。ルイズさんのおかげでオレ達の村は平和になれた。たとえば千年経とうが、彼女の恩は忘れないぜ。」

「そうなのです。ボク達は彼女の使い魔なのですから。」

「それまでは羽入ちゃんに頑張って貰うのか・・・。
何か彼女だけ負担かけて悪いな。」

「今度、エンジェルモートのシューを異界に送るといいのです。」

「おお、送ろう。魅音、手配頼むぜ。」

「任せてよ。オジさんが手配しておくから。でも割り勘よ。」

「モチロンだぜ。皆、いいね？」

「」「オオオオウ。」「」

平和な離見沢でした。

ゼロ帰り編 にい（後書き）

ルイズの第二の人生が始まります。
しばらくは平和なハルケギニアです。
雛見沢も平和です。

ゼロ帰り編 さん(前書き)

カトレア救済編です。

ゼロ帰り編　さん

「ハニニュー、今日は私の実家に帰るんだけど、少し遠いのよね。」

「どの位の時間が掛かるのですか？」

「馬車で三日はかかるわ。」

「……。ルイズ。ボクの魔力で移動出来るかも知れません。ボクの手を握り、実家を思い浮かべて欲しいのです。」

「ほ、本当？分かったわ。ハニニューを信じる。手を握って実家を思い浮かべたらいいのね？」

「ハイなのです。持ち帰る荷物はありますか？」

「実家に帰れば色々と部屋に残してるから、別にいいわ。」

「じゃ行きましょう。手を握って目を瞑ってください。」

「わ、分かったわ。ドキドキするわね。」

「心配しないで欲しいのです。」

そう言うと、ハニニューは私の手を握り、そして・ブシュツと言う音がしたかと思うと、我が家の玄関前に居たのだ。

「ココがルイズの家ですか？」

「ほ、へ??? そ、そうよ。私の実家です。」

ボケラっとしてたら、玄関にお母様が・・・。

「ルイズ。どうしたのですか? まだ学院では?」

「お母様、お話があって帰宅しました。お父様とちい姉様はいらっしゃいますか?」

「お父様は居室に居ます。カトレアは具合が悪くて寝てます。」

それから私は使い魔を得た。

この使い魔は神なので絶対に無礼は働かないで欲しいと頼んだ。

ウチのお母様、バトルマニアだから、釘を刺しておかないと・・・。
ちい姉様に会うと、「あらあら? ルイズ。珍しいお客様ね?」と言われた。

彼女が神の一人と言うと、もうお迎えが来たの? ですと・・・。

「あうあう。ルイズの姉は面白いのです。」

「あらあら、私は神様に連れて行かれるのかと思いましたわ。」

「ボクは邪神では無いのです。善には善。悪には悪なのです。」

「失礼しました。」

私は、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌですわ。

異界の神様。」

「あうあう。ボクは羽入と言います。

小さい村の守り神として千年しか生きてない小物なのです。

カトレア、今日はルイズの願いで貴女の病氣を見るために来ました。気持ちを楽しにしてボクに貴女を見せて欲しいのです。」

そう言うのと、ボクは神の目で彼女を見たのです。

血の流れがかなり悪く、悪性のガンも数箇所。

正直、良くもこの状態で生きてるモノと感心した位です。

「あうあう、カトレア。貴女は恵まれた環境に居たので今まで生き残れたのです。

貴女のご両親に感謝するのです。」

そしてボクは彼女と両親、ルイズにカトレアは色んなガンが併発してる。

このままでは、一年も持たない。

徹底的に病巣を取り除くため、部屋からしばらく出て欲しいと頼んだ。

「ハニニュー殿、カトレアは治るのですか？」

「普通なら、助かりません。

ボクも恩のあるルイズだからこそ反則的、神の手段を用いるのです。この治療は神の技術なので、他言されたり目撃されると出来なくなるのです。

ボクが治癒した事は、関係者以外には絶対に漏らしてはならないのです。」

「わ、分かりました。ハニニュー様にすべてをお願いします。」

「終わったら甘いクックベリーパイを沢山食べさせて欲しいのです。」

「フフフ。ハニュー。分かってるわ。お母様。彼女は甘い食べ物大好きです。」

出来る限り準備しててください。」

「ルイズ、ハニュー様。分かりましたわ。」

カトレア。彼女の言う事を聞いて治療して貰うのよ。」

そう言うルイズと両親はカトレアの部屋から退出してくれたのです。

「カトレア、今からする治療ははっきり言いますと、貴女を赤子まで戻し、

再度現在の貴女に戻します。神以外には用いてはならない禁断の魔術です。」

私のした治療は絶対に誰にも漏らしてはなりません。貴女の伴侶でもです。約束出来ますか？」

「ハニュー様、ありがたい治療をお願いするのです。」

カトレアは貴女の言葉にすべて従い。生涯かけても貴女への誓いを守ります。」

「分かったのです。元気になったら一緒に甘いお菓子を食べるので。」

「フフフ。楽しみですね♪・・・。」

ハニュー様、私を今の年齢には戻さず、ルイズと同年齢には出来ますか？」

「可能なのです。ボクも樂なのですが、いいのですか？」

「私は幼い頃からずっと今の病気で外で遊んだ事も友達と町に出かけた事ありません。

このまま逝くモノと思い、諦めて生きて来ました。

ハニユー様のおかげで元気になれる希望が出たのですが、元気になっても今の年齢では・。

出来ましたら、青春を謳歌したいのです。」

「カトレア、良く分かりました。気持ちは理解出来ます。では、貴女をルイズと同年齢にします。良いですね？」

「ハイ！！是非お願いします。」

ボクはカトレアの願いを聞く事にした。

彼女の気持ちは痛い程分かる。

ボクも雛見沢で千年の孤独を味わった。

やっと私を観る事が出来たのがリカだったのだ。

だが彼女には鷹野と言う悪魔が居た。

おかげで彼女は百年もの輪廻地獄を味わう事になったのだ。

それがルイズと知り合う事ですべて解消。

彼女には我々は何度生き返っても恩を感じるだろう。

異界の我々の戦いにも参戦してくれたのだ。

彼女の家族は私達の家族。

出来る限り助けてあげよう。

「終わったのです。カトレア。気分はどうですか？」

「・・・身体が軽い・・・視線が低くなりました。そして・・・」

カトレアは狂気乱舞になりました。

嬉しいでしょう。

ビックリした彼女の家族がカトレアを見てさらにビックリ。

何と、若返ってしまってたのですからね。

「ハニユー様、カトレアは？」

「もう大丈夫なのです。治癒過程で彼女の希望により、少し年齢を巻き戻しました。

カトレアは今は16歳の年齢の身体です。もちろん健康そのものです。」

「お母様、お父様、カトレアは生き返ったのです。もう病気は完璧に消えました。

ハニユー様のおかげで、私は若い健康な身体となれたのです。私も魔法学院に通いたい。お願いします。私を学院に・・・。」

カトレアの涙のお願いに彼等は頷くしかありません。

こうしてカトレアはルイズと共に、魔法学院の生徒となったのです。

「あああう、もう食べ切れないのです。」

「ハニユー様、貴女のおかげで私達の娘は健康になりました。感謝してもしきれません。ありがとうございました。」

羽入はルイズの家族から山程のクックベリーパイを与えてもらった。

限界まで食べ、腹もパンパン。

「ハニュー、私も限界よ・・・。」

「オホホホ。ハニュー様、満足されましたか？」

学院でもカトレアとルイズをお願いしますね。貴方が居たら私達も安心ですわ。」

「安心するのです。それにルイズには仲間が沢山居るのです。何があろうとルイズとカトレアは守ります。」

「ありがたい言葉ですね。ハニュー様。」

そして、ボク達は馬車でゴトゴトと学院にと旅立ったのだ。カトレアを学院に編入させるため、カリーンが同行するためだ。カトレアはルイズと似た外見なので、双子の姉と言う事にした。

「ちい姉様と学院に通えるなんて夢みたい・・・。」

「私もよ。ハニユー様のおかげね。ありがとう、ハニユー様♪」

ゼロ帰り編　さん（後書き）

カトレアがルイズの双子と言う事になりました。
誤字修正しました。

ゼロ帰り編 よん（前書き）

シエスタ登場です。

ゼロ帰り編 よん

あああう。羽入なのです。

リカからテレパシーでエンジェルモートのシューをくれるそうなのです。

あの最高級シュー……。ジュルリと涎が出たのは内緒にして欲しいのです。

「ルイズ、ボクは少し雛見沢に帰って来るのです。」

「どうしたの？」

「リカからテレパシーでシューを大量にくれるそうなのです。受け取ったら帰って来ますので、少し留守にします。」

「ええ、分かったわ。私にも分けてね。」

「モチロンなのです。シューは一人で食べても美味しく無いのです。皆で楽しく食べるのが一番美味しいのです。」

ボクはルイズとカトレアに留守を頼み、久しぶりに雛見沢に帰ったのです。

「リカ、帰ったのです。シューはどこですか？」

「羽入、相変わらずね。ルイズさんは元気？」

「彼女は元気なのです。彼女の姉が病気で逝く寸前だったので、治癒しました。」

「そう……。でも助けられて良かったわ。彼女には本当に世話になったから。」

所だね。そろそろ分校も夏休みなのよ。

私達も雛見沢からルイズさんの国に遊びに行こうと思うんだけど。」

「あああう、大丈夫と思うのです。校長のオスマンはスケベですが、いいヤツなので、

頼めばバッチコイと思うのです。」

「そう……。なら皆で行きましょう。魅音、他のメンバーは？」

「もう準備終わってるわよ。羽入ちゃん。お願い出来る？」

「OKなのです。もうルートは確保してあるのです。」

部活メンバーは無条件で雛見沢とハルケギニアを往復出来る様にしたのです。」

「アンタ……。本当に使える神になれたのね。」

昔は無能と罵ってたけど訂正するわ。ありがと。羽入……。」

「リカ、嬉しい言葉、ありがとなのです。そう言えばタバサがハシバミ草と言う苦い草が

好物なのですが、リカの好きなキムチも持って行くといいのです、」

「そう、彼女の好みそうなんだ。」

「アチラはワインの名産地もあるそうなのです。」

「羽入、早く行くわよ。」

「あうあう、皆と一緒に行くですよ。」

「ワインがボクを呼んでいるのです。」

しばし待っていると、圭一、レナ、魅音、詩音、沙都子が集まって来た。

「羽入ちゃん、オジさん達もルイズさんの世界に行けるんだって？
楽しみだねええ。」

「お姉は空気読めませんから、この詩音様が付いて行かないと、大事になりますわ。」

「へへへ、ファンタジーな世界か。楽しみだぜ。」

「はううう。カアイイの沢山あるかな？かな？」

「おーほほほ。リカ。楽しみですね。」

「全員集まったのですね？ボクの手を握り、それ以外の人も全員手を握り合ってください。」

ボクがヨシと言うまで目は瞑ってて欲しいのです。色々と気分が悪くなると思うのです。」

ボクは皆に注意し、異界への扉へと入ったのです。
もうボクは慣れたのですが、他の人は始めて。
注意しておかないと・・・。

事故も無く、無事にハルケギニアのルイズの部屋に着いたのです。

「あうあう。皆、目を開けていいのです。」

「ココが異界?？」

「あらあら、始めまして。」

カトレアが部活メンバーを見て、いきなりのご挨拶なのです。

「は、始めまして……。えっと……。」

「私、ルイズの姉のカトレアと申しますわ。ハニユー様に治癒して貰い、

今はルイズの双子の姉となっています。皆様、ヨロシクね♪」

「ぼ、ボクはリカと言うのです。羽入が世話になってるのです。ヨロシク、カトレア。」

「オジさんは魅音と言います。カトレアさん、ヨロシク。」

部活メンバーが続々と彼女に挨拶をした。

そして、オスマンに滞在の許可をお願いしに行き、女性陣はルイズとカトレアの部屋。

圭一はコルヴェールの部屋に滞在する事になった。

食事のお願いをするため、厨房に出かけると……。

「み、魅音。アレって……。お前、詩音の他に妹居た？」

「ゲ。本当だ。でもオジさんは知らないよ。」

魅音そっくりな女性がメイドの格好で厨房で働いてたのだ。

ルイズがコックのマルトーを呼び、食事の手配を頼んだと、そのメイドが

私達の傍に来たのだ。

「始めまして……。わ、私が居る……。何で??」

パニックってた。

「えっと、メイドの??」

「シエスタと言います。始めまして。貴族の皆様。」

「シエスタさん……ですか?始めましてなのです。」

「あの……シエスタさん、もしかして日本の方ですか?」

「いいえ、私はタルブと言う村の出身です。」

「そう……私達は雛見沢と言う村からこの国に来ました。ヨロシクなのです。」

「ヒナミサワ……ですか?私の御爺ちゃんが昔話してた村の地名と同じですね。」

「御爺ちゃん?」

「ハイ。昔、竜の羽衣と呼ばれるモノでこの国に来たと言っていました。」

「ちなみに御爺ちゃんの名前は？」

「ソノザキタケオと言います。」

「じっちゃんだあああ。」

「へ?? じっちゃん。」

「うん。私達の爺ちゃんも園崎武雄と言うの。戦争中に戦闘機に乗って、

戦死したと言われてるんだ。」

何と武雄がこの国に居たとは。。

世界は広い様で狭い。

彼は数年前に老衰で亡くなったと言う。

だがタルブ村には墓もあるそうだ。

今度、お魴と茜を連れて来てあげないと・・・。

「シエスタは私達の従兄弟になるんだよ。」

「本当ですか？まさか私に従兄弟が居たなんて・・・。」

「こんだけ似てて爺ちゃんの名前も同じ。それなら確實だよ。」

「う、嬉しいです。」

「何か魅音と詩音とはまったく違う人に見えるわね。」

「ホントだ。性格が良す・・・。グギャツ。」

「けいちゃん、何か言った？」

「圭ちゃん……。私達に何か？？」

「い、いいえ。何もありませんです。ハイ。」

ドタバタしてしまったが、コックのマルトーに頼んで、シエスタを私達付きのメイドに指定して貰った。

何とかして彼女をメイドから脱する事にしたいと思う。それにしても武雄が、この異界で果ててたとは。お魘もビックリするだろうな……。

ゼロ帰り編 よん（後書き）

少し設定を変え、シエスタの爺ちゃんを園崎武雄にしました。
これで魅音の従兄弟シエスタの完成です。

ゼロ帰り編 ごお (前書き)

ゼロ魔名物、ギーシュとの決闘です。

ゼロ帰り編　ごお

シエスタです。

私に従兄弟が居たなんて、本当にビックリですわ。

亡くなったタケオお爺ちゃんが、生前話してた事が本当なんて。

それにハニー様がお爺ちゃんが竜の羽衣を祭ってた神社の守り神、オヤシロ様だなんて。

とても神様には見えないのです。ええ、とても愛らしくて。

不敬に当たりますわね。

でもあの世のお爺ちゃんも彼等に会えれば、大喜びすると思いますわ。

懐かしいヒナミサワからのお客様ですもの。

「本当っに世の中狭い様で広いのね。私もビックリよ。」

「そうですね。ルイズ。ボクも武雄がこの世界に居たとは初めて知りました。」

羽入は神なので、一応、過去からの村人は全員把握してるのだ。

当然、園崎武雄も。

彼が海軍を志願し、兵学校（日本海軍は士官学校が何故か兵学校と呼ばれてました。）に

入り、太平洋戦争に参戦。

戦争末期のフィリピン戦の最中に行方不明。

戦死と言うのが公式な公報なのだ。

茜が生まれたばかりだったお魍の悲しみは当然だった。

その武雄が異界で果ててるとは。

オヤシロ様の私でもビックリです。あうあう・・・。

「ルイズ、私達が厨房で食べると邪魔になりそうなのですが。」

「そ、そうね。いいわ。私がオスマン校長に頼んであげるわ。

アルヴィーズ食堂で、皆で食べましょう。」

「いいのですか？」

「いいのよ。ねっ、姉様♪」

「ええ、私の命の恩人、ハニユー様にお友達の方ですもの。当然よ。」

ルイズとカトレアを先頭にワイワイ騒ぎながら、美女軍団が食堂に集まったから、

注目されるのは当然なのです。

当然、シエスタが私達のメイドとして案内してくれるのです。

圭一がワタワタしてるのが面白いのですよ。

食事も終わり、ノンビリと寛いでいると、いずこから罵声が聞こえて来たのです。

見ると、シエスタが金髪男に絡まれています。

どうしたのですよ？

「ねっ、ルイズ。シエスタが絡まれてるわ。」

「ホント。アレはグラモン家の四男、ギーシュよ。」

「どうしたのかしら・・・。」

いきなりケンカ売る訳にもいかないので、私達は彼に事情を聞く事

にしたのです。

「どうしたのですか？彼女に何か粗相があったのですか？」

「おお、聞いてくれたまえ。そのメイド……メイドが三人居るぞ。」

「ねっ、リカちゃま。コイツ殺してもいい？私達の従兄弟を……」

「いきなれメタな発言はアレなのですが。ギーシュとやら、彼女がどうしたと言うのですか？」

話を聞くと、シエスタは彼が落とした香水の瓶を拾っただけらしい。そして彼がトボケたのに、それを見かけた彼の二股彼女にバレ、往復ビンタを食ったらしい。そして本命にも、ブン殴られ八つ当たりしてたそう
だ。

KILLしてもいいわね。最低男よ。

「最低なのです。人間のクズです。」

「そうね。救いようが無いわ。」

「二股は別としても、彼女に八つ当たりするなんて、男の価値ナシ。
」

「チョッ、ちょっと待ちたまえ。そのクズとか価値ナシとかは誰の事かね？」

そこで私達は無言で全員が彼を指で指します。当然なのです。

「どうやら君たちは貴族に対する礼儀を知らないようだな。」

「ネツ、ルイズ。貴族ってこんなバカばかりなの？」

私達はルイズみたいな誇り高い人だけが貴族だと思ってたけど。」

「一緒にしないでよ。こんなバカは貴族の価値も無いわ。」

オーク鬼のエサにするのが一番ね。こんなバカは。」

「酷い言い方するね。ゼロのルイズ。」

「私はゼロでは無いわ。虚無^{ゼロ}のルイズよ。」

間違えないで。バカギーシュ。」

「私もルイズと同意権ですわ。グラモン君。貴方、男性として最低ですわよ。」

「ぐっ……。いいだろう。ボクが貴族の躰をしてやろうでは無いか。そのボクをバカにした平民達。ヴェストリの広場に來たまえ。そこで決闘しようじゃないか。」

「ルイズ、やっぱり死刑でいいわね。彼。」

「ええ、救いようが無いわ。でも殺すとアレだから半殺し程度にしてあげて。」

貴方達なら可能でしょ？」

「そうですね。いきなり殺しでは証拠隠滅も不可能なのです。」

「んじゃオレに任せろ。皆の手を借りる必要も無いだろ？」

「圭一・・・。」

「圭一、彼はゴーレムを使います。大丈夫ですか？」

「この前の戦いよりは楽だろ？なら大丈夫。絶対に殺したりはしないから。」

「おっ、相棒。この世界でもオレを使ってくれるか？」

「オレの相棒はデルフよ。ヤツはゴーレムとか言うのを作るそうだが。」

「ヘボゴーレムだろ？まだガキだから。そんなの切り捨ててやるから構わない。
ヤツちまいな。」

「け、圭一君。レナも一緒に戦わせてくれないかな？かな？」

「おっ、レナも参戦してくれるか？」

「アハハハハ。だって圭一君はレナと同じアレなのよ。
一緒に戦うのが当然なの。はううう。」

ダブルガンダと戦うなんて。

ギーシュ、バカな子。

骨は拾ってあげるわ。

潔く散りなさい。

ヴェストリの広場には既に多くのギャラリーが集まった。
皆、ヒマなのだろ。

「諸君、決闘だ!!」

ギーシュが薔薇の造花を掲げると、生徒達から歓声上がる。

「ギーシュが戦うぞ。相手は見かけぬ平民だ。」

「とりあえず逃げずに来た事は褒めてやろうじゃないか。」

「誰が逃げるか。こんな楽しい事。」

「そうなおお。レナ、ワクワクしてるのおお。」

「ちよっ、君たち二人だけかね？」

「全員でかかったら貴方が不憫なおお。」

「そうそ。ちゃんと手加減してあげるからね。包帯とかは自分で準備してよ。」

「グッ、バカにしてるのかね？怪我するのは君たちだぞ。」

「まっ、もういいから。早くしましょ。レナワクワクしてるのおお。」

レナと圭一から挑発され、頭に來たのかギーシュは薔薇の杖を振ると、

五体の青銅のゴーレムを成型。

レナ達に襲いかからせた。

「行け、ボクのワルキューレ。」

「なっ、レナ。アレがゴーレムか？」

「何かかーいいのおお。お持ち帰りしてもいいかな？かな？」

何かノンビリしてる二人だったのだ。

それでも一応は巨体のゴーレム。

ズンズンと音を立て、二人に切りかかったのだが。

「はぁ、メンドクセっ。」

圭一が蹴り飛ばすとバラバラになってしまったのだ。

「ゲッ、手抜きして蹴ったのに。もうバラけてやんの。」

「圭一くん。コッチもだよ。」

レナの地下水ナタの一振りで、ギーシュゴーレムは鏡面みたいな切り口で

綺麗に真っ二つにされてた。

「なっ、コレでアンタの全力？もう少し何か無いの？これじゃイジメだよ。」

「ぼっ、ボクのワルキューレが。」

それでもギーシュは精神力を振り絞り、さらに五体のゴーレムを成型。

しかし・・・。

「はぁ、これじゃ山狗の兵隊より弱いわ。」

「可愛そうだね。コレじゃ。」

手拔きの余裕ですべてバラバラにしてしまってたのだ。

もうギーシュは半泣き・・・。

「ぼっ、ボクの・・・。」

「ねっ、もう止めよう。負けを認めてよ。」

「そうなおお。レナ、これ以上イジメはしたく無いのおお。」

「うっ、ウルサイ。貴族のボクが負けるなんて・・・。

認められない!!!」

ギーシュは最後の精神力を振り絞り、一体のゴーレムを成型出来たが・・・。

成型直後に気絶。

ゴーレムは土に帰ってしまってた。

「私達の勝ちでいいかな? かな?」

「いいんじゃないネ？」

「この勝負、圭一、レナの二人組みの勝利と虚無^{ゼロ}のルイズが認定します。」

ルイズの宣誓で、この勝負はボク達の勝ちとなってしまった。

納得行かないバカな生徒が居たが、ルイズの爆発魔法で吹き飛ばされた。

ナム~~~~!!

ゼロ帰り編 ごお（後書き）

ギーシュは気絶はしましたが、ケガはありません。
ガンダのお二人相手ではイジメですな。

ゼロの恩返し編 いち（前書き）

タバサ救済編です。ついでにマチルダも。

ゼロの恩返し編 いち

・・・強い。

まるで伝説の勇者、イーヴアルディの勇者みたいだ。

彼等は・・・。

異界での戦いを見てたから、アレでも手抜きとは分かるが。彼等に勝てるメイジは居ないのでは無いか？

「はあ、何かイジメだったね。レナ。」

「はううう。本当だよ。圭一くん。」

「勝ったのに、何でシケタ顔してんの？アンタ達。」

「だってね。もう少し強いかと思ってたらさ・・・。」

「まあドットメイジなんてあんなモンよ。」

ギーシュとの戦いを終えたレナと圭一だったが、あまりの弱さに後味が悪いと嘆いている。

確かに気持ちも悪いと思う。弱い子供を苛めた気分なんだろう。

「レナ、気分転換にさ、オレと模擬戦しないか？」

「いいね。圭一くん。得物はどうするの？」

「さすがにケガしたくは無いらな。そこらの棒でどう？」

「いいよ。圭一くんとなら。」

それから圭一とレナが落ちてた棒で、模擬戦を始めたが、凄いい戦いとなった。

どちらもガンダールヴ。

空を舞い、地を叩き、ただの棒がそこらの真剣よりも恐ろしい武器となっている。

「アーハハハハ。圭一くん。やはりキミは最高だよおお。楽しいい、」

「レナはやっぱり強いな。だが、オレも負けていないぞ。」

周りのギャラリーは彼等に敵対するのは絶対に止めようと思ってた。人間とは思えない跳躍力。そして速度で競う男女に呆れてた。

その中には「土くれのフーケ」ことロングビルが居たのだ。

「な、なんだい？ありゃ。化け物か？アンナの居たらアタシでも命が無いわ。

しばらくは休業かね？」

フーケは破壊の杖と呼ばれるマジックアイテムが学園の宝物庫に収蔵されてるのを狙ってたのだ。

だが、あんな化け物みたいな剣士が居るとさすがにヤバイ。

勝てない戦いは避けるのが一流の盗賊なのだ。

そう考えてると・・・。

「愚かなる事を考えるな。異郷に住む子供を路頭に迷わせるか。」

いきなり背後から見知らぬ声がする。

「だ、誰？ アンタ？」

「我は異界の神。我は異界からこの地へと赴任したモノなり。

彼の地でお前が保護してる子供達は今のままでは路頭に迷わせるぞ。お前は。」

「何でそんな事言えるんだ？」

「お前が盗賊だからだ。盗賊の末路は惨めなモノ。いずれは必ず捕縛され、

獄に付く事になる。考えを改め、正当な職で働け。」

「そんな事を言われても、普通の給与では子供達を養えないのよ。どうしたらいいのよ。」

「お前はドコで働いてる？ ココはこの国では最高の労働環境では無いのか？

相談すれば良いのだ。ココの最高責任者に。」

「どう言う事よ？」

「給与の交渉をするのだ。そして事情を話せば、無慈悲な事は言わ

ぬハズ。」

「ぐっ……。そ、そうね。。でも、聞いてくれるかしら？」

「我也同席しよう。交渉に……。」

すると背後に居た影が、スルスルと姿を現した。

「あ、アンタは……。」

「あうあう、ボクこそが異界の神、通称オヤシロ様なのです。ココではルイズの使い魔をしてるのです。」

「でも、アンタみたいな人外がオスマンを説得出来るのかい？」

「お任せなのです。こう見えてもボクは頼りになるヤツなのです。それよりも、マチルダ。盗賊はダメなのですよ。捕まったらどうするつもりだったのですか？」

「だって、取り潰された貴族の私では、盗賊くらいしか稼げる仕事は無かったのよ。」

「こんないい環境の仕事に付いてて、盗賊を続けるとはお前は愚か過ぎなのです。」

給与が足りないなら、上司に相談するのが基本なのです。贅沢に使うならまだしも、お前は子供を養うためのお金。迷う必要は無いのです。」

「ぐっ……。確かに。じゃ私の交渉に付き合ってくれるのかい？」

「お任せなのです。」

それからボクはマチルダを連れ、オスマンに交渉したのです。彼女はアルビオンで孤児の面倒を見てるが、今の給与では足りない。仕事はいくら増やしても我慢するし、セクハラも少しは耐えるから、給与を上げて欲しい。

オスマンも惨い人間では無いので、何とか上げてもらった。

フーケの事はさすがに言わなかったが、オスマンは知ってたみたいだ。

「オヤシロ様、本当にありがとうございました。おかげで盗賊も辞められそうです。」

「それで良いのです。盗賊には未来は無いのですよ。」

ボクも千年の間、色んな人間を見て来たのです。

ですが盗賊や博徒が畳の上で最後を迎えられた人は一人も居なかったのです。

人間はマジメに生きてこそ、最後は家族に看取られるのですよ。

困ったり苦しい時は誰かに相談するのです。」

「分かりました。確かに今ままでみたいに盗賊を続けてたら、私は捕縛され、

孤児は頼る人も無く、アルビオンの森で果てていたでしょう。

オヤシロ様のおかげで、それに気づけました。ありがとうございました。」

「あうあう。それで良いのです。マチルダの面倒見てる孤児の中の一人は、

ボクの角と似た印象の子が居るのですよね。

ボクも神になる前、この角で誹謗されて生きてた時代があったので

す。

人事とは思えず、ボクが口を出したのです。マチルダ、彼女の未来は貴女にかかっているのです。頑張るですよ。」

「ハイ。オヤシロ様。」

「ふぁいとオーなのです。」

私はオヤシロ様と別れ、テファに手紙を出した。

今までよりは仕送りが減るけど、何とか頑張って欲しい。私も頑張るから。と・・・

不思議な神様だったな。オヤシロ様。

「タバサ、タバサは居るのですか？」

「・・・呼んだ??？」

「待たせたのです。タバサの母に会いに行くのです。」

「ホント?」

「ホントなのです。さ、ボクの手を握り、タバサの自宅を思い浮かべるのです。」

「分かった。手を握ればいいのね？」

「そうなのです。では、行くのです。目は瞑ってください。」

「分かった・・・。」

私は彼女の言う通りに目を瞑り、手を握り締めた。
するとブシュツと言う音と共に空気が一瞬で変った。
私は風のメイジ。空気の流れには敏感だ。ココは・・・。

「着いたのです。ココが貴女の家ですか？」

驚いた。一瞬で私の家に着いてたのだから。
やはり神、ずるい。こんな能力なんて・・・。

私は彼女にお母様を会わせた。

相変わらず人形を私と思い込んで抱きしめている。

私はタバサでは無い。シャルロットなのに、人形をシャルロットと呼んでる。

私を抱いて。

私を呼んで。お母様・・・。

「タバサ、いや・・・シャルロット。貴女のお母様は人外の薬で狂わされていますね。」

「エルフの薬で狂わされていると聞いた。
私達ではエルフの薬は解除出来ない。」

「自分の意思で発狂しているのでは無いのですね。」

貴方達の家族は誰かに迫害されて
いないですか？」

「私の父がこの国の王、ジョセフの弟だった。
私の父は何者かに暗殺され、その後でお母様が狂ってしまった。」

「治すのは難しくは無いのですが、このままでは、また薬を投与されるのが目に見えています。」

相談なのですが、貴女のお母様を私達の土地に移送しませんか？
そして貴女も一緒に雛見沢でしばらく隠れて貰うんです。

あの土地なら、迫害を受ける事ありません。どうです？」

「・・・いい、それでいい。私の望みはお母様と一緒に暮らす事。
それが適うなら、どんな暮らしでも我慢出来る。」

「分かりました。では、早速移送します。治癒は彼の地でします。」

ボクはタバサに荷物を纏める様に指示し、彼等を雛見沢に移送する
事にした。

アチラでは園崎の家もある。

ついでだ、お魍と茜も連れて来よう。

ボクは彼等の守り神だ。

タバサは荷物を纏めたと言うので、彼女の母と一緒に雛見沢に転移
した。

衰弱してるので、しばらくは入江に任そうと思う。

彼女の母の病状は症候群発症に似てるので、入江なら大丈夫だろう。
とりあえず、彼女の母に飲まされた薬の症状だけはボクが消してお
いた。

正気にはなったが、衰弱が激しい。

タバサに母と一緒に入江に任す事にした。

彼女と別れ、ボクはお魍と茜を連れて行く事にした。

「お魍、居るのですか？」

「誰だね？ おや、羽入じゃねーか。どした？」

「お魍、茜も呼んで欲しいのです。重大な話があるのです。」

お魍はボクの顔が普通では無いと思い、茜を興宮から呼び、同席させた。

「お魍、茜。今から魅音達が遊びに行ってる異界に連れて行きます。」

「何でだね？」

「お魍、武雄は終戦末期にフィリピンで戦死しましたね？」

「・・・それがどうしたん？」

「武雄は異界に居ました。既に亡くなっていましたが、彼の地に武雄の墓もあり、

遺骨もあります。そして彼の子孫も居ます。子孫の一人、シエスタと言う子は

魅音にソックリです。」

ボクは彼女達に武雄の最後の土地の事を詳しく説明したのです。そして最後に・・・

「何故、ボクが武雄の事を詳しく知ってるかと言いますと・・

ボクがこの土地の守り神、オヤシロだからです。

千年の昔からボクは雛見沢の住人を見守り続けて来ました。

八代続いた古手神社の末梢、リカの誕生でようやくボクは雛見沢の人と

交流が出来たのです。雛見沢にかかったたある呪いは、ボク達で解決しました。

そして、夏休みに彼女達が異界の友の土地に遊びに行くと・・

シエスタと言う彼の地のメイドが武雄の子孫と分かったのです。

お魎、武雄が異界で家族を得たと言うのに不満はあるでしょう。

彼も生涯苦労したと聞いています。彼の骨を雛見沢に埋葬して欲しいのです。」

「オヤシロ様、まんずありがたい話です。ワシ等を千年も昔から見守ってて

くださったとは。ワシ等が不甲斐ないばかりに、オヤシロ様の呪いだとか言い放って、

ホンマに申し訳ありませんでした。

ワシの旦那の武雄まで探してくださって。感謝の言葉も出ません・・。
。」

お魎と茜はボクに着いて来てくれる事になった。

異界で魅音達のビックリする顔が楽しみだ♪

タバサは母と一緒にしばらく入江に預けておこう。

ゼロの恩返し編 いち（後書き）

次回は魅音と詩音の絶叫が・・・。

ゼロの恩返し編 にい（前書き）

タルブに向かいます。

ゼロの恩返し編 にい

きゅいきゅい、イルククウなおお。

お姉様が居なくなってしまったのおお。

だけどお姉様、お母様の治癒のためにアノ世界に移送されたんだってええ。

イルククウの肉、誰がくれるのかしら??

「魅音、詩音、こんな世界に居たのね!!」

「ゲッ、母さん、ばっちゃ。」

「詳しい事はオヤシロ様から聞いたよ。所でこの世界に父さんが居たんだって?」

「う、うん。シエスタと言う私達の従兄弟の住む村に埋葬されてるみたい。」

「なら、その村に行くよ。私達もヒマじゃ無いんだ。

早く遺骨を掘り返して、父さんを雛見沢に埋葬してあげないと。」

それからばっちゃんと母さんはシエスタの居る厨房に向かった。

土産も持参する辺りはさすがばっちゃだ。

彼等に調味料と砂糖と塩を大量に渡したのだ。

この世界では貴重品だから、羽入が土産にするならコレと進言してたらしい。

シエスタは休暇を貰い、私達とばっちゃ、母さん。そしてルイズ達でタルブと言う村に向かう事になった。

さすがに人が多く、時間も限られてるので私達でこの世界のドラゴンを呼び、移動する事にした。その一匹がハルケギニアと一緒に戦ってくれた賑やかな竜、イルククウだったのだ。

「きゅいきゅい、またお姉様達と遊べるのおお。イルククウ嬉しいのお。」

「イルちゃん、また世話になりますね。後でお肉貰ってあげますから。」

「きゅいきゅい、嬉しいのおお。」

「・・・魅音、詩音、貴女達、こんな能力があったのですか？」

「お魎、茜、私達の村に危機が迫ってたのは話しましたね。」

その時にこの異界から来てくれたルイズさん達の協力で私達は勝利出来たのです。

彼等が居なかったら私達は鷹野率いる山狗に滅ぼされていたのです。」

二人に戦いの詳細を話すと彼女達も我が娘が郷里を守ってくれた事を誇りに思ってくれた。

そして転校して来たばかりの圭一にもお礼の言葉を述べてた。

そんな話をしてて、出かける準備をしてると、一台の馬車が来たのです。

「ルイズ、カトレア。どこかに出かけるのですか？」

「「お母様・・・。」」

「おや、もしかしてルイズさんの母君でしょうか？
私は魅音、詩音の母、茜と申します。」

「丁寧な挨拶、心に染みます。」

私は、ルイズとカトレアの母、カリィヌと申します。アカネさんですか？

宜しく願います。」

それから母上ルイズの二人は意気投合。

今からタルブに向かうけど、一緒に逝こうとなってしまうたのだ。
元々気性が似た二人。

その夜には肩を組んで飲み明かしたとか・・・。

それは後の事において・・・。

集まった全員を二匹の竜の籠に乗らせ、タルブまで直行する事にした。

竜の籠はルイズの母が手配してくれたのだ。

さすが貴族。

籠では二人の母とお魎が和気合い合いとしてた。

異界とは言え、彼等も貴族の心を持ち合わせてたから余計気が合うのだろ。

あの二人が仲良くなって良かったと安心してるのがルイズと魅音達だったのだ。

怒らせるとオニでも逃げ出すもんな。

やがて竜籠はタルブに到着。

シエスタの家族に会うと・・・

お魍が武雄そっくりなシエスタの父に飛びついてしまったのだ。

「アンタ~~~~!!」

「魅音、詩音、ばっちゃんを止めて。父さんと勘違いしてる。」

「アイアイサーです。母さん。」

三人でお魍を羽交い絞めし、何とか引き剥がす事が出来た。
そして異界から来た親戚と言うと武雄の息子、タケルは親戚が居たのか・・・

と、感慨無量の顔だった。

シエスタと並ぶと双子が三つ子になった様でもある。

武雄が眠る墓を詣でると、お魍はさらに泣き出したのだ。

戦死して、骨も残っていないと思ってた亭主が異界で果ててたのだ。

「海軍中尉、園崎武雄、異界に眠る。昭和五十五年。春。」

武雄は自分で墓石に名前等を彫りこんでいたのだ。

残された遺品には生まれたばかりの茜とお魍の若き日の写真。

そして飛行服とライフジャケット、飛行帽とゴーグル。ブーツなどだ。

驚いたのは武雄の愛機だった紫電があった事。

中翼で脚が長い事で嫌われた戦闘機だったが、実力はかなりのモノだった。

それが完全な形で残されてたのだ。

「スッゲー。紫電だ。紫電改は見た事あるけど、紫電は世界中を探しても無いよな。」

「確かに父さんの愛機だ。最後に送られた写真と一緒に写ってた戦闘機と同じ。」

父さん……。」

茜は会った事も無い父の愛機にすがり泣きだしてしまってた。お魘もしかり。

「じっちゃん、始めて。母さんの娘の魅音と言います。」

「始めて。じっちゃん。詩音と言います。」

双子の二人も墓と紫電に向かい、挨拶をした。

「お魘、茜、良かったわね。」

「オヤシロ様、本当にありがとうございます。貴女のおかげで武雄も喜んでると思います。」

それから、タケルの家で宴会となってしまった。

ルイズの母、カリィヌも参戦してしまい、もう阿鼻叫喚の地獄。タケルの家が半壊してしまったのは愛嬌です。

「ミオンさん、シオンさん、私達の家が……。」

「ゴメンなさい。絶対に母さんに弁償させるから。」

「いいんです。私の父さんも大喜びしてますから。それにしても、本当に従兄弟だったのですね。私達。」

「そうだよ。シエスタ。私達は生まれた世界は違うけど園崎の家の家族なんだ。」

シエスタ、メイドを退職して、私達の村の学校に来ない？」

「お誘いは嬉しいのですが、この世界からは・・・。」

「あっ、ムリは言わないわよ。でも、何時かは遊びに来てね。歓迎するから。」

「分かりました。必ず!!！」

タルブの夜の騒ぎはまだまだ続いていた・・・。

ゼロの恩返し編 にい（後書き）

茜とカリーンが友達となりました。

この二人は絶対に親友となれると思ったので・・・。

ゼロの恩返し編 さん（前書き）

更新に手惑いました。

ゼロの恩返し編　さん

あうあう・・羽入なのです。

カリィヌと茜は恐いのです。ガクブルなのです。

あの二人を怒らせてはならないとオヤシロ様は断言するのです。

あうあう・・昨夜は二人が大暴れして、シエスタの自宅が半壊してしまっただのです。

シエスタの父、タケルは苦笑いしているのです。

不憫なのです。あうあう・・。

「タケル。スマンかったね。昨夜は大暴れしてしまっで。」

「いや、アカネ姉さんだし、いいよ。」

タケルとアカネは異母姉弟としてお騒が認知したのだ。

しかし二人で一軒家を破壊してしまうとは。

恐ろしい二人なのです。ハイ。

後にタルブ村に園崎御殿が建つのは茜の手配に拠るモノです。

紫電は圭一がルーンの効果で操縦可能と判明。

学院に運び、整備しこの国に役立てる事になった。

運送はボクが請け負う事になり、タルブ村から一つの名物が消える事になる。

沙都子はタルブの裏山が気に入ったとかで、しばらくタルブに滞在するとか。

タルブの山がハルケギニアのトラップ地獄になるのか？

リカもタルブにしばらく滞在するらしい。

いい夏休みになりそうね。二人とも。

他のメンバーは学園でルイズと遊ぶ事になった。

茜とお魎は武雄の骨を掘り返し、雛見沢に埋葬するため帰国した。ボクは雛見沢とハルケギニアの往復で忙しいのです。あうあう。何か楽な方法は無いもんですか？

「リカああ。この裏山もいいトラップフィールドになりますわ♪」

「沙都子、雛見沢の山じゃ無いのだから、程ほどにしておくのよ。」

沙都子は、誰の手も入っていない山にトラップを仕掛けまくってしまってた。

今では、恐ろしい凶暴なトラップがゴマンと設置。

あの山狗を殲滅した裏山以上になっていた。

危険なので、タルブの住民には裏山には入らない様に指摘。

だが何が幸いするか分からないモノよ。

オーク鬼が沙都子のトラップにかかり、今まで被害に遭ってた村人が皆無となる。

以後、村人はオークが現れると裏山に誘導。

沙都子はタルブの守り神として敬われる事になるのは後の事。

ボクはそろそろ魔法学院に帰る事にしたが、沙都子は残る事になった。

トラップの管理をするらしい。

頼むので村人に犠牲は出して欲しく無いのです。

学院に帰ると圭一とコルヴェールが紫電の整備をしてた。

気難しいエンジンと長い主脚で就役した機の大半が着陸事故で失われたと言う、

現代では本当に幻の戦闘機だそうだ。＞圭一の受け売りなのです。殆ど戦闘をしてなかったらしく、機銃弾は満載。無いのは燃料だけ。武雄もさぞや無念だったと思うのです。

戦わずして、無力化してしまったのですから。

紫電に搭載されている誉エンジンは難しいエンジンだったと聞く。とにかく良いガソリン、オイル、プラグを使えば高性能を発揮出来たと思うが、

敗戦が迫ってた日本では望めない話。

またパイロットも訓練が足りず、マリアナ沖海戦では「マリアナの七面鳥狩り」と、

大笑いの種にされた程であつたのだ。

もう少し日本がパイロットを大切にしたら。

熟練パイロットが生きてたら、この様な屈辱は無かったと思うだろうに。

武雄は兵学校出身の士官だったので、指揮官配置となつたので未熟でも生き残れたのだろう。

護衛には熟練パイロットが付いてたはずだし・・・。

脱線してしまつたが、この世界には色んなチートがある。ガンダールヴのルーンもその一つ。

航空機に触つた事も無い子供の圭一がルーン効果で熟練パイロット並の技術を習得できるのだ。

ズルイと言われても当然。

レナも扱えるみたいだが、圭一に譲ってくれたのだ。

レナ曰く。

「はううう。」

圭一くん、飛行機の話していると目がランランとして恐いのおお。」

だとき。

圭一も男の子。

飛行機に乗れるチャンスなんて異界以外には無い。

日本で飛ばせば領空侵犯に引っかかり、下手すれば撃墜されるのだ。

「こんな美味しいチャンスは永遠に無いよな。

男なら戦闘機。

くうう。最高だぜ。

魅音のじっちゃん。紫電を残しててくれてありがとう♪」

「こんなダラズのカギにワシの武雄の愛機を預けるのも不安じゃが。飛ばせると言うなら飛ばして欲しいからのお。」

お魴も亭主の飛行機が飛ぶ所を一目見たいのだろう。

雛見沢には紫電が飛んでから帰ると言い出したのだ。

「仕方ないわね。私も父さんの飛行機が飛ぶのは見たいしね。」

茜も残る事になってしまった。

「ケイイチクン。この紫電を飛ばすためのガソリンはコレで大丈夫かね？」

コルヴェールはタンクに残ってたガソリンを元に鍊金してくれてたのだ。

「・・・もう少しオクタン化が高いとさらに性能が上がります

が。

とりあえず飛ばすには大丈夫だと思います。

イナーシャースターターを回すクランクは錬金出来ましたか？
アレが無いと魔法をいつも使わないと飛ばせなくなります。」

「コレでいいのかね？」

コルヴェールは圭一が書いてくれたクランクの図を元にクランクを錬金してくれた。

「うん。」

しっかりとイナーシャーに食い込んでます。
強度も充分です。

ヨッシ、これで試験飛行準備完了だぜ。」

圭一は武雄の遺品の飛行服、ゴーグル、ブーツを履きグローブを着すると、

操縦席に乗り込んだ。

偶然にも武雄と圭一の体格はほぼ同じだったのだ。

>戦前の日本人の平均身長は大体160センチ前後。
現代の中学生レベルが平均でした。

すると・・・。

「アンターーーー。」

またもやお魎が圭一に抱きついてしまったのだ。

「ばっっちゃ、ズルイ。オジさんもけいちゃんに抱きつきたいのに・・・

。」

「魅音のばあちゃん、もう少し待ってな。オレが爺ちゃんの飛行機を飛ばすからさ。」

婆ちゃんはウンウンと泣きながら、圭一から離れてくれた。

「けいちゃん凄い。ばっちゃんを口説き落とした。」

「圭一クン。かっこいい……。はううう。」

「おやおや、ウチの婆様を口説くとは……。」

「中々やりますわね。あの使い魔クン。」

圭一は周囲を無視して、飛行作業に入った。何時までも飛ばない訳には行かないのだ。

紫電の操縦席に入ると、まずは計器の点検。

エルロン、ラダー、エレベーター、フラップを点検。

ブレーキを踏み、利きを確認する。

そして……。

「コルヴェール先生、

イナーシャー回せと言いましたら、エンジンに差し込んだクランクを回してください。

そして前離れと言いましたらクランクを引き拭きます。

最後にコンタクトと言いましたらエンジンを点火です。

危険ですので、プロペラの圏外に離れてください。」

「ケイイチくん。分かったよ。
では合図してくれたまえ。」

「ハイ。では……。イナーシャー回せ。」

圭一の掛け声でコルヴェールはクランクを勢い良く回す。

圭一は回転計が上がるのを待ちも充分回ったのを確認すると、

「前、離れ。」

クランクを勢い良く引き抜く。

「コンタクツ。」

点火スイッチを入れ、誉エンジンは三十八年ぶりの咆哮を上げた。
バリバリバリバリツツと騒々しい音と共に四枚のプロペラは回り出す。

プロペラが回る寸前に操縦桿を手前に引き、エレベーターを上向きにする。

（プロペラの後流でプロペラで地面を叩くのを防ぐためです。）

お魴や茜は愛する人の乗ってた戦闘機の雄叫びに感激。
ルイズやハルケギニアの人は竜の羽衣が
ただのマジックアイテムでは無かったのかと驚いてる。

「チョーク外せ。」

魅音、詩音が車輪の前に置いてたチョコクを外すと、圭一はスロットルを入れる。

スルスルと紫電はゆっくりと進み、学院の門から出た。

（さすがに学院の庭からは紫電が飛ぶのはムリです。）

充分な直線があるのを確認すると、圭一はスロットルを全開。

紫電は轟音と共にハルケギニアの空に舞い上がった。

「飛んだよ。アンタ。」

「父さん、見てるか？」

「圭一くん。カッコイイ♪」

「ふ、フン。さすが私の使い魔ね。中々やるじゃない。」

コルヴェールと一緒に出来る限りの整備をしたせいか、

紫電は戦時中よりも好調に大空を舞う事が出来た。

一応機銃も試験しておかないといけないので、

スロットルに付いてる機銃レバーを握る。

ズドドドド！！と言う轟音と共に四門の20ミリ機銃は銃弾を吐き出す。

「ヨッシ。大丈夫だな。」

一通りのテストを済ませ、脚が伸びてるか地上から確認して貰う。

（紫電は脚が伸び切らず、片足着陸になりひっくり返る事故が多発してました。）

（レナ、脚は両方とも伸びているか？）

（圭一クン。OKだよ、）

無線が無いけど、ルーンで相互のテレパシーが使えるのだ。

非常に便利だが、視界まで共有する時は困る。

特にフロに入る時だ・・・

それはさておき・・・

「よっし。着陸するぞ。」

紫電は陸軍式の主車輪から着陸し無事に着陸出来た。

（海軍は尾輪と主車輪を同時に叩きつけて着陸する三点着陸が普通ですが、

紫電では危険なので接点着陸と言う主車輪を叩きつけて着陸するのです。）

やがて学院の門をくぐりエンジンを止めると。。

「うおおおお～～～！！スゲー。竜よりも速く飛んでた。」

「あの火を噴く棒はナニ？竜のブレスより恐いわ。」

「はううう。凄かった。。」

そして・・・

「アンターーー!!」

やはりお魍が飛びついて来たのだ。

圭一もしばらくはお魍の頭を抱え、撫でてあげてた。

「魅音、詩音、あのボウヤを逃がすんじゃないわよ。

身体張ってでも絶対にモノにしな。逃がしたら爪を剥ぐからね。」

茜から圭一を絶対に捕まえろとの命令が来たのだ。

後にルイズ、魅音、レナ、カトレア、シエスタ、その他の女性軍が圭一を追い回す事になるのだが、それは後の事。

お魍は、今は亡き亭主の面影を圭一に見れて幸せだったとか・・・。

ゼロの恩返し編　さん（後書き）

紫電を飛ばすのに手間取ってしまいました。

技術的なことで間違いがある可能性もありますが、コレで間違いな
いと思います。

もしありましたら指摘してください。

今回はマニアに走ってしまいました。

お許しを。

ハルケギニアの憂鬱（前書き）

既に別な話になってしまい、修正するのが大変です。

ハルケギニアの憂鬱

ルイズよ。

どう？

私の使い魔の一人、ケイイチは？

田舎の平民にしては中々でしょ？

あのシデンとか言う竜の羽衣を軽々と扱うなんて、少しは自慢してもいいわね。

お母様もお気に召してたみたいだわ。

それにしても、ミオン達の母君。

アカネさん。

すっかりお母様と意気投合してたわね。

あのお母様とトモダチになるなんて、普通・・グギャツ・・。

「ルイズ、何か不埒な考えしていなかった？」

「い、いいえ。どんでもございせん。お母様・・。」

危なかった。

もう考えるのもよそう。危険が危ない・・。

「ミスタ・ケイイチ、貴殿は凄い男だったのだね？」

以前対決し、気絶した男、ギーシュだったかな？

彼がオレに話しかけて来た。

「いや、それほどでも無いが・・。確かギーシュだったか？
キミは？」

「そうだ、ギーシュ・ド・グラモンと言う。」

ああ、それとこの前は本当に申し訳なかった。
改めて謝罪しておく。」

「いや、俺たちはともかく、殴られた女の子には謝罪したか？
ソッチが先だと思うぜ。」

「フツ、もう土下座して来たよ。二人とも。」

土下座した頭を踏みにじられ蹴られ、ようやく許して貰えた・・・。」

ギーシュは悲しげな目をして、遠くを見てた。

「そ、そうか。それなら良かった。別に二股するなどは言わない
が、

言い訳は止めた方が良いいぜ。アレは最悪だったからな。」

「そうだね。メイドの彼女にも改めて謝罪しておくよ。」

「アレは早く謝った方が良いいぜ。彼女、魅音の親戚だったからな。」

「まさか烈風のカリン様のトモダチに彼女達の母君がなるとは・・・。
凄い人なんだろうね。」

「ああ、逆らわない方が絶対にいいと思うぞ。オレも。」

先日なんか、タルブのシエスタの自宅が半壊したぞ。」

「二人でか？」

「そ、二人だけでだ。」

「凄い・・・やはりカリン様とアカネ様だ。」

それからギーシュと色々と話して、彼から友達になって欲しいと頼まれた。

貴族で薔薇だが、中々楽しいヤツだ。

少し抜けているが、それも彼の味なのだろう。

部活メンバーには不評だが、ツレとしてなら面白いヤツだ。

そして・・・

「トリスティン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーりーりーりー」

トリスティン王国の王妃、アンリエッタが学院を親善訪問したのだ。既に茜とお魎は雛見沢に帰り、紫電騒ぎも落ち着いてたある日の事だった。

アンリエッタは憂鬱だった。

「もう・・・何時になったらサトシ様に会えるの??」

「姫、王族たるもの、
無闇に臣下の前で愚痴とか零さぬモノですぞ。」

「何時も王族、姫。私は王族である前に女、女性なのです。
それも年頃の。」

恋の一つや二つ。普通では無いですか!!」

「このマザリーニ、男とか女性とか言う前に、国家に対する責任があります。

もちろん姫にもですぞ。

姫の言動はトリステインの言動。もう少し自分の立場を自覚してください。」

「なりたくってなった姫ではありませんわ。

私は出来るなら平民になりたかった。もしくは普通の貴族に。」

「姫、言葉には気をつけてくださいと言ったばかりでしょう。

誰かに聞かれたらどうするつもりですか？」

「そしたら私は引き摺り下ろされてしまいますわね。嬉しい事ですわ。」

マザリーニは逃げたくなっていた。

王妃は王の逝去に伴い、喪に服するとか言って王政を投げ出す。

王女はアルビオンの王子に夢中。

王よ、貴方は何故こんなにも早く逝かれたのですか？

マザリーニも頑張っていますが

王族でも無い自分ではどうする事も出来なくなる日も近いと思います。

せめて王子が居てくれたら。

トリステインの暗い未来を思い、マザリーニは心の中で嘆いてた。

「姫、もうすぐ学院ですぞ。愚痴なら後でマザリーニがいくらでも聞きます。」

馬車を降りたら王女に帰ってください。」

「分かりましたわ。マザリーニ。」

アンリエッタは王女の仮面を被り、学院の生徒に微笑み手を振り、馬車を降りて歩いてた。

（ふう、何とか元に戻ったか・・・。コレではガリアとの婚姻をしろとか言い出したら、本気で国を投げ出すかも知れぬ。せめて王妃が王になってくれたら。この姫も少しは考えを改めるだろうに。）

マザリーニは誰にも相談出来ない苦しみに胃がキリギリと痛み出した。

（苦しいか？）

へ????

（王の代わりを務め、国政の舵を一人で取り、ダメ王族の管理をするのが苦しいか？）

どちら様でしょうか？

（我は神界の住民の一人。今は訳あって、この国に駐留しておるオヤシロと言う。）

オヤシロ様？ですか？

（ウム。救いを求める心の声が聞こえたので我はお前の心に問いかけたのだ。）

ありがたい事です。オヤシロ様。確かに苦しくはありますが、自分で選んだ道。

たとえ茨でも歩くしかありません。お心遣い感謝します。

（お前が倒れたらこの国はどうなる？もう少し自重せよ。心の苦しみはやがて過労となり、心を病んでしまうぞ。ムリはせず、誰かに自分の心の闇を打ち明けるのだ。）

そ、そうでございますね。ですが、誰に話したら良いのでしょうか？

（確かにお前の苦しみを打ち明けられる人間は皆無に近いだろう。だが、お前の立場に近い人間は必ず居ると思う。そのモノと一緒に国の未来を

考えてもらうのだ。一人で抱えるな。マザリーニ。）

あ、ありがたい言葉です。私が一番欲しかった言葉かと思います。そうでございますね。確かに誰かと相談するべきです。自分でも心当たりを探して見ます。

（そうするが良い。もし苦しい時は心の中で我を呼べ。できる限り悩みを聞いてやろう。）

オヤシロ様、ありがとうございました。マザリーニ、闇が少しは消えたと思います。

（我はしばらくこの国に居る。お前が倒れそうになってたら、また

助言しよう。

お前が倒れるとこの国は終わるのだろう？)

その通り・・・ですね。

姫はまだまだ子供。王妃は喪に服してしまい、王政に関わって頂けません。

本当に困っています・ハア・・・。

(王妃を引きずり出せば良いでは無いか。

子供や部外者に任せるな！とガツンと言うのだ。

それがイヤなら国から出て行けと言うのだ。

甘やかすな。マザリーニ。)

そうですね・・・分かりました。城に帰りましたら、王妃と懇談し、

王妃に目を

覚まして貰いましょう。今のままでは王の愛したトリスティンは終わりますと・・・。

(そうするが良い。喪に服したいなら尼にでもさせるべきよ。)

厳しくも温かいお言葉、マザリーニ、目を覚ましました。国のため、彼女達にも

目を覚まして頂きましょう。

私は間違ってた。王女ばかりに国の憂いを語りかけてたが子供には理解出来ないだろう。

しかし王妃はどうしたのだ？

王の崩御から国からも行政からも身を引いてしまい、城に引き籠もる始末。

王家の禄を喰らう身ならば、王家の責任を取って貰うべきだ。

私が甘やかしてたのが最大の原因よ。

城に帰ったら、このマザリーニ。首を落とされようと、王妃に目を覚まして貰おう。

オヤシロ様、ありがとうございます・・・。

あうあう、本当に最悪の時になる時期だったのです。

あのマザリーニ。もう少しで症候群が発症する寸前だったのです。

誰にも言えず、心の闇が蔓延してたのです。

危ない所でした。

その頃・・・。

「むう、ボクはどうしてこんな城で王子してるの？
沙都子、クマのヌイグルを渡せなくてゴメンね。
魅音、今頃どうしてるのか・・・。」

ハルケギニアの憂鬱（後書き）

最後に出た方、ご存知の方居ませんか？
詩音が泣いて喜ぶ方ですけど。

アルビオンにて・・・(前書き)

むうが登場します。

アルビオンにて・・

アンリエッタですわ。

今日も王族の勤めとして魔法学院の親善訪問です。

はぁ・・・・・。

私は何故、王女なのでしょうか？

王家に生まれたため、私は王女としてのアンリエッタのみを求められ、

アンリエッタとしての個人、女性としての私は封殺されています。

確かに恵まれた暮らしはしていますが、ただそれだけ。

お母様は父上の喪に服してしまい、私も王家も放棄されてしまいました。

気楽なモンですわ・・。

私も王家など放棄してしまいたいのですわ。

私も年頃の女性。

素敵な男性とお近づきになりたいと思うのが普通です。

ですが、私は籠の鳥。

決して大空には飛び立てぬ哀れな鳥です。

学院の生徒さんと私は殆ど同じ年頃。

なのに私は自由も謳歌出来ず、毎日マザリーニと魔法衛視隊に守られ、

国政に関わる日々です。

・・・・。あ、あれはルイズ・・・・。懐かしいわね。

彼女もこの学院に居たのかしら？

後で調べてもらって夜にでも彼女の部屋を訪ねて見ましょう。

愚痴くらいは聞いてくれるわよね？

「アレがトリステインの女王?? 私の方が綺麗よね? ダーリン♪」

「キュルケ、私の使い魔に抱きつくな。ケイイチも!! デレッツとしない。」

「圭一くん? どうして鼻の下が伸びてるのかな? かな?」

「けいちゃん、オッパイが好きならオジさんのをいくらでも触らせてあげるから。」

「圭一、ロリツルペタもいいものなのですよ。にぱ〜。」

「や、止めてくれ〜!! 男の尊厳がああ。」

「ケイイチ、君を見てるとボクの二股なんて哀れなモノに見えるのだが・・・。」

アンリエッタが来てるにも関わらず、使い魔の圭一を中心にカオスとなつてたのだ。

ナム~~~~♪

アンリエッタの一行の中に髭も凛々しい魔法衛視隊の隊長が居た。

名をジャン・ジャック・ワルドと言う。

彼はロリだったのだ。

それも激しいロリータコンプレックス。

その彼がツルペタリカを見逃すハズが無い。

「ムムムム。素晴らしい。今まで色んなツルペタ見たが、彼女はまさに」

芸術だ。黒髪につぶらな瞳。そして知性のある顔。それなのにロリ

ツルペタ。

まさにボクの求めてた究極のロリ。

彼女に猫耳と尻尾を付けたら……。イカン。勤務中に鼻血を出すトコだった。

しかし素晴らしい。何とか近づきになりたいモノだが……。

ン??アレはルイズ。彼女の知り合いなのか?

それなら……。」

ワルドは何かを思いつき、ニタッと笑った。

その夜……。

「ルイズさん、オレ、もうそろそろコルヴェールさんの部屋に帰りたいんですけど。」

「黙りなさい。アンタを野放しにして置くと、キュルケやミオンに浚われるわ。」

こ、今夜はこの部屋に居なさい。」

「ゲッ。だってココ。ルイズさんの部屋ですよ。」

「か、構わないわ。今まで放置してたけど、アンタも私の使い魔よ。使い魔とメイジは一体同心。常に一緒に居るのが普通なのよ。」

アンタも私を守りなさい。」

「ミオンもレナも居るでしょ?」

「あ、あの子達は別な任務があるのよ。これからアンタが私の身边を護衛しなさい。」

先日の紫電を飛ばし大騒ぎになった日、彼女も魅音の母、茜同様、カリィヌから圭一を落す様に指令が来てたのだ。

もし地球に彼を逃がしたら、ルイズは勘当すると言われたのだ。

カリィヌも婿にするならヤツが良いと判断したのだろう。

キュルケも今では夢中になってしまってた。

さ、どうする？ 圭一・・・。

すると・・・

ルイズの部屋のドアをノックする音がしたのだ。

「圭一、護衛の役を果たしなさい。敵かも知れません。」

「了解ですつ。」

圭一はドアに素早く近寄り、懐から小型のナイフを手につ。そして、

ドアを慎重に開けると、フードを被った女性らしき人が立ってた。

「どちら様ですか？」

圭一が丁寧言いながらも、眼前にナイフをちらつかせる。

フードの女は・・・。

「あ、怪しいモノではありません。この部屋に住むルイズ・フランソワーズに

会いに来た旧友なのです。」

「それならフードを取って頂けません？ 目一杯怪しいのですが。」

「せめて部屋に入れて頂けたら。」

圭一は頷き。無言で彼女を拘束し部屋に入れドアを閉める。
スルスルとフードを脱ぐと・・・。

「あ、アンリエッタ様。」

「ああ、ルイズ。懐かしいルイズね。そう、アンリエッタよ。」

「しばらく御待ちください。ディクトマジック。アンロック。」

ルイズは手馴れた感じで部屋の防音、アンロックをしたのだ。

「妃殿下、お久しぶりですね。」

「ええ。本当に。懐かしいわ。ルイズ。」

「あ、あのおお。」

「妃殿下。そこの彼は私の使い魔です。怪しいモノではありません。」

「まあ、貴女って人を使い魔にしてるの？」

「ええ、自慢の使い魔ですわ♪」

「羨ましいわね。私も使い魔が欲しいわ。それもこんな彼みたいな
♪」

アンリエッタはツツツと圭一に近寄り、胸を押し付けたのだ。

「ちよっ、妃殿下様。止めてください。」

「あら？国の民の使い魔なら私の使い魔でもあるのよ。遠慮は要りませんわよね。

ルイズ♪」

アンリエッタはラッキー♪と思ってた。

自分の周囲に居るのは年寄りか同姓ばかり。

それがルイズの部屋に來ると、自分の心にズキューン♪と來る異性の男のコ。

彼、女装させてもイケるわ♪

「妃殿下、お戯れされるなら、お歸りをして頂きますが。」

「あら？貴女も私を邪険にするのね。私には貴女しか友達は居ないと言うのに。」

アンリエッタはヨヨヨと嘔泣きをして、ルイズに訴える。
だが。。

「姫様、嘔泣きしても私には通用しませんわよ。ケイイチ、彼女は嘔泣きの名人です。

騙されてはなりません。」

アンリエッタはチツと舌打ちして、態度を改める。

「ルイズ、本当に久しぶりね。貴女に会いたくて宿舎を抜け出して來たのよ。」

「迷惑な話ですね。姫様。もう夜も遅いのでお帰り願いたいのですが。」

「そんな冷たい事を言わなくても……。ルイズうう。」

「あーもう……。分かりました。姫様、貴女、何か頼みがあるのでしょ？」

「何時もそうだったのですから分かります。早く仰ってください。」

「コホン。なら私のお願いを聞いてくださる？ルイズ。」

「出来る事ならです。さすがに戦場に逝けとか言われたら、即座に断りますが。」

「……………そのおお。お使いに行って欲しいのですが……………」

「ドコにですか？」

「ア、アルビオン……………」

「まさに戦場じゃありませんか！今、レコンキスタとか言う連中とアルビオン王国が

戦闘状態なのは私でも知ってる事ですよ。私に死ねと言うのですか？正気ですか？姫！！」

「そ、そんな……………」

「私も命は一つ。負ける戦いには関わりたく無いのです。第一どうやってアルビオンまで逝けと言うのですか？」

「そ、それはああ。」

すると、そこに使える邪神。
羽入が登場。

「あああう。ルイズ、話は聞いたのです。
そんなお使いに貴女が行く必要は無いのです。」

「ハニユー。じゃどうするの？」

「このアホ姫に自分で逝かせればいいのですよ。送り迎え位ならボクがしてあげるのです。」

「あ、あのおお。」

「あ、始めましてなのです。ルイズの使い魔をしてる神の一人。
羽入と言うのです。アホ姫、始めましてなのです。」

「私はアホ姫なんて名前ではありませんが。」

「子供に戦場にお使いに逝けと言うのはアホ以外の何者でも無いのですよ。」

アホ姫。」

「グッ……。そ、そうですわね。でもどうやってアルビオンまで？」

「ボクは神なのですよ。行き先が分かってるなら人間の送迎など簡単なのです。」

アホ姫も自分でお使いに行けて幸せになれると思うのです。」

そこへ他の使い魔、魅音、詩音、レナ、沙都子、リカが参上。

「こんな楽しそうな事、けいちゃん一人だけに行かせるのは勿体無いわ。」

「羽入？何故ボク達を無視してたのですか？場合によってはキムチを・・・。」

「あうあう、リカ、それに皆、ごめんなさいなのです。そうなのですね。皆で行きましょう。」

「わ、私を無視すんなええ。この使い魔達いい。」

結局、全員でアルビオンのニューカッスルに転移する事にした。善は急げである。

「も、もう着いた。確かにニューカッスルですわ。」

「へええ。ココがアルビオンか。」

「で、姫様。誰に御用があるのですか？」

「ここの王子様です。あああ、あの頼りなく儂げなサトシ様。アンリエッタは貴方に会うために戦場を越えてきました♪」

「へ？サトシ様??」

さすがにサトシの名前には敏感な詩音だ。

「ええ、ハンサムですが、とても心の優しい方ですわ。
本当に虫も殺せない優しい方ですの。女装させたらさぞや……。ジ
ュルリ……」

城の前でワイワイと話してたら城の衛兵が問いかけて来た。

そしてトリステインのアンリエッタと分かると城の中に入れてくれ
たのだ。

そして……。

「久しぶりだね。アンリエッタ。むう……」

「サトシ様、お久しぶりです。」

「そこに居るのは？？まさか、魅音、沙都子？？」

「お、お兄様ああ。」

「サトシきゅううん。」

何と行方不明だったサトシが王子の格好をしてこのアルビオンに居
たのだ。

どうしてこうなったのだ？

それについては次回を待て。。

アルビオンにて・・・(後書き)

更新に手間取りました。

次回はサトシの過去が明らかになります。

アルビオンにて・・・2（前書き）

サトシの告白と、今後です。

アルビオンにて・・・2

むう・・・

ボクは北条悟史・・・だったのだけれど。

気づいたらサトシ・ウエルズ・デューターと言う長い名前の異国の王子になってたのだ。

困った。

沙都子にクマのヌイグルミを買い、興宮のオモチャ屋を出た所までは覚えてるのだが。その後の記憶が無いのだ。

魅音にも色々と謝らないといけない事もあったのに。

どうしたら良いのだろうか？

そんな事を考えてたら、ボクの住む城、ニューカッスルをレコンキスタと言う

革命軍の攻撃に晒されてた。

ボクではどうする事も出来ない。

困った。

そんな事でワタワタしてたら、子供の頃遊んだ記憶のあるアンリエッタがボクの城に

来たのだ。それも・・・。

「そこに居るのは？？まさか、魅音、沙都子？？」

沙都子と魅音、それに・・・アレ？魅音が二人居る・・・。

「サトシきゅううん。」

「お兄様 あああ。」

魅音の一人と沙都子が抱きついて来た。

「魅音、沙都子、元気だったかい？ボクは何時の間にか異国の王子になってたよ。」

アハハハと笑う顔はサトシくんだった。

私の好きだったサトシくん。

何時の間にか消えてしまってた彼。

その彼が、目の前で王子様になってたとは・・・。

「サトシくん、私、本当は詩音と言うのです。あの時は姉の魅音と入れ替わってたの。」

ウソを言っててごめんなさい。そして始めまして。

園崎詩音です。」

「むう、そうだったのか？監督もボクを騙してたのだね。」

「ご、ゴメンなさい。私、あの頃は家からも勘当状態だったの。」

なので魅音と入れ替わるしか貴方に会う事が出来なかったのです。」

ボロボロと泣きながら詩音はサトシに謝る。

「むう、いいよ。ボクだって何時の間にか雛見沢から異国の王子だもん。」

沙都子、クマのヌイグルミを渡せなくてゴメンね。

ボク、何時の間にか異国の王子になってたのだよ。」

「いいのですわ。元気でいたのなら。」

私はどこかでお兄様が生きてると信じていましたから。

それにしても、こんな異界で会えるとは。。。」

「あ、あのおお。サトシ様。このお二人とは面識があるのですか？」

「アンリエッタ。黙っててゴメンね。ボクはアルビオンの王子になる前は、

北条悟史と言う異界の子供だったんだ。

何時の間にかこの国の王子になってただけだね。」

サトシ様の話では、異界で普通の子供だったと言う。

何らかの原因で、この世界に来てサトシ様になられてたとの事。

「サトシ、こんなトコで生きてたんだね。」

「キミが本当の魅音だね。久しぶり。気づいたらこの国に居たのだから。」

「レナだよ。サトシくん。生きてて良かったわ。」

「レナ。元気そうだね。」

「よっ、始めましてだな。オレはお前の後に転校して来た前原圭一。ヨロシクな。」

「圭一でいいかな？ボクもサトシでいいよ。ヨロシク。」

ボクも元は雛見沢の出身。

彼等とはアツと言う間に、昔の部活仲間となれた。

それにしてももう一人は誰だろ？

アレ？確か・・・アレは・・・。

「サトシ、落ち着くのです。思い出さなくても大丈夫なのです。ココには誰も君を責める人は居ないのです。」

むう、分かったよ。それにしてもこの子、誰だろうな？

「あうあう。紹介が遅れて申し訳ないのです。リカの親戚の羽入と言います。」

「そうだったんだ。始めまして。サトシです。もう北条では無いけど。」

「お兄様はどこに居てもお兄様ですわ。」

「アハハハ。そうだね。サトコ。」

「あのおおお。私、ルイズ・ル・ブランド。ラ・ヴァリエールと言います。」

サトシ様、始めまして。」

「やあ、キミが何時もアンリエッタが話してた幼馴染のルイズか？ボクがサトシ・ウエールズ・デューダーだよ。ヨロシクね。」

私達はアンリエッタと共にこの国に羽入の魔法で飛んで来たと告げた。

そして今、アルビオンは滅亡の危機に瀕してると言うのだ。このままではサトシきゅんは・・・。

「い、イヤですわ。またお兄様と離れ離れになるなんて。」

「そうですわ。レコンなんて連中。この詩音様が・・・」

「むう。そんなに心配してくれてありがとう。でもどうしたらいいのかな・・・。
ボクじゃ戦い方も分からないし、このままではこの国の父も殺されてしまう。」

「サトシ、俺達の村の雛見沢もな。

この前凄い戦いがあったんだよ。それでも俺達は勝った。

この部活のメンバーとルイズさんとでね。

困った時はな。誰かに相談するんだよ。

それが仲間だろ？サトシ。」

「むう・・・。そうだね。ボクも皆に相談したら良かったんだ。」

「そうよ。サトシきゆうん。私達でレンコンななて・・・くけけけ。」

「お兄様を困らせるヤツ等なんて、私達で・・・。」

とりあえず、この国の滅亡を防がないとサトシの命が危ないと言うのはキマリ。

ならレコンキスタを壊滅させたらいいのだ。

作戦はどうしょ・・・。

「にぱ〜♪サトシ、それならいい作戦を思いついたのです。」

リカちゃんの思いついた作戦とは。

まず、ルイズのディスプレイとか言う魔法で敵の装備を無力化。

羽入の話では、彼等の大半が死体だと言う。なんかの魔法で操られてるというのだ。

それを解除したら大半は土に帰るとか。

残りは魔法に操られてるらしい。

本当の敵は数百人位と言う。

それならレナ達や普通の兵士でも対応出来る。

「むう……。凄いね。そんな事が出来るなんて。」

「サトシきゅんはココで待っていてください。私達が勝って来ますから。」

「そうだぜ。雛見沢分校部活メンバーの強さを見ててくれ。」

サトシの父のジェームズ一世も作戦に賛同してくれた。

決行は明日、早朝。

レコンキスタめ。明日の朝日がお前達の最後の朝日よ。

今宵は最後の夜を楽しめ。

くけけけけけ。

さとしきやううん♪

アルビオンにて・・・2（後書き）

レコンキスタが次回で壊滅します。
くけけけけ。

アルビオンにて・・・3（前書き）

アルビオン戦が始まり、終わります。

アルビオンにて・・・3

アンリエッタですわ。

今回は思いがけない事で、サトシ様に直接お会いできてしまいました。

でも、彼、転生者だったのですね・・・。

ルイズの使い魔の皆様と同じ世界の方だったとか・・・。

ですけど、私は負けませんわ。

こんな上物の男性なんて滅多に居ませんもの。

これだけ傍げで保護欲を持たせてくれる男性なんて、レアモノですわ。

シオンだったかしら？彼女も狙ってるらしいわね。

私は女王よ。

フン。

負けて溜まりますか。

その夜はパーティだった。

本当なら玉碎覚悟のパーティとなるはずだったが、部活メンバーの作戦で勝てる要素が見つかり、決戦パーティとなってしまった。

「サトシの仲間達よ。始めまして。我がこの国の国王、ジェームズ一世じゃ。」

「父上、彼女がボクが以前から話してた、異界の妹、サトコです。」

「この世界のお父様、北条サトコですわ。私もこの戦いに関わりません。」

お兄様を困らせるヤツラは殲滅しますのでご安心ください。」

サトコの上目遣いにジェームズは「ズキューーン」と来てしまった・・・。

「よ、良いのだ。サトコ。お前もワシの娘じゃ。サトコ・デューダーと名乗るが良い。

我が娘、サトコよ。」

「ほ、本当ですか？私も娘にしてくださいさるのですか？」

「サトシの妹なら当然じゃよ。」

「良かったね。サトコ。」

「お、お兄様ああ。」

出たわ。

サトコのジジ殺しが。

アレには私でも適わないわ・・・。

でも良かったわね。サトコ。

大好きな兄と再会出来て。

羽入もサトシの心の傷を守ってくれたみたいだし。

雛見沢に帰ると、彼等の迫害は続くかも知れない。

それに叔母殺し。

犯人は恐らく・・・。

だからこの世界で生きるといいと思うわ。

幸せに生きてね。

サトシとサトコ。

「ルイズ。ボクが説明した作戦は理解出来ましたか？」

「任せなさいって。」

レコンだかレンコンだか知らないけど、私達の国を脅かそうと言う悪党は、

このルイズ様の魔法でペペとやっつけてしまうわ♪」

「油断は禁物なのです。ボクもルイズに魔力を供給しますので、魔力切れにはならないと思うのですが、万一と言う事があります。今宵は早めに寝て、体力と気力、魔力を保全してください。」

「わ、分かったわよ。ハニュー。」

それにしても私の使い魔のサトコがアルビオンの王家に入るとはね・
・。」

本当にビックリしてしまった。

まさかサトコの兄がサトシ様とは。

何度かお会いした事があるが、本当に男の方なの？と思う程、儚げで脆い方。

アンリエッタ様が熱中するのもムリは無いと思う。

ただ、戦いには絶対に向かないタイプです。

だってアリでさえも見逃す方ですよ、彼・・・。

ま、いいわ。

明日に備え、早く寝てしまいましょ。

そして早朝・・・

「ルイズ。今から最大規模の魔力を込めて敵陣に向けてデイスペルを放ってください。

彼等の大半は魔法で操られてる死体です。」

「分かってるわよ。ハニユー。全力でデイスペルを唱えるから魔力を補填してね。」

「任せるのです。付近の精霊も協力してくれてるのです。敵の魔力も頂くのですよ。」

「そ、そう・・・なら心配いらないわね。じゃ敵が目覚める前に・」

「ええ、殺ってしまったってください。」

「んじゃ逝くわよ・・・デイスペル・・・・。」

ルイズが全魔力を込めてレコンキスタ陣営に向けデイスペルを放つ。すると、敵陣の兵士が次々と倒れて土に帰って逝った。

その他に、寝返ってた幹部が正気になり、敵の幹部を打ち倒し始めたのだ。

「ルイズ、GJなのです。敵の崩壊が始まりました。

部活メンバーの皆、今がチャンスなのです。

同士打ちしてる連中以外を倒してください。それと敵の親玉が魔法の指輪をしています。

それが敵の要です。奪い取ってください。」

レナと圭一は自分の得物を持ち、敵陣に殴りこむ。

詩音と魅音は竜に跨り空からブレスを浴びせ、サトコは兄を困らせてた連中に対し、

最大規模のトラップを夜の間に仕掛けてたのだ。

「ヴギヤアアア。な、何だ。この穴は？」

「おーほほほほ。トラップの醍醐味は仕掛けた罠にハマル連中を見る事ですわね。」

昨夜から徹夜で仕掛けた甲斐がありますわ。」

「むう、サトコのトラップは相変わらず凄いね。敵に同情してしまうよ。」

「お兄様、敵に情けは禁物ですわ。敵対したら、殲滅あるのみですわよ。」

「むう……。そうなんだろうけど……。」

「素晴らしい。さすが我が娘、サトコじゃ。」

ジェームズ一世はサトコに惚れ直してた。

この子が居たら我が国の防衛力は膨大なモノになろう。

絶対に我が国と正式に縁組してもらわないと、と……。

「あーはははは。圭一くん。楽しいね。」

「ああ、レナ。敵に情けは要らないもんな。」

「そうだよ。圭一くん。」

レナと圭一はガンダールヴの能力全開で敵を次々と打ち倒していた。

羽入は、魔力を使い果たし、寝込んだルイズを寝かすと、
気配を絶ちレコンキスタ陣営深くに潜入してた。

「ムムムム。どうした事だ。我輩の魔法が利かなくなってるぞ。」

オリバー・クロムウエルは秘宝によって操ってた死体兵士が土に帰り、
精神を乗っ取ってたアルビオンの貴族が正気に帰った事でパニック
になってた。

羽入はクロムウエルの時間を止め、
ソツと指から秘宝（アンドバリの指輪と判明するのは後のこと。）
を抜き取ると放置。

クロムウエルは何時の間にか指輪が消えてた事で、もうダメだ・
と諦めの境地になり、
陣営から逃げ出そうとしてた。
そこへ・・・。

「居たぞおお。敵のクロムウエルだああ。」

アルビオン兵士に包囲されてしまった。
クロムウエルの捕縛でレコンキスタは壊滅。
寝返ってた貴族も正気に返り、アルビオンに忠誠を誓う事で許して
貰ってた。

「なんかアツケなかったね。」

「殆ど張子の兵士だったもんな。山狗の方が千倍は強かったよ。」

「ルイズさんの魔法も凄かったね。アツと言う間に兵士が土になってたもん。」

「むう、皆、本当にありがとう。ボクは何の役にも立たなかったね。」

「そんな事はありませんわ。お兄様が居たから皆も協力したのですよ。」

「そうよ。サトシきゅん。私達だって人間。かわりの無い世界には関わりません。」

サトシきゅんが居たから、私達も全力で戦えたのです。」

「そうだぜ。俺達部活メンバーは仲間は全力で助ける。」

「異界のサトシの仲間達よ。本当にご苦労だった。我々の国はキミ達のおかげで

救われた。どう感謝して良いのかも分からない程だ。」

「王様、いや、今からはサトコの父親になる王様。

俺達は仲間の危機は自分達の危機。助けるのが当たり前です。

どうか彼等を幸せにしてあげてください。それだけが俺達の望みです。」

「ウム。約束しよう。我が娘、サトコはプリンセス・サトコとして

わが国の姫とする。」

「あ、ありがとうございます。新しいお父様・・・」

「サトコ、良かったね。」

「わ、私もココに残りますわ。王様、メイドでも構いません。この城に私も置いてください。」

「チョッ、詩音。アンタここに残る気？」

「ええ。サトシくんが居る世界が私の居る世界ですわ。いいでしょ？サトシきゅん。」

「むう・・・父上、どうしましょうか？」

「構わぬ。我が国の人材は払底してるのだ。この様な強力な友人は居て下さいと頼みたい位だ。
シオンだったか？我が城にようこそ。」

「王様、お世話になります。」

「意義ありいい。」

「どうしたんだ？アンリエッタ。」

「わ、私も残りたいですうう。」

「だってトリスティンに帰らないといけないだろ？」

「ぐっ、、ヴェーーン。」

泣き叫ぶアンリエッタの頭をサトシは撫でてあげてた。

「昔もこうして撫でてあげてたね。アンリエッタ。」

でも帰らないとダメだよ。マザリーニさんも心配してるだろう？」

グズグズと泣きながら、アンリエッタは諦めてくれた。
そして・・・

「皆、色々とありがとう。しばらくはゴタゴタしてるから中々遊びには行けないと思うけど。」

「夏休みの間はコッチに居るから。サトコの転校手続きはしておくね。」

「頼みますわ。私もこの国で生きて行きますから。」

「サトコ、幸せにね。」

「リカ。私・・・」

「大丈夫よ。どんな世界に居ても私達は？」

「親友ですわよ。当たり前では無いですか！」

「元気でね。」

「オネエ、ばっちゃんとお母さんにはヨロシクね。」

「イヤな役目ね。怒られても知らないわよ。一応連絡はしておくけど。」

こうしてアルビオン戦役はアツと言う間に解決してしまった。

ルイズ達一行は羽入の魔法でトリスティンに転移。

マザリーニから大目玉を食ったのは後のこと。

アルビオンにて・・・3（後書き）

サトコと詩音が残る事になりました。

難見沢にて・・・(前書き)

いよいよ商売が始まります。

難見沢にて・・・

マザリーニです。

昨夜から姫の姿が見えず、大騒ぎになる所でした。

今朝、ルイズと一緒に彼女の部屋に帰ってたのを発見。

今まで彼女達を叱ってた所です。ふうう。

それにしても、まさかアルビオンに行ってたとは・・・。

しかもレコンキスタを壊滅させて来たですと？

私もレコンキスタ関連の情報は集めていましたが、まさか一日で壊滅させるとは。

どんなマジックアイテムを使って戦ったのですか？貴女達は？

「あうあう。マザリーニ。始めましてでは無いのです。」

ハテ？誰でしょうか？

「あうあう。オヤシロなのですよ。ボクが。」

「へ？あのオヤシロ様ですか？」

「そうなのです。今回はアンリエッタをアルビオンまで招待してあげたのです。」

「そ、そうでしたか。で、もしや・・・。」

「いいえ、レコンキスタを倒したのは彼等なのです。」

ボクは手伝いをしたのみです。ですが・・・。」

「皆まで言わなくても分かります。彼等の事は国家機密にしろと言

うのでしょうか？」

「その通りなのです。アルビオンの王にも自分達で倒したと言えと告げてあります。」

それからしばらくマザリーニと歓談したのです。

アルビオンは平和になった。

レコンキスタは壊滅させたが、背後が不明なので用心するべきと。そしてアルビオンの王子、サトシは我々の国の友の生まれ変わり。そう言うビックリしたが、納得はしてくれたみたいだ。

アルビオンの戦いの実態は絶対に国軍には言わない事。

特にルイズが政治利用されるなら、我々はルイズを連れて異界に消える。

だから絶対に漏らさないで欲しいと頼んだのだ。

「フム・・・そうですね。確かにミス・ルイズが政治利用されてしまうと、

国が二つに割れてしまいます。分かりました。このマザリーニ、お約束します。」

「お願いしますのです。その代わりボク達で出来る事は出来る範囲で相談に乗るのです。」

「そう・・・ですか。でしたら異界の特産品とかこの世界では生産されていないモノの

輸入とかは出来ますか？トリステインは特に特産品が皆無に近いので、財務が底を尽きかけて

いるのですよ。恥ずかしい話ながら。」

「それは構わないのですが、支払いはどうするのですか？我々は子

供なので
お金は無いのです。」

「この国エキュー金貨を鑄潰して金塊にして支払うのはいかがでしょう？」

「即答は出来ませんが、可能かも知れません。」

「でしたら、金塊を準備しておきますので、是非輸入を検討してください。」

「あうあう。分かったのです。魅音の実家が金持ちなので、相談して見ますのです。」

リカ、魅音を交えて話を突き詰めた所、お魎に相談して見ないと確実な事は言えない。

一度、雛見沢に帰り相談して見る事にしたのだ。

「マザリーニ。ボク達は一度雛見沢に帰って来るのです。荷物を持ち込む場合、機密を保つためにも、この学園の土地の一部を借りたいのです。」

「フム。了解です。で、希望の場所がありますか？」

「コルヴェール氏の研究棟の隣に倉庫と家を作って欲しいのです。持ち込むのを見られたく無いので、コレは早急にお願いしたいのです。」

「分かりました。腕利きの土メイジに命じて、明日までには完成させておきます。」

「お願いしますのです。ではボク達は雛見沢に帰って見ます。明日までは滞在して欲しいのです。」

「分かりました。では明日まで学院にて御待ちしております。」

ボク達は全員集まると、雛見沢に転移したのです。

＞詩音とサトコが居ないのは仕方ないのです。

「お魎、お魎は居るのですか？」

「何だね？ おや、オヤシロ様じゃネーか？ それに前原のボンも。詩音はどうしたんだね？」

お魎には秘密は逆鱗に触れると思い、包み隠さずすべてを話した。特に詩音の事では驚きはしたが・・・。

「フム。んじゃ詩音は生まれなかった事にしたるか？ 双子は居なかった。生まれたのは魅音のみ。そうすればアレも幸せになれるじやろう。」

「ば、ばっちゃ。」

「魅音、お前にゃ苦劳かけるがアレも色々和不憫な生活を強いてた。アレが幸せになれるのなら、この家には生まれなかった事にしてやる位しか出来ないからの。」

「し、詩音も本当に喜ぶと思うよ。ばっちゃ。」

「この家に生まれた事で、お前等には迷惑をかけた。」

二人とも仲良しなのに、一人は居なかった事にされ、一人は幼子なのに刺青を背負わされた。

本当にすまんかったの。魅音、詩音。」

お魴は正座して、魅音。この場には居ないが詩音に向け深く詫びたのだ。

「んで、あの国に対する商売かい？なら、茜も呼ぶかい。商売なら損の無い取引したいからの。」

お魴は興宮の茜に電話し、一時間もすると茜も護衛を引き連れ、屋敷に來た。

「おや？詩音は居ないのかね？」

「茜、それは後で話す。今は仕事の話じゃ。」

そしてお魴は皆と話をし、トリスティンとの取引はGO!となったのだ。

対価はエキュー金貨で支払う。

鑄潰すのは基本的に園崎組が請け負うので不要。

品物は様子を見ながら少しづつ増やす。

当初は流通しててもおかしくない、調味料や鍋、紙、筆記道具などで。

「それでいいと思うのです。では、品物の仕入れをお願いするので。」

「運ぶ場所はどうするのかね？」

「トリスティンは学院の倉庫を設置しますので、そこになります。雖見沢は……。この屋敷の一部に倉庫は作れませんか？」

「ん？ 難しくは無いがの……。茜、簡易倉庫ならどれ位で作れる？」

「プレハブなら明日でも作れますよ。母さん。」

「プレハブで良いかの？」

「バッチコイなのです。」

何時も羽入の魔法で往復するのは時間の無駄なので、設置した倉庫にワールドドアを設置。

そのドアを潜り抜ける事で誰でも簡単に異界との往復が可能になった。

ただし、誰でも来られると困るので、双方の倉庫には嚴重な仕掛けがされていた。

それは後の事にして……

「あうあう。これでOKなのです。これでボク達は何時でも帰れるのです。」

「羽入、本当にご苦勞様。茜、羽入にエンジェルモートのシュークリームを

ご馳走してあげて。」

「リカちゃん、モチロンですよ♪羽入ちゃん。ありがとうございます。いました。」

「あうあう。楽しみなのです。」

こうしてハルケギニアと雛見沢は商売が可能となる。

園崎組はますます強固な資産を保持し、雛見沢に多額の投資が出来る様になった。

まずは分校が鉄筋の建物になるのだが、それも後の事。

難見沢にて・・・（後書き）

羽入のワールドドアの設置に悩みましたが、双方に倉庫を作る事にしました。

ワールドドアもその中にあります。

トリストインにて・・・（前書き）

更新が遅れてすいませんでした。

トリステインにて・・

詩音ですわ。

まさかばっっちゃま、私が居なかった事にしてくれるとは。
ありがとう。ばっっちゃま。

お姉から話を聞いた時は、正直、耳を疑いましたわ。
爪を剥ぐ事も覚悟していましたので。ええ。

サトシくんのためなら、もう一度、爪を剥ぐ事も厭いませんわ。
でも、居なかった事にして貰えるとは・・。
ありがとう、ばっっちゃま。

「むう、詩音、良かったのか？」

「ええ、私の幸せはサトシきゅんの隣ですから。」

「ねえね。私達とこの城でずっと一緒なんですわ。」

「ええ、サトコ。だから・・。ブロッコリーを食べるのですよ。」

「ヒエエエエ。止めてください。ねえね。」

ニューキャスルは今日も平和だった・・。

「ミオン様、今回のお取引、本当にありがたい話でした。」

「んっ、今後なんだけどさ、シエスタの父さんが私の従兄弟なんだよ。

だから、今後は彼等を取引先にして欲しいのよ。」

「そ、そうですか。そうすると？」

「トリスティンでの園崎グループとなります。

代表は園崎タケル。秘書として娘のシエスタが付く事になります。」

「結構です。すると、タルブ村が今後の取引先になりますか？」

「それなんだけど、転移倉庫がココに固定してしまったから、ココに転居して貰う事にしたいのよ。出来る？」

「むう……。でしたら、学院の近辺の土地を国から譲渡します。そこを園崎グループのトリスティン本店とされたいかがです？」

「・・・それで結構です。ウチのぼっちゃんも私に決済を任せてくれましたので。」

こうしてシエスタは学院のメイドを退職。

ソノザキ商会に就職する事になった。

「私達がこんな立派なお屋敷に住んでいいのですか？」

「そうですよ。ミオン。」

「タケル叔父さん、シエスタ。私達も向こうの世界に帰らないといけなくなります。

ですが、誰にでもこの仕事を任せる訳にはいけないのです。

幸いにもタケル叔父さん、シエスタと言った私達の血族が存在してました。

雛見沢とタルブ、そしてトリスティンのために頑張って欲しいんです。」

「・・・分かった。アカネ姉さんにも頼まれたし。頑張るよ。ミオン。」

シエスタは園崎グループの秘書として辣腕を揮い、後にはトリステイン最大規模の商人となるのだが、それも後の話。

「マザリーニ。アルビオンに攻め込んだレコンキスタの背後は判明しましたか？」

「それが・・・。」

他国と言う点が判明したのみで、後がプツリと切れていました。」

「不明・・・と言う訳ですね？」

「ハイ。」

「そう言えばレコンキスタの親玉から掠め取った指輪があるのですよ。」

「へ??? 掠め取ったって???」

「ハイなのです。ヤツからボクが抜き取りました。」

「そ、それはお手柄でしたね。」

「ヤツはこの指輪で死人を兵士に、貴族の脳を操っていました。」

「何と・・・。死人を兵士に?」

「ハイ。普通の指輪では無いと思い、ボクが姿を消して背後から抜き取ったのです。」

その直後に死体兵士は土に。操られてた貴族は正氣に戻りました。」

「むう……。凄いマジックアイテムと思います。それはどうされました？」

「神以外には手の出せない異空に保存してあります。真の持ち主が分かりましたら教えてください。」

ボクが責任を持って返納しますから。」

「そ、そうですか。それは助かります。」

「この世界の精霊の持ち物と思うのです。」

「分かりました。何か判明しましたら、お知らせ致します。オヤシ口様。」

マザリーニとの歓談を終え、ボクはリカ達とお茶を飲みに出かけたのです。

茜がエンジェルモートのシューを沢山持たせてくれたのですよ♪嬉しいのです。

これがあるならボクは何度でも戦えるのです。

「もきゅもきゅ、本当にこのシュークリームって美味しいわね。ハニー。」

「そうなのです。ルイズ。シューがあればボクは地獄の鬼とだって戦えるのですよ。」

「お、オニって……。ま、反論は出来ないわ。甘味は正義よね。ハニュー。」

「はううう。レナも同意なおお。ウマウマなおお。」

「喜んでくれてありがとう。ところでさ、シエスタの従兄弟が首都で飲み屋を

開業してるらしいんだけど、あまり流行っていないみたいなのよ。そこで……。皆、バイトしないか？」

魅音の話ではシエスタの従兄弟がトリスティーナで「魅惑の妖精亭」と言う居酒屋みたいなのを

営業してるらしいが、あまり儲かっていないとか……。

そこで何かいい方法は無いかと相談があり、エンジェルモートをハルケギニアに持ち込む事に

なったのだ。そのバイトにルイズ、羽入、リカ、圭一を使いたいらしい。

あの世界を知る人間で無いと理解出来ない点多々あるので、初期段階だけでも……って事らしい。

「はううう。またアレを着るのかな？ かな？」

「にぱっ！ ！ ボクは構わないのです。お金はもらえるのですよね？ 魅音？」

「オレは当然裏方だよな？ さすがに異国で恥は晒したく無いぞ。」

「な、なんか分からないけど。私もするのおお？？」

「いや、悪いと思うんだけどね。最初の二週間でいいから、何と

かお願い。」

こうして五人はトリステイナーナでバイトする事になったのだ。

「始めまして。私がこの魅惑の妖精亭の主人、スカロンです。」

「シエスタの従兄弟に当たる園崎魅音です。スカロンさんも私の身内になるのですよ。もっと気軽にしてください。」

「そ、そうですか。今回は色々とうございます、ソノザキさん。
で、コスチュームとは？」

「調整が必要なので、今日は私達が着てる分だけです。
しかしこの世界なら絶対に大ヒットします。私達の国でも最新鋭のコスチュームですから。」

「た、確かに。しかし凄い破壊力ですね。」

「大中小と揃えましたからね。一部、特殊な性癖の方のために、彼にも着て貰いましたが。」

「シクシク、魅音。生涯恨むぞ。」

哀れ、圭一もエンジェルになってたのだ。

「このお店の名前も硬いので改名してもらいます。
新しい名前は・・・」

こうしてハルケギニアに「エンジェルモートトリステイン店」が開業したのです。

スカロンもエンジェルの格好になり、店を仕切りだしたのです。言葉遣いも硬いのが無くなり、飛んでしまいました。

「さ、今宵も開店しますわよ♪エンジェルの皆さん。

このミ・マドモアゼルと共にお店を盛り上げましょう♪」

「す、スゲーな。スカロンさん。最初はガチガチの硬派だったのがウソみたいだ。」

「いいんじゃない？　こう言うお店は楽しまないと損だよ。けいちゃん。」

「オレ、大人じゃ無いもんな。」

「オジさんが大人にして・・・グギャっ。」

「魅音。それはR18なのですよ。」

「り、リカちゃん、ゴメン。ほんの冗談だがね。」

「魅音のは冗談では済まないのですよ。協定を無視したら・・・。分かっているのですよね？」

「も、モチロンだよ。リカちゃん。」

「なあ、リカちゃん。協定って何だ？」

「男の子は知ってはならない女の秘密なのですよ。」

「そ、そうか。。じゃ聞かない。」

「それがいいですよ。圭一。」

ちなみに協定とは、圭一争奪協定の事です。

抜け駆けは禁止。

圭一が気づくまでは女から手出しはダメ。

そう言う協定が雛見沢組では出来てました。

圭一のニブさは世界でもトップクラスなものですから。どうなるか？

トリステインにて・・・（後書き）

ハルケギニアにもエンジェルモートを作りました。

この世界では鼻血ブーモノでしょうね。昭和日本でも画期的でしたから。

スカロンは固い口調で登場させました。

原作とは違うルートで開発したので。

私事ですが、体調を崩し寝込んでいました。更新遅れて申し訳ありません。

復活しましたので、また更新頑張ります。

トリステインにて・・・2 (前書き)

話が進みません。

もう少しお待ちください。

トリステインにて・・・2

圭一です。

最近、部活の仲間が変なのです。

いえ、頭が変とか言うものではありません。

態度がおかしいのです。

オレはニブイとかバカにするけど、そんなにニブいのですか？

そう言えば昨日は惜しかったな。

いや、魅音が大人にしてくれるとか言ってたのですよ。

そりゃ魅音ならバッチコイですが・・・。そうすると、あの一族も付いて来るのです。

はあ・・・簡単には出来ません。

オレもヘタレです。

レナもいい子なんですが、発狂するとガンダでも止められませんからね。

リカちゃんはツルペタですので、まだまだです。

魔法学院のキュルケさんは、少し恐いんですよ。

魅音のオツカサンに似た雰囲気があり、躊躇しますね。

ルイズさんはプライドが高すぎです。

何を悩んでるかって？そりゃ今宵の晩飯です・・・。

グギャツ！！

「圭一？私達の事を考えてて悩みは晩飯の事ですって？」

「さすがのオジさんもキレちまいそうだよ。クケケケケ。」

「アーハハハハハ。圭一くん？死にたいの？かな？かな？」

「ご、ごめんなさい。オレが悪うございました。」

「「ムリ!!」「」」

グシャツ・・・。

オヤシロ様、教えてください。オレはどうしたら良かったのですか？

（バカは死んでも治らないのですよ。あうあう）

ハルケギニアと雛見沢の通商は軌道に乗りつつあるのです。

取引は基本的に王家と園崎グループみの取引。

他国からの通商は受け付けず、販売路は王家の独占。

ハルケギニアでは希少とされる塩、胡椒、石鹼や紙と言った製品が
格安で販売されると、

ガタガタだった王家の資産もたちまち建て直され、負債はすべて完
済。

各地の貴族に貸し出しも出来る程になる。

トリステインの貴族の大半は不思議に思ったが、王家に口出しも出
来る訳も無く、

王家に借金を重ねるのみとなる。

「マザリーニ。計画はうまく進行してるのですね。」

「ハイ。オヤシロ様。ソノザキグループとの取引は極秘ですので、彼等に知られる事はありません。」

そして、彼等には膨大な債務が増えつつあります。」

「あうあう。無能な貴族は債務を盾に潰すのが一番なのですよ。無能は犯罪なのです。」

「・・・そうですね。今まで我々は貴族だからと甘やかして来ました。それがこの国の疲弊を呼んでいたのです。」

「あうあう。それに気づけるマザリーニは大したモノなのです。それはさておき・・・」

アホ王妃はどうしてるのですか？」

「あの方は未だに引き籠もって出て参りません。どうしましょ？」

「叩きだすとか言わなかったのですか？」

「言いました・・・が。」「私を叩き出すですって？このトリステイン王妃の私を？」と、騒ぎ出しましてね。」

「予想された事なのです。ちなみにまだ再婚とか出来る年齢なのですよね。」

「ハイ。まだ三十代後半です。」

「それなら退役させてチョンガー貴族にでも押し付けるのです。無能を王家で養う義理は無いのですよ。」

「と、申されても。」

「そこで、先日のアルビオンの戦いが生きて来るのですよ。」

「どう言う話でしょ？」

マザリーニと羽入の会談を要約すると、まず王妃はモットとか言うチョンガー貴族に

押し付け王家から退役。文句は言わせぬ。

引き籠もりを養う義理は無い。

そしてアンリエッタと圭一の婚姻。（あくまでも仮初の・です。）

圭一はアルビオンの戦いで敵を打ち倒した英雄。

充分、王女との婚姻の価値もある。＞アルビオン王家の太鼓判もあります。

ただし、双方共に若いので、婚姻は婚約のみ。

アンリエッタは魔法学院に通わせ氏族との交遊を勉強して貰う。

適齢になったらアンリエッタが即位。

それまではマザリーニが基本、仮の王となる。

マザリーニも仮とは言え、王の存在に相応しい人間として振る舞い、王家の資産をアンリエッタ即位までに増やすのが最低条件。

資産を着服したり減らした場合は即位直後に投獄も可としてある。

圭一はアンリエッタとの婚姻までに、魔法を学び戦いを経験しておく。

「マエハラ殿に断らなくても良いのですか？」

「部活仲間には断ってあるのです。圭一には言わないでおくのです。」

よ。」

「・・・そうですか。では、オヤシロ様のお望みの通りに。」

圭一には悪いのですが、この国を第二の雛見沢にするためにも居心地の良い国に

しておくべきなのです。無能貴族が居ると面倒なので、借金を型にして退役させるのです。

圭一はあくまでもスケープゴートのつもりですが、その気になったら別に構わないのです。

彼は稀に見る英雄素質のある人間。

重婚もバッチコイなのですよ。

レナも魅音もリカもルイズもOKでしたのです。

邪魔だったのが引き籠もりオカンのアンリエッタ母。

木偶の坊にメシを食わす義理も無いので、叩き出すのですよ。

ヤツのせいで国は疲弊したのですから。

アンリエッタと圭一には魔法学院で楽しく青春を過ごしてもらい、

この国で婚姻。

生まれて来る子供が正当な王となれる日まで頑張ってもらうのです。ルイズ、魅音、リカ、レナは正当な妾として圭一に貰って貰うのです。

もちろんボクもお零れに預かるのですよ。

雛見沢の惨劇も圭一が居なかったら千年も連鎖が続いたと思うのです。

彼にはこの国でも頑張って悲劇を防いでもらうのです。ああああ。

「・・・ツルベール君。」

「何ですか？ボケ老人殿。」

「ワシ等・・・」

「影が薄いのでしょうか？分かった事です。」

「ウム・・・マザリーニ殿もソノザキ商事との取引で、この学園に良く宿泊されるからのお。」

「私もハゲが止まりましたのに、未だに独身ですよ。どうしてくれるのです？」

「んなモン知らんわい。」

「「はあああ・・・」」

「コルヴェール先生！！」

「誰ですか？学院の校長室にノックもせず。」

「圭一です。助けてください。」

「助けてくださいとは？」

「オレ、殺されてしまいます。」

「意味が分かりませんが。」

要約すると、何時の間にか五人の妻持ちにされてしまった。
まだキスもした事の無い少年の自分がですぞ。
どうしてこうなったか分からない。
何とか助けてくれ・・・との事。

「五人の妻持ちなんて……。リア充、氏ネ!!! ですぞ。」

「オレの意思は無視なんですよおお。まだ恋愛もした事ないのに。」

「まあ、ケイイチくん。状況を楽しい方に考えて見たらいかがですか?」

「どう言う事です?」

「五人の女の子と自由恋愛出来ると考えるのですよ。」

「へ??? 五人の女の子と自由恋愛?」

そう、五人の妻が居るのならそれぞれを別な女の子と考えて恋愛フラグを作ればヨシ!

なのです。五人とは正当な関係になれるのだから嫉妬される事もナシ。

ある意味天国にもなれる。

「むう……。コルヴェール先生。凄い考えですね。」

オレもポジティブに考えを改めて見ます。」

「要らない嫁が居たら私にも回してくださいね。」

「アハハハ。さすがに犯罪になります。自分で探してください。」

圭一はこうして五人の妻持ちとなるのだが、それは後の事。

イロエ○な話になるのは彼女達が成人した頃なのです。

それまでに彼はこの国で地獄の時代を送る事になるのですから、こ

の程度の

オマケは無いと可愛そうなのですよ。あうあう。

トリステインにて・・2（後書き）

圭一がリア充人間になりそうですが、それは先の事です。
それまでは戦乱の中で頑張って貰います。

ある国にて・・・(前書き)

厄介な人が出現します。

ある国にて・・・。

余はガリアの王、ジョセフだ。

余は退屈しておった。

弟のシャルルを暗殺し、妻にエルフの薬を飲ませ狂わせ、娘は過酷な任務を押し付ける極悪王よ。

だが不思議な事が起きた。

系統魔法の使えなかった余が火の魔法を使える様になったのだ。

そして、王家の秘宝がヒッソリと消えて居た。

何時の間に消えたか、誰も知らぬが。

余が後押しして来たレコンキスタも何故か簡単に敗北してしまっただ。

面白い。

適わぬ相手に打ち勝つ事こそが余の望みよ。

アルビオンはさておき、目障りなトリステインでも喰らうとしようか。

そう言えば、余の使い魔をしたたミュージが帰って来た。

良くぞアルビオンから帰れたモノよ・・・。

「ジョセフ様、私は貴方様のシェフィールドではありません。」

「む??? どう言う事だ?」

「私はある異界で生きて来た研究者の成れの果てです。以前はミヨと申していました。」

「む、ミヨか。良い。何故ミヨが余のミュージの姿をしているのだ?」

「ハイ。この国のアルビオンですか？その戦いに於いて、シェフィールドさんは

戦死されております。私も異界の戦いにて戦死した人間です。お互いの魂の波長が合ったのでしょうか。

亡くなられたシェフィールドさんと私の魂が融合。

今の私となりました。」

「ムッ、そうか……。ミヨは何故、余の前に姿を現したのだ？そのまま消えても良かったと思うのだが。」

「私の怨敵がトリステインとアルビオンに居たのです。」

「怨敵とは？」

ミヨが語る。

異界の戦いに於いて惨殺されてしまった。魂の輪廻も適わぬ異界で彷徨ってたが、

アルビオンの戦いで敗れたシェフィールドとミヨの魂が呼び合い融合。

敵が雛見沢の糞ガキだと知ると、何としてもヤツ等を殺す。

その怨念でこの国に来た。

異界では頼る人もツテも無いミヨがシェフィールドの知識を頼りにジョセフを頼って来たのだ。

「私の望みは殺戮。それだけです。」

「むう。素晴らしい考えだ。余も退屈してたが、余に吊りあう考えの主は中々おらぬ。

ミヨよ。余の手足となってこの世界で暴れて見るか？」

「ジョセフ様の望みが私の望みです。

どんな惨い事でも私は受け入れます。私は異界である研究をしてた人間です。

人間の脳の内部まで詳しく知るこの世界唯一の人間です。」

「面白い。ミヨよ。お前に好きなだけの予算と権限を与えよう。ただし、余にすべて報告するのが義務だが。」

「ありがたき幸せです。ジョセフ様。お心のままにミヨは働きます。」

ジョセフはミヨにシェフィールドが使ってた研究棟を丸々与え、必要な金子。

有能なメイジ。そして生贄を与え、人々を惨殺出来る噴霧器を開発させたのだ。

結果は噴霧して数時間で発狂。

隣人を襲い殺し惨殺を続け、最後は喉を掻き毟り自死。

簡易版雛見沢症候群発症の薬の完成である。

「素晴らしい。ミヨよ。お前の研究は本当に素晴らしい。

これなら我が国と勘付かれる事無く、怨敵も惨殺出来るだろう。」

「まだまだです。

できましたら、もう少し簡易に出来ると思います。このまでも戦闘には耐えられますので、

敵地にて必死隊を編成すれば敵を殲滅出来ると思います。」

「さすがミヨだ。余はお前に会えたのは僥倖だったと悪魔に感謝するぞ。」

「神では無く、悪魔・ですか？」

「余は神など信じぬ人間だ。既に人間としての感情はすべて捨てた。家族も国もすべて生きるための糧でしか無い。」

「素晴らしい。わたしでさえも到達出来なかった域にジョセフ様は達せられたんですね。」

私も悪魔に勝利をお願いすべきでした。」

「最後まで気を抜かぬ事よ。気を抜いたら余達は奈落に落ちるだけだからのお。ミヨ。」

「御意です。ジョセフ様。」

あうあう。大変なのです。

まさか三四がジョセフに付くとは。大事なのです。

「リカ、大変なのですよ。」

「羽入、どうしたの？」

「鷹野が蘇っていたのです。」

「異界で永劫に魂も彷徨うんじゃない無かったの？」

「そのハズだったのですが。あああう。」

アルビオンで戦死してたジョセフの使い魔の女性と鷹野の魂が合体。ミヨとなってしまったのです。」

「ど、どう言う事よ？」

「つまり、鷹野とジョセフの使い魔をしてた女性の魂が呼び合い、合体したのですよ。」

あの永劫に彷徨うハズだった異界の空間から呼び出されたのです。」

「た、大変じゃ無い。鷹野はさぞやボク達を恨んでるでしょうね。」

「そりゃーもう。恐らくゴキブリを惨殺するよりも憎んでいるのです。」

そしてヤツは・・・。」

何と鷹野改めのミヨはジョセフの庇護の下。雛見沢症候群を発症出来る薬を開発。

既に噴霧器で発症可能レベルまで作れたと言う。こりゃ大事だわ。

今はガリアの貧民街でテストしてるとか。前線に持ち出されるのも時間の問題。どうしょ？

「リカ。独りで悩んでも答えは出ないのでしょ。そう言う時は？」

「仲間に相談するのよ。当たり前じゃない？」

「良く分かってるのです。リカ。」

私達は羽入を使いアルビオンの詩音、サトコ、サトシにも伝達。

一刻の猶予も無い。

使われたら終わりだからだ。

ったく厄介な人間が生き返ったモンね。

鷹野。

今度こそヤツは魂も消滅させてあげるわ。

ある国にて・・・
(後書き)

タカノン復活です。

ある国の滅亡・・・(前書き)

ガリアを滅亡させます。

ある国の滅亡・・・

マザリーニです。

オヤシロ様発案のトリステイン王国改造計画は軌道に乗りつつあります。

厄介だった元王妃は、

今はジュール・ド・モット伯爵夫人となり、エロ夫婦となっております。

あの方の引き籠もりの原因は旦那に逝かれ、

抱いてくれる相手が居なくなった事だったのですね。

今はツヤツヤとした肌で、モット邸にて元気に生きております。

エロ男爵として有名だったモット伯爵ですが、最近は疲れを隠せません。

最近は樹木を育てる趣味だとか。

エロはもうイヤと言われております。

どうされたのでしょうか？

幸せに暮らして欲しいモノです。

彼の領は重税は加算しない事が決定しております。

腐っても元は王妃ですからね。

アンリエッタ殿は魔法学院の寮に入られ、青春を謳歌されております。

我侬もすっかり消え、今は普通の少女となっています。

ただ、一部の男子生徒の取り合いで激戦だとか？

頑張ってください。アンリエッタ殿。

「リカちゃま、鷹野が復活したってホント？」

「ホントなのです。羽入が神界を通して見て来たのですよ。」

「ヤヴあいわね。私達を恨んでるでしょ？」

「そりゃーもうなのです。ボクも恨みに任せ切り刻みましたから。」

「同情の余地も無いヤツだったけどね。」

「圭一、どうしたのですか？」

「イヤ、あの鷹野の最後を思い出して、リカちゃんが殺された時の事も思い出してしまったんだ。アレは、サトコが家を飛び出した時だったかな・・・。」

「圭一、思い出す事はダメなのですよ。心の傷は症候群発症の元なのです。」

忘れるとは言いませんが、ムリはダメなのです。」

「わ、分かったよ。リカちゃん。で、鷹野はどうするの？」

「それを今から皆で作戦を練るのです。ヤツはこの世界で雛見沢症候群を発症出来る薬を開発していたのです。既に八割は完成してたのです。」

「ウワツ。マヂでヤヴァじゃん。しかしガリアだったよね。鷹野が居るのは。」

「ハイなのです。」

「何とか潰す事は出来ないかな？国ごと。」

「圭一も考えがダイナミックになって来たのですね。でもかなり危険なのですよ。」

「いや、鷹野が薬を開発した現時点で危険じゃん。アレが生きてたら、この世界も壊滅する可能性が高い。だったら多少の危険は無視してヤツと国を潰すのがいいかも？と、オレは思うんだ。」

「・・・ボクの影が薄いSSなのですが・・・。ゲフンゲフン。

ボクはミョズニトニルンと言うルーンを貰ったのです。雛見沢の作戦では参謀でしか

役立てなかったのですが、この異界ではあらゆるマジックアイテム、その他を使えるのです。

サトコも同じですから、彼女も違う方向で考えてると思うのです。」

「そっか……。で、どうしよう。さすがに国を潰すのはアレだと思うけど、

鷹野の背後だもんね。何とか完璧に潰さないと大変な事になるよ。」

「症候群をこの国に蔓延させられたら完璧にアウトなのです。

アレの事ですから、他人が死のうが痛もうが完璧に考えていませんからね。

特にココは異界です。アレを雇用するジョセフとか言う王も異常だと思うのです。」

「そうだよな。あんなマッド女を雇用するなんて普通の精神じゃムリ。自国の人間で実験してるんだろ？アレを。」

「そうなのです。他人を殺戮しまくって最後は喉を掻き切り自死してしまうのです。」

「うわ……。オレも一回は経験してんだよね。ソレ。」

「思い出す必要は無いのですよ。圭一。」

「ね？そのショーコークンって相当ヤバイの？」

「エルフの大群に襲われるよりもヤバイのです。この世の終わりですよ。

ルイズ。」

「エルフの大群よりって？？大ヤバじゃない？どうするの？」

「それを皆で相談してるのです。さすがに不味いので、手を打つの

も相当の覚悟が
要るのです。」

「ふう……。羽入ちゃん。以前の雛見沢の裏山決戦みたいな異界に
転移する手は
使えないの？」

「あああう。アレは裏山限定だったのでうまく出来たのです。
さすがに異国の国となるとボクだけでは不可能なのです。」

「ネ？ハニュー。そのタカノってガリアの城に居るの？」

「ふえ？？は、ハイ。城の中に研究所があるのです。」

「そしたらさ、城だけ転移は不可能？」

「可能なのです。」

「んじゃ、さ……。」

かなりヤバイ手だが、私達をガリアの城に転移し、姿を現す。
鷹野とジョセフを確認出来たら城ごと異界に転移。

異界でルイズが最大規模のエクスプローションで城を灰燼にし、消
し去る。

城の兵士には悪いが消えて貰う。

ガリアの住民には被害が無く、戦いに勝つにはコレしか無い。
作戦発動は朝餉の時間。

この時間なら研究に向かう鷹野もジョセフも確実に城に居るハズ。
失敗した場合。

つまりジョセフと鷹野が不在の場合、ルイズの忘却魔法で姿を見ら

れた兵士の
記憶を消し去り、再度挑戦。

「危険だけど、確実に鷹野とジョセフを葬るのはこの手だけだね。」

「庶民は殺したく無いもんな。」

「わ、私もよ。フン。見てなさい。」

ガリア王なんてペペペのペで退治してあげるわ。」

「あうあう。一番大変なのはボクなのですが。」

「こっちのエンジェルモートでもシュークリーム作れる様になったから、

作戦が成功したら皆で羽入にシューを奢ろう？」

「あうあう。頑張るのです♪♪」

「「「おう！！」」」

危険な作戦だが、確実に敵を葬るにはコレしか無い。
今回の作戦はトリスティンにも機密だ。

さすがに一国の王を城ごと葬るのは公には出来ない。

記録にも残せない。

作戦は極秘で行う事に決定した。

ある国の滅亡・・・（後書き）

作戦は決定しました。

ガリアの城ごと消し去ります。

次回は犠牲者の話です。

ある国の滅亡・・・2（前書き）

ロマリアが犠牲となります。

ある国の滅亡・・・2

ミヨよ。

ようやくこの身体にも国にも慣れて来た。

しかし本当に雛見沢のクソガキには頭に来たわ。

私がお爺ちゃんのために苦勞して育てた山狗も何もかも潰してくれ、そして私までバラバラにし異界に魂を放置。

無限とも言える時間を漂うのは、体の無い魂とは言え、地獄だったわね。

シェフィールドの魂に呼ばれたのは幸運だったわ。

あのままでは、私は永劫にヤツ等に復讐出来るチャンスは無かったもの。

このガリアのジョセフもいいわね。

こう言う雇用主は理想だわ。

擬似雛見沢症候群発症薬の完成も間近。

これが出来たらヤツ等に鉄槌を下せるわ。

フフフフ・アーハハハハハ。

私は、この異界で神を壊滅させてやる。

見てろ。古手リカ。

「ミヨよ、薬の進行はどうだ？」

「ジョセフ様、もう少しです。今日はB地区の貧民街で試験して参ります。」

「ム、そうか・・・ヨシ。余も見学するでしょう。」

「お姿はお隠しになられて見学してください。」

「構わぬ。どうせ滅びる民よ。余に看取られ逝ける事を幸せに思うぞ。」

このミヨは本当に素晴らしい。

姿は以前のミューズなのだが、頭の作りが根本的に違う。

そして知能は恐らくこのハルケギニアでは最高では無いか？

余も見学してて驚いたが、人間の脳を細かく区分けしてたのは驚いた。

あんな事は誰にも出来ぬ。

また人間の身体の内蔵構造も細かく教えてくれた。

魔法が使えなくても針一本で致命傷を与えられる部位まで。

アレではメイジは要らぬでは無いのか？

余は本当に素晴らしい使い魔に恵まれたようだ。

あの薬の完成が本当に楽しみだ。

「ジョセフ様、では、このマスクを装着してください。」

「ウム。」

「襲い掛かれる危険も高いので護衛は近辺から放さない様に。」

「ウム。」

「では、噴霧して参ります。決死隊員、前へ。」

「ハッ。ミヨ様。」

「お前の死は無駄にはならぬ。
お前野死後家族には膨大な年金を王の名で約束しよう。
任務は簡単だ。」

敵陣の中でこのスプレーを噴霧するのみ。直後にお前も死ぬが。」

「ハッ。ミヨ様。この命はガリアの未来に捧げております。
ご心配なく。」

「では頼む。王も見てるからな。」

「ハッ。ありがたき幸せ。」

こうして名も知らぬ兵士は一本の小さなスプレーを持ち、
貧民街の中でスプレーを勢い良く噴霧始めた。

直後、まず兵士は発症。

近辺に居た貧民の子どもに襲い掛かり棒で撲殺。

周囲の住民もいきなり発症。

多分、家族だろうか？娘に襲い掛かり腸を食いちぎってた。

数時間後、阿鼻叫喚の地獄は生き残りが自分の喉を掻き切り自殺する事で終わる。

残されたのは、完璧な静寂と殆ど原型を留めていない惨殺死体だけだ。

「むう……。凄い。素晴らしい。」

余も色んな殺戮を試みたが、ここまでの殺戮は初めてだ。

ミヨよ。でかした。」

「ジョセフ様、これでほぼ完成です。この貧民街は念入りに焼き払い、封印してください。」

「ウム。約束しよう。ミヨ。これでどの国を攻めるか？」

「手始めに神の国を名乗る隣国のロマリアなどはいかがでしょう？」

「お前は本当に神が嫌いなのだな。ヨシ。ではロマリアに決死隊を送り込むか。」

「それで結構です。決死隊にはスプレー以外の武器は持たせぬ様にしてください。」

「ウム。楽しみじゃ。あの国が地獄の国と変るのが。ワハハハハハ。」

ジョセフは長年、光の国と威張り散らしてたロマリアが消えるのが嬉しくて溜まらなかった。

十数人の決死隊を結成。

彼等を日中のロマリアに送り込み、人通りのど真ん中で噴霧。

ロマリアは阿鼻叫喚の地獄となろう。

直接見れぬのは残念だが、作戦終了後、軍を進軍させ、結果を報告させよう。

数週間後、ロマリアと言う国名はハルケギニアから末梢され封印の国となる。

ある国の滅亡・・・2（後書き）

ミヨも見せ場も無く消えるのは無念でしょう。
手始めにロマリアを牙にかけます。
反撃する暇ありませんね。
ナムゥゥ。

ある国の滅亡・・・3 (前書き)

作戦発動前夜です。

ある国の滅亡・・・3

ルイズよ。

わ、私がヒロインなのにこのSS、私の扱いが悪いわね。

所であのキチガイ女が復活したんだって？

しかも、ロマリアを壊滅させたって言うじゃ無い。

もう猶予は無いわね。

そろそろ作戦を発動される時期じゃ無い？

この戦いが終わったら、私はケイイチと・・・

うふふふふふ・・・

「何やら妄想してる所を悪いのですが。」

「あ、アラ。ごめんなさいね。リカ。どうすんの？

アイツ達、ロマリアを潰したみたいよ。この国も危ないわね。」

「ハイなのです。ですから、明日の早朝、ガリアを襲います。

アイツ達は人を狂わせる薬を噴霧しますので、万一に備え、この薬を飲んでください。」

「コレは何の薬？」

「症候群を発生しない薬なのです。ボクの血から作りました。」

「だ、大丈夫？」

「ボクは雛見沢の女王なのです。八代続いた古手家の集大成なのです。

色々とヤツ等とも研究しましたので、この薬を服用しておけば、

万一敵に噴霧されても狂わずに済むのです。」

「そ、そう……。準備がいいのね。」

「薬の効用時間は一日なので、作戦開始発動時間に全員同時に服用します。」

そう……。

もう一刻の猶予も無い。

ロマリアは既に死の国。まったく油断してたわ。

アイツ達は確実にスプレーをボク等に噴霧すると思います。

なら効能を消す薬を服用させておかないと、確実に誰かが犠牲になるのです。

発症したら最後なのですから。

作戦は明日、一番で行う。

とにかく確実に王と鷹野を抹殺しないと、失敗だからだ。

城に居る兵士は皆殺しにしないと。

気が重くなるが、同情はしない。

ボク等と未来のためだ。

迷惑な王に仕えた事を恨め。

「なあ、リカちゃん。」

「何ですか？圭一。」

「武装って、デルフだけで大丈夫かな？」

「圭一はボク達の護衛に徹して欲しいのですよ。」

特にルイズさんが呪文を詠唱してる時が一番危険なのです。」

「分かったよ。オレは彼女とリカちゃんを守るんだね。」

「お願いします。」

「リカアア、偵察して来たのです。あうあう。」

「羽入、ご苦労様。どうだった？」

「ハイなのです。アイツ達はロマリアを潰せた事で大喜び。今は鷹野も王のジョセフもドンチャン騒ぎで酒を飲んだのです。」

「絶好のチャンスね。じゃ明日の早朝、アイツ達の城に転移。レナ、圭一。悪いけど暴れてね。魅音、詩音。ギーシュのモグラで城に穴を

掘りまくって城をガタガタにしてね。羽入、アンタが一番大役よ。私達を転移させ、次に城ごと異界に転移。

ジョセフと鷹野を確実に殺したら、ルイズさんのエクスプローションで

城を消滅。見届けたら私達も帰るわ。

とにかく確実にあの二人を殺るわよ。今度は魂も霧散させないとね。鷹野はしつこいから。」

「あうあう。本当なのです。まさかあの異界から蘇るなんて。普通は出来ない事なのですよ。」

「そうよね。今回は徹底的に潰すわ。アイツ達に生き返られたら終わりよ。」

「皆、今日は早めに寝てコンディションを最高にしてて。褒章も勲章も貰えない極秘の作戦だけど、私達の未来のためよ。」

頑張りましたよ。」

「「「オウウウ！！」」」

ちなみにサトコは呼ばなかった。

せっかく兄と再会出来たのに、万一の事があつたら彼にも悪い。

念入りに準備はしたけど、人間の仕事には完璧は絶対に無いのだ。

被害も皆無に抑えたいが、下手すると誰かが犠牲になる。

この作戦が終わったら、当面の敵は居ないと言う話だが、油断は出来ない。

魅音の従兄弟も住む国だ。

出来る限り悪の根は絶やしておきたい。

鷹野、今度こそはアンタの魂も終わりよ。

いや、絶対に消し去るわ。

ある国の滅亡・・・3（後書き）

何とか犠牲無く成功させたいですが。
人間失敗ゼロは不可能なのです。
次回は戦闘開始です。
サトコは居ません。

ある国の最後・・・（前書き）

ガリアと鷹野の最後です。

ある国の最後・・・

それは突然だった。

私達が深夜まで勝利の宴会をし、城の寝室でジョセフと同衾してた時。

どおーん、どおーん。

異様な爆音が城の広間から聞こえ、私もジョセフも飛び起きた。兵士の絶叫も聞こえる。

只事では無い。

「ジョセフ様、何か起きています。」

「ウム。状況が分からぬ。ココは余の国。そして余の居城だ。何故、こんな事が起きてるのだ？」

「悪い予感がします。ジョセフ様、マスクを装着して防護服を着てください。」

「ウム・・・」

ジョセフを伴い、城の広間に行くと・・・

「あら？タカノンじゃ無い？良くも異界から帰れたわね。」

あのツルペタのガキが居た。

どうやって来たかは、相変わらず分からないが、とにかく非常識な事が起きてるのは確実。

何とか状況を把握しないと。
すると・・・。

「お前等は何者だ。余の城に襲来するとは、命は要らぬのか？」

「クスクス。貴方が無能王として有名なジョセフね。

始めまして。フレデリカ・ベルンカステルと申します。

人呼んで永遠の魔女。

貴方をミヨと一緒に素敵な旅に招待しますわ。クスクス・・・」

リカがジョセフに告げると、姿を消した羽入に・・・。

（羽入、ヤツラは居たわ。飛ばしてしまいなさい。）

（リカ、アイアイサーなのです。あうあう。）

すると城は一瞬で異界に転移。

「ま、まさかココは・・・」

「タカノン？懐かしいでしょ。貴女が彷徨ってた異界よ。今度こそは魂も粉碎してあげるわ。

圭一、レナ。全力でヤツラを殲滅しなさい。

魅音、詩音。頼むわよ。」

異界に来たらコチラのモノよ。ヤツラの魔法は発動出来ない様にこの異界の精霊には、

羽入が精霊にお願いしてた。ヤツラの魔法は発動不可能。

コチラは使い放題。だが・・・。

「フッ。こんな事もあるかと思ってたわ。兵士、全員風上に逃げなさい。」

そしてマスクを。」

そう言うが早いか、鷹野ことミヨはスプレーを噴霧。

確かに脳に来る薬ね。

前もって対応してて正解だったわ。

数分経過しても症状が変わらない私達を見て、鷹野はパニックってた。

「ど、どうなってるの？確かに貴方達に発症剤を噴霧したのに。どうなってるの？」

「何の対策も練らずに敵陣に入るバカは居ないのです。」

山狗が居ない鷹野ってオオバカなのね。クスクスクス。」

バカにはしても事实は教えない。

万一、ヤツが復活したらヤヴァいじゃ無い？

城の床はヴェルダンデが縦横に掘りまくった穴に兵士がどんどん落ちてた。

ジョセフも火の魔法を発動しようと杖を振ってたが、手ごたえナシ。

「ミヨよ。どうなってるのだ？コレは。」

「ジョセフ様、恐らくココが私が彷徨ってた異界です。」

城の兵士を全員集めてください。

バラバラに動いてたためにされてしまいます。」

「ほほお。ココがお前が彷徨ってた異界か？すると余も最後か？面白い。余を本当に殺せるなら殺して見ろ。」

「ジョ、ジョセフ様・・・」

「ミヨよ。余はあの世界には飽きてたのだ。妻も先立ち、子も国も可愛く思えず、

たった一人の弟にも手をかけてしまった悪魔が余だ。

その余がお前等と共に異界に果てる。

最高に面白いでは無いか。

骨も魂も残らぬ、余の最後。例え敗れても本望と思うぞ。

ミヨよ。」

「ジョセフ様、何故そんなに簡単に諦めてしまうのですか？」

「なら聞こう。お前はどの異界から脱出する術があるのか？」

余は否だ。魔法も使えず、城ごとガリアから消えてしまった我等だ。帰れたとしても城の跡地には隣国が攻め入った後だろう。」

「い、イヤだあああ。私はもう永遠に魂として異界を彷徨うのは絶対にイヤだああ。」

（ミヨよ。なら私の身体を返せ。オヌシがジョセフ様も裏切ると言うなら、

私はお前から私の身体を返して貰うまで。）

異空から声が聞こえるや否や、ミヨはガックリと地に倒れ、そして・・・。

「ジョセフ様、シェフィールドです。」

「おお、余のミューズか？ミヨはどうした。」

「彼奴はジョセフ様を裏切ろうとしてました。私はジョセフ様のためならと、

彼奴に身体を明け渡していましたが、裏切るなら話は別です。

叩き出しましたわ。ジョセフ様。」

「そうか……。だが、余も終わりだ。見ろ。窓の外を。

闇とも空とも知れぬ空間に余の居城は彷徨ってる。」

「ジョセフ様、私は貴方と一緒に異界でも地獄でも構いません。どうか永劫にお傍に置いてください。」

「そ、そうか……。分かった。ミューズよ。」

「もう話は終わったかしら？」

「フレデリカか？この戦は余の負けだ。もう帰る術も無かろう。

好きにするが良い。」

「ええ、モチロンですわ。この世界を見た人間はすべて消えて貰うのが私達の流儀。

貴方がミヨを雇用し、ハルケギニアに災厄を齎そうとしなかったら、私達と貴方は

合間見える事も無かった。悲しい運命の錯誤なんです。ジョセフさん。」

「ミューズよ。そんな訳らしいぞ。」

「結構ですわ。でもせめて苦しまない様に一瞬で終わらせてください。」

それだけが私の望みです。」

「ジョセフ、シェフィールド。そしてその辺を彷徨っている鷹野。今から貴方達は魂も残さず消します。苦しみはありません。そして巻き添えを食った兵士の皆様。

戦いに情けは出来ません。潔く散ってください。では、皆様。さようなら・・・。」

リカがそう言うのと全員がブシュツと言う音と共に消え、残されたのはジョセフとシェフィールド。そして若干の生き残り兵士のみだった。

「いよいよ最後みたいだな。ミューズよ。」

「ハイ。いよいよですわね。ジョセフ様。」

「ウム。」

「ジョセフ様、最後に私と・・・。」

シェフィールドが何かを言おうとし、ジョセフの手を握った瞬間。

ギョオツドオオオオオオン。。。。

灼熱の閃光と爆発が起こり、ジョセフ達は蒸発。城は塵も残さず消滅。

その後、鷹野の魂は羽入が探し出し念入りに潰してしまってた。今度こそは鷹野も終わりね。クスクス。

ジョセフ、シェフィールド。

次の世界では夫婦に生まれなさい。

それにしても戦いつて本当に段取りと準備が必須ね。

今までの百年で一番楽だったわ。今回は。

それにしても鷹野が生き返るとはね。

人間の怨念はバカに出来ないわ。

もう生き返る心配は無いと思うけど。

クスクス。

鷹野、次は蟻にでも生まれるのね。

もう人間に生まれるのは止めなさい。

迷惑！！

こうしてガリアは滅び、ガリアはゲルマニアに併合されてしまった。

ジョセフの娘、イザベラは作戦のため城を離れて無事だったが、城が消え、王家の資産も何もかも消えては、この国に居ても危険。姿を変え、ゲルマニアに平民として潜り込み余生を送ったと言う。後に雛見沢から帰国したタバサと出会い、家族として生活を始めるのは後の話。

ある国の最後・・・（後書き）

イザベラは後にタバサと再開させます。
ジヨセフ亡き今は、家族として暮らすのが彼女も幸せでしょう。

ラグドリアン湖にて。(前書き)

ラグドリアン湖での話です。

ラグドリアン湖にて。

リカよ。

ようやく山場は越えたわね。

ジョセフが潔い男で助かったわ。ホントに。

鷹野が少しバカになってたのは気がかりだけど、異界で狂ってしまったのでしょ。

もう会う事も無いと思うけどね。なむ〜〜！！

「いや〜〜！！ようやく終わったね。けいちゃん。」

「ああ、やつとだな。リカちゃん、参謀ありがとう。やはり戦いは指揮官だよ。」

「うん。本当だよ。おかげで私達は戦いに専念出来たし被害も皆無。」

「そう・・・しばらくは戦いは無いと思うわ。私達も残り少ない夏休みを

楽しめましょう。」

「「「オオオオツ！！」」」

それからボク達は久しぶりに殺伐とした生活から解放された。

ギーシュをからかい、シエスタに日本語を教え、ルイズにツルペタ解消体操を教え、

圭一を女性軍全員で襲った。

ルイズの提案でラグドリアン湖と言う湖にも出かけた・・・が。

「何？ココ。家が湖に浮いてるわよ。」

「おかしいわね。確か、この辺りで園遊会があったハズなのに。」

「モンモン。お前、何か知らないか？」

「し、失礼ね。私はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ
と言う立派な名前があるのよ。モンモンなんて言わないで。」

「長い名前……。これからはオレも圭一・マエハラ・ド・トクガワ
とか名乗ろうかな？」

「何？そのうそ臭い名前。」

「センス無し。」

「最低。」

「スケコマシ。」

と、メチャクチャな言われ方……。

圭一はショックで地面に手を付き、涙で地を濡らしてた。

「にぱ〜♪圭一、ボクのツルペタの胸で慰めてあげるのです。」

「り、リカちゃん……。うおおおん……。」

「ちよっ、リカちゃま。抜け駆けはナシじゃ無かったの？」

「慰めてるだけなのですよ。魅音♪」

「はううう。そしたらレナも慰めてあげようかな？ かな？」

「フン。このルイズ様も使い魔を慰めてあげるわよ。仕方ないわね。」

「お、オジさんもおお。」

もうムチャクチャなのです。

何か話が脱線してしまったので、ギーシュが周囲の百姓に水没してないか、調べてもらってた。

「フム。すると数年前から水嵩が増えてしまい、今の状況だと言うのだね。」

「そうでございます。貴族様。」

「モンモランシー。貴女の領地ですよね？ この辺りは。」

「ええ、そうよ。ギーシュ。ただ、ウチは最近・・・」

「ああ、皆まで言わなくてもいい。分かってるよ。モンモランシー。」

モンモンの父親が領地改革に失敗して多額の債務を背負ってた事はトリストインの貴族なら誰でも知ってる事だった。もっとも最近、他のバカ貴族

もどんどん国に
借金を背負わされてたが。

「モンモランシー嬢、ここの精霊と連絡は取れますか？」

「へ？ハニューちゃん。取れるけど、どうするの？」

「もしかしたらボクが解決出来るかも知れないのです。試しに呼んで見て貰えませんか？」

「え、ええ。いいけど。少し待っててね。準備するから。」

モンモンは羽入にそう告げると、懷から使い魔のカエル、ロビンを取り出した。

「いいこと、ロビン。貴方達の古いお友達と連絡が取りたいの。

これで相手はわたしの事が分かるわ。

覚えていれば・・だけど。じゃあロビン、お願いね。

旧き水の精霊を見つけて、盟約の持ち主の一人が話をしたいと告げてちょうだい。

分かったわね。」

カエルはぴよこんと頷いた。

それからぴよんと跳ねて、水の中に消えて行く。

「今、ロビンが水の精霊を呼びに行ったわ。

見つかったら連れて来てくれるでしょう。」

しばらくすると、湖からモンモランシーの使い魔のカエルが上がっ

て来て

ぴよんぴよん跳ねながら主人の元に帰って来た。

モンモランシーはしゃがんで手をかざし、カエルを迎えた。
指でカエルの頭を撫でる。

「ありがとう、キチンと連れて来てくれたのね。」

モンモランシーは立ち上がると、水の精霊に向けて両手を広げ、口を開いた。

「わたしはモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシー。」

水の使い手で旧き盟約の一員の家系よ。

カエルに付けた血に覚えはおありかしら？

覚えていたら、わたし達に分かるやり方と言葉で返事してちょうだい。」

水の精霊らしき水の盛り上がりは・・

ぐねぐねと粘土がこね上がる様にして形を取り始めた。

水の塊はやがてモンモランシーそっくりの形になってにつこりと微笑んだ。

それから再び無表情になって、水の精霊はモンモランシーの問いに答えた。

「覚えてる、単なる者よ。貴様の身体に流れる液体を、我は覚えている。」

貴様に最後に会ってから、月が五十二回交差した。」

「良かった、水の精霊様。本日はここに居るハニューさんが貴女に

お話があるそうなのです。」

「水の精霊よ。我を覚えてるか？」

「ン？お、も、もしや。」

「覚えてるようだな。精霊、いや、妹、ヤシロよ。」

「お、お姉様。生きてらしたのですか？」

「ウム。我も異界の神として千年の時を過ごした。時にヤシロよ。コレに見覚えは無いか？」

「そ、それは。アンドバリの指輪。私の秘宝です。」

「やはりそうか。見覚えがあったので、レコンキスタのクロムウエルと言う、

賊から取り上げておいたのだ。」

「ありがとうございます。お姉様。」

「良い。所でお前……。住民に迷惑をかけてるな？

即刻、水嵩を元に戻せ。さもないと……。湖にキムチを大量に溶かすぞ。」

「止めてください。お姉様。すぐに戻しますから。」

「あ、あのおお。ハニユーちゃ……。」

「単なるモノよ。我のお姉様にチャン付けだと？（怒）」

「い、いいえ。ハニユー様。失礼しました。」

二人の話を聞いてると、水の精霊は以前、雛見沢の鬼族だったそう
だ。

羽入の妹で、羽入の死後、異界に渡りこの地で精霊となって数千年
生きたそうだ。

「では、お姉様、あの方が私達の？」

「そう、八代続いた巫女、リカよ。リカ。彼女が私の妹、八代よ。」

「始めましてなのです。八代。ボクが古手リカなのです。」

「おお、懐かしき雛見沢の古手神社の巫女。私が貴女の祖先の一人、
八代です。」

「ヨロシクなのです。この地には雛見沢から渡来した雛見沢の住人
も多数居るのですよ。」

「そうなのですか。懐かしいですね。あの山、川。沼。もう忘れて
しまいかけてますが。」

それから、ヤシロ、ハニユー、リカの三人はワイワイと楽しく話し
てた。

そして。。

「お姉様、リカ。そろそろ私も湖の管理に戻らないといけません。
水嵩は元に戻しておきますので。」

「ウム。八代よ。我もしばらくはこの地に居る。また遊びに来るぞ。」

「では、また・・・。」

そう言うのと八代は静かに湖に消えて行った・・・。

「・・・・・・は、ハニユー様、今までの無礼をお許しください。」

見ると、ルイズ、モンモン、ギーシュが土下座してたのだ。

「あうあう。どうしたのですか？」

「まさかハニユー様が精霊様の姉上とは知らず、無礼ばかり言いました。」

「どうかお許しを。」

「あうあう。気にしないでいいのです。」

「そうよ。ルイズ。アレは八代に威厳を持つために言っただけの話。何時もは天然ボケの羽入なのです。」

「天然ボケは酷いのです。リカ。」

「でも、皆。この件は絶対に他国に漏らさないでね。」

「「「ハイ!!」」」

ラグドリアン湖の水嵩はその夜から引き始め、翌朝には元の静かな湖に戻ってた。

困り果てた百姓や住民は大喜び。
モンモン一家の株も上がったそうだ。

メデタシ、メデタシなのです。あうあう。

ラグドリアン湖にて。 (後書き)

水の精霊使えないかな? と思い、八代と名づけました。
羽入の妹と言う設定です。いかがでしょ?

トリストインにて。**(前書き)**

まったりした毎日です。

トリステインにて。

わたしはモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシー。

決してモンモンとか言う、どこかの国のマフィアの刺青みたいな名前ではありませんわ。

しかし・・・、驚きました。

まさか水の精霊様の姉上がハニュー様とは。

さすがに家の家族には内緒にも出来ないので、打ち明けましたわ。もちろんハニュー様とリカ様にはお断りを入れましたけど。

敬語はやりませんと言われましたが、私達一族は水の精霊様の加護の元に生きる一族。

絶対に疎かには出来ません。

しかし、懸念だった水の増加が止まったのは助かりましたわ。

おかげで私達の領地の税収も序所に上がりつつあります。

ありがとうございます。

ハニュー様、ヤシロ様。（ヤシロ様の真名は国家機密にして貰いました。）

「ハニューちゃんって本当に神様だったのね？」

「何時もはヘタレの甘いモノに目の無い駄目神なのですよ。」

「あうあう。リカ。酷いのです。」

「でも水の精霊様の名前は絶対に内緒なのですよ。」

「そりゃもう・・・。知られたら大変な事になるもんね。」

「私も水の精霊様に会いたかったですわ。」

「アンリエッタは公務だったもんね。また連れて行くよ。」

「あ、ありがとうございます♪♪ケイイチ様♪」

「け、ケイイチ。そう言えばお母様が特訓するとか言われてましたわよ。」

「ゲッ。マヂ??? カリーヌさん、確かハンパでは無い強い人なんだよね。」

「ええ、お母様は伝説のメイジ、烈風のカリンと言われてましたわ。」

「スゲ……。伝説のメイジってどんだけの強さなんだ?」

「風の魔法で山が消滅したとか、一個師団の兵が一撃で全滅したとか……。」

「も、もういい。ルイズ。大体想像出来たから。」

聞いた話によると、ルイズ母はハルケギニア最凶の風メイジだったとか?

伝説にまでなってる言うから、どんだけチートなの?

そう言えば魅音のオッカサンも似た雰囲気あるのよね。

あの方も怒らせると恐いとか?

はあ、オレ生きて雛見沢に帰れるのかい……。

帰れてもあのオッカサンにも追いかけれそうな予感が……。

（圭一、その予感は確定なのです。ナム〜〜♪）

ロマリアがガリアにより滅び、ガリア王室が消滅した事で、ハルケギニアは

一時大混乱に陥ってた。

結局、ロマリアはアルビオンが管理。

ガリアはゲルマニアが併合。

ガリアのトリステイン寄りの地区（ラグドリアン湖周辺）を

トリステインに渡す事で話は付いた。

キュルケの実家はゲルマニア王室の命令で、ガリアに引っ越す事になったのだ。

キュルケはこれを期に、トリステインのヴァリエール家に行儀見習い名義で

分家を持つ事にしたのです。

「ダーリン、私ね、トリステインに私名義の分家を持てたのよ♪
これもダーリンが頑張ってくれたおかげね♪」

「ちよっ、キュルケさん。当たってる、当たってる。止めて〜〜！
！」

「ちよっと、ツエルヴスト。いい加減に私の使い魔に手を出すのは止めてよ。

そこ等にいくらでも男は居るでしょ？ 拾いなさいよ。」

「い〜や♪私はダーリンがいいの♪」

「ツエルヴスト。お母様にチクるわよ・・・。」

「ちよっ、ルイズ、止めて。もう冗談は止めるから。」

「お母様にチクったら貴女、どうなるかしら？」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ……。」

キュルケは行儀見習いの理由でトリスティンでの自由な生活が許可されていたのだ。

もしヴァリエール家のカリーヌの逆鱗に触れたら。

キュルケは旧ガリアのツエルヴスト領に強制送還されてしまうのです。

「オーホホホ。ツエルヴスト。何か文句でもあるの？」

「イイエ、ルイズさん。何もアリマセン。」

脂汗を垂らし、キュルケはルイズに土下座してたのです。
可愛そうに。

ガリア滅亡後、雛見沢に避難してたタバサも帰国してたのだ。
以前と違い、表情も豊かになり、クールだったタバサも今は……。

「ケイイチ、そしてヒナミザワの皆、本当にありがとう。おかげで
母も元気になった。」

ガリアも滅びたので、私も追いかける事も無くなった。
本当に感謝してる。」

「皆様、本当にありがとうございました。」

おかげでシャルロットとも異界で楽しく暮らせ、この子と離れてた
数年の月日を
取り戻す事が出来ました。

夫の敵、ジョセフの・・・」

「お母さん、ストップ。それは機密です。」

「す、スイマセン。そうでしたわ。ゴメンなさいね♪」

何かタバサのお母さんてこんなキャラだったの？って感じです。

タバサも帰り、平穏な日が続いてたある日。

オスマン校長の秘書、ミス・ロングビルが羽入にある事を相談に来た。

「ハニュー様、以前は色々と相談に乗って頂きありがとうございました。」

今日も少し相談があるのですが。」

「あうあう、何ですか？」

「実は以前お話した私の妹の事なのです。」

あの娘が外に出たいと話始めまして、少し困ってるのです。」

「・・・。そうですが。確かに、そのままではどうしようも無いです
すね。」

「ええ、で、何とか相談に乗って頂けませんか？」

「・・・。ロングビルさん。今から話す事は誰にも言わないと誓えますか？」

「もちろんです。絶対に誰にも話しません。」

「では・・・。」

ボクは以前、カトレアに使った手で、彼女の身体を再構成しようと考えたのです。

さすがに誰にでも使えませんが、ハーフエルフの彼女なら使っても問題ナシなのです。

その方法をロングビルに話すと彼女は有無も言わず賛成してくれました。

そして孤児の問題も、オスマンを脅し、学園郊外に孤児院を設立。そこに収容し、ティファニアを学院に通わせる事で話が付いたのです。

ロングビルはオスマンの調教に成功したと言ってたのです。

「皆、今からアルビオンに出かけて来ます。

数日で帰るので、お利口さんに留守番してて欲しいのです。」

「・・・オミヤゲを楽しみに待ってるのですよ。羽入♪」

「アルビオンのウエストウッド産のレアモノを持ち帰るのです。楽しみに待つのですよ♪」

ボクはロングビルを連れてアルビオンのウエストウッド村に転移して旅立ったのですよ。

あうあう♪

トリステインにて。**（後書き）**

いよいよ放置してたティファニアを迎えに行きます。

耳に関してはカトレアと同じ手口でエルフの因子を羽入に抜き取ってもらい、

完全な人間にします。

ウエストウッド村にて・・・
(前書き)

巨大な果実の刈り入れ時なのです。

ウエストウッド村にて・・・

あうあう、久しぶりの羽入なのです。

皆、留守番しててと頼んだのに・・・。

「こんな楽しそうなイベントに誘わないなんて、羽入ちゃんってオジさんの事、

嫌いなのかい？ 悲しいねええ。」

「は、はううう。かぁいい森のクマさんとか居るのかな？

お持ち帰りいい。」

「へっへっへっ。オレを誘わないなんて、羽入。人生を損してるぜ。オレ、圭一が居たら皆の人生を千倍は楽しくしてやるぜ！！」

「ヒューヒュー。さすが圭一なのです。未来のハーレム男、頑張るのです。」

「せっかくアルビオンに来たのに、私の事をスルーするのですか？ いくらアルビオンに引越したとは言え、私も雛見沢のサトコですよ。」

「むう。ボクも部活の皆と遊びたいのだけど。いいかな？」

「サトシきゅんの逝く所なら、この詩音はドコでも逝きますよ♪」

「な、何でヒロインの、このルイズさんを蔑ろにするのよ。このSは。

もう少し扱いを良くしなさい。」

「花梨な薔薇の匂いに誘われて、このギーシュも来てしまったよ。モンモランシー、この空の国の空気はキミの心みたいに澄んでいるね。」

「相変わらずサムイ言い方ね、ギーシュ。私はハニュー様の僕よ。」

「最近、微熱も無いのよね。この微熱のキュルケ様が。刺激を求めるために異国に来るのもいい事と思うわ。ネ？タバサ。」

「・・・キュルケ、私はもう・・・」

「そ、そうだったわね。今はシャルロットだったわ。ごめんなさい。」

「・・・全員で来てしまったのですよ。あうあう。どうしたらいいでしょ？ロングビル。」

「もう諦めるっきゃ無いわね。ハニュー様、手っ取り早く済ませられませんか？」

「なら、ロングビルが先行してティファニアに事情を話し、皆に見られない様にして欲しいのです。後では言い訳が大変なのです。」

「分かりました。では、先行し・・・グギャッ。」

一足遅かったのですよ。
既に孤児の全員とティファニアが迎えに来てたのです。

ロングビルは孤児全員のタックルを受け、気絶してしまったのです。

「お、お姉ちゃん。ゴメンなさい。」

見ると、来賓の客全員がある一点に集注してしまい、フリーズしてるのです。

そりゃ固まるわよね。

魅音やキュルケも相当なアレを持っていますが、彼女のアレは。。

「バ、バスト・レヴオリュション・・・。」

圭一がボロッと言った言葉こそが真意なのですよ。

巨大な双璧なのに、引っ込む所は引っ込む。そして出る所は出る。まさに「ボンツキュッボンツ♪」なのです。

ちなみに全員がボクの角に慣れたせいとか、今更エルフ耳位で騒ぐケチな人間は一人も

居なかったのです。それよりも・・・。

「ちよっ、何なの？そのフザケた二つの山は。

胸にメロンでも仕込んでるんじゃないの？冗談ポイツよ。」

「負けた、オジさんも自分の胸には自信を持ってたけど。負けた。」

「オネエと同じです。どうしたらあんなに育つのですか？」

双子姉妹が揃って地に手と膝を付き、泣きを見せてるのです。

「は、はうううう。かあいいいオッパイ。お持ち帰りいい。」

何か全員が耳よりも胸に気を取られ、パニックってたのです。

普通、エルフ耳の方が注目浴びますよね？あうあう。

「皆様、ご挨拶が遅れて申し訳ありません。

私はロングビル姉さんの義理の従兄弟。

ティファニア・ウエストウッドと申します。

皆様、始めまして。」

キッチンと礼をするイイ子なんですよ。

ただ、お辞儀しても二つの山がタユンタユンと揺れるのです。

圭一、涎が出てるのですよ。

後で全員からオシオキを受けるのです。

もう隠す必要も無くなったので、今回のアルビオン旅行の目的を全員に話したのです。

サトシはこの国の王子なので、彼女の父も知ってる。

そしてロングビル一家の滅亡。その他の事も。

影でコッソリとティファニアとロングビルに謝罪してたのです。

生まれ変わっても気配りのサトシなのです。

「ハニュー様、私のこの耳が。普通の人の耳になれるのですか？」

「そうなのです。詳しくは部外秘なので、話せませんが身体の構成から作り直すので、

同族の人間が見ても完璧な人間になれるのです。」

「ありがとうございます。ハニュー様。私も普通の女の子みたいに町を歩けるのですね。

もう目深に帽子を被り耳を隠さなくてもいいのですね。」

「あ、アンタはオッパイをもう少し控えめに……。スイマセン。

黙ってます・・・」

ルイズは相当ティファニアのアレに嫉妬してるのか、二言目には文句を言ってるのです。

そんなにオッパイが欲しいのですかね？

将来は誰でも大きくなるのですが。

ボクも圭一に協力して貰い、搾乳の幸せをもう一度味わいたいですよ。

あうあう。

帰りは二回に分けてボクは往復しないといけないのです。

はああ。

時間外労働手当と残業手当を貰わないとボクは哀れなのですよ。

ウエストウッド村にて・・・（後書き）

やはりティファと出会っていると確実に全員がアレに注目しますね。
ティファの改造は次回です。

ウエストウッド村にて・・・2（前書き）

テファの改造と圭一のオシオキです。

ウエストウッド村にて・・・2

ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ・・・・・・。
もう何回繰り返し返せばいいのでしょうか？

オレは前原圭一。

熱血の14歳だ。

オレが何をしたかつて？

ただ、アル物体に興味を惹かれ、ガン見しただけなんです。

「リカ、また圭一が反省を覆したのですよ。」

「にぱっ♪平石を一枚追加なのです。」

「ヨイツショツと。ケイちゃん。男なら言い訳とか考えてはダメだよね。」

もうオレは言葉も話せません。

何ですか？この江戸時代みたいな拷問は。

ギザギザの刻まれた石の上に正座。

そして平たく重い石を膝の上に。

既に五枚も乗せられてるのです。

意思を強化するためのガンダローンもデルフも持たされず。

既にオレの意識は朦朧としてるのです。

お願いします。誰か、オレをこの地獄から助けてください。

それから二時間。

ようやく女性軍の怒りは収まったのか。

圭一は地獄から生還出来たのです。

もう意識はなく、リカと子供達が圭一を棒でツンツンしてるのです。
ナム~~~~♪

「そんじゃ羽入ちゃん、今からテファの耳を？」

「ハイなのです。綺麗に耳を形成し、普通の耳にするのですよ。
ボクは既に神ですので、この角を消す事は出来ませんが、テファは
まだ若いのです。」

要らぬ迫害を受ける要因になるモノは無くすに限るのですよ。」

そう。

ボクも過去には、この角で凄い迫害を受けたのです。

テファも、今の状態では街で要らぬ迫害を受けてしまうのです。

昔のボクみたいにはなって欲しくないのですよ。

ボクはティファニアを連れ、彼女の部屋で二人になって話始めたのです。

「ハニニュー様、では、私は普通の女の子みたいに町も気軽に歩ける
様になるのですか？」

「ハイなのです。ですが、ボクの魔術は部外秘なのです。

絶対に誰にもボクが施した魔術は話してはダメなのです。

例え、自分の子供や夫、孫でもです。記録してもダメなのです。
約束出来ますか？ティファニア。」

「モチロンです。私も今までの私とは変るのですから。
約束しますので、是非お願いします。」

テファは土下座までしてお願いしたのですよ。
あの大きな山をブルンブルンと震わせて。
ボクは女なのですが、アレは圧巻です。
魅音やボクの胸でもアレは出来ないのです。
ハア・・・。
ついでにアレも改造してしまおうかしら？

閑話休題・・・。

それから数刻・・・。

「ふう、いい仕事が出来たのです。テファ。鏡で自分を見るのです。」

「す、凄い。私の耳が他の皆様と同じになってる。」

「テファには事後承諾になるけど、エルフの因子も取り除きましたので、

将来、貴女が生む子供にもエルフは生まれません。

宜しいですか？」

「もちろんです。子供に私の家族の苦しみを味わせたくはありません。」

本当に、本当にありがとうございました。ハニユー様。」

「もう、感謝はいいですので、早く皆に見てもらおうですよ。」

「ハイ。」

テファはニッコリと笑うと、仲間達の元へと飛び出して行った。
余程嬉しかったのでしよう。

孤児達はモチロン、ロングビルは涙を流して喜んでくれた。
彼女は心底、テファを大切にしてたからね。

テファの改造も圭一のオシオキも終わった事なので、そろそろトリ
ステインに
帰る事になったのです。

孤児の問題もあるので、準備が整うまでテファにはウエストウッド
に残って貰う事
になったのです。もちろんロングビルも。

「じゃ、準備が出来たら迎えに来ますので、少しだけ待ってて欲しいのです。」

「分かりました。では、また会える時を楽しみにしています。」

「」「」「お願いしまーす。」「」「」

こうしてティファニアの改造も終わり、後は後日、
学院近辺の孤児院設置を待つのみとなったのです。

ウエストウッド村にて・・・2（後書き）

圭一のオシオキは手緩かったでしょうか？

その後・・・
(前書き)

エピソードになります。

その後・・・

あうあう。

羽入なのです。

アレから百年経ちました。

ルイズ達は結局、圭一とハーレム婚したのですよ。

壮観だったのです。

魅音、レナ、ルイズ、リカ、サトコ、アンリエッタ、ティファニア、そして、届けこそアリマセンでしたが、ボクも貰ってもらったのです。

圭一が高校卒業と同時にハルケギニアに転居。

合同結婚式をトリステイン王宮にてとりおこなったのです。

圭一はトリステインの王となり、トリステインを取り仕切り、合間に雛見沢の村長も兼務。

忙しい人だったのです。

もちろん身体の管理は妻ゝズでキッチリ管理しました。

ボクも妹のヤシロに頼み、圭一の身体の管理と病気にならない様にしてたのです。

そしたら・・・ヤツめ。

しっかりと圭一を食いやがったのです。

仕方ないのでヤシロもハーレムに入れてあげたのですよ。

ドタバタした数十年が経ち、レナも魅音もティファも、そして他の皆も・・・

ボクを置いて逝きやがったのです。

ボクとヤシロは神なので死ぬにも死ねないのです。

本当に口惜しいのですよ。

リカが最後に・・・

「羽入、楽しい一生だったわ。」

鷹野にも勝てた。

人生を最後まで横臥出来た。

そして異界にて圭一を全員で所有出来た。
すべて羽入のおかげね。

本当にアリガト。

ボクはもう・・ダメみたい。

また生まれ変われたら・・また・・。。」

最後まで言いやがれ。

このダメ巫女は。

ボクはまた独りになったのです。

楽しい時間が長い百数十年だったのです。

圭一も長生きさせたのですが、さすがにリカよりも早く逝きました。

雛見沢とトリスティンの長として頑張ってもらった彼でしたが、
寿命には勝てません。

ありがとう。

圭一。

ボクはリカの死後、再び雛見沢の沼に眠る事にしたのです。

リカやみんなの居ない雛見沢はボクには辛いのです。

雛見沢とトリスティンの通行管理は八代に頼んだのですよ。

もうボクも疲れたのです。

八代。

後はヨロシクなのです。

「羽入。」

「ハニ्यू。」

「羽入ちゃん。」

「キムチ食わすわよ。さっさと起きなさい。羽入。」

「あうあう、キムチは嫌いなのです。

辛いのはイヤなのです・・・?????

り、リカああああ。」

「アンタもコッチに来たのね。」

「ココは??？」

「天国よ。アンタもようやく神の役目から解放されたの。」

「ほ、本当なのですか？」

「その証拠にアンタも魂の存在しか無いじゃない？」

「う、ウレシイのです。これでボクも輪廻出来るのですね？」

「次も雛見沢だといいわね。」

「そうですね。ボクも次は皆と部活をしたいのです。」

「こ、このダメ神~~~~!! 私を忘れるなああ。」

「ルイズも居たのですか？」

ボク達の一生はコレで終わりなのです。

また会う事がありましたら、ヨロシクなのです。

にぱ~~~~~♪

その後・・・
(後書き)

ゼロのなく頃にはコレで終わります。
応援、本当にありがとうございました。
また次の作品でヨロシクお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1286v/>

ゼロのなく頃に

2011年10月23日22時34分発行